

ふるさと人物誌

朝倉に光を掲げた人々



はじめに



朝倉市長 森田 俊介

朝倉市は、平成18年3月に甘木市・朝倉町・杷木町が合併して誕生し、6年目を迎えました。

福岡県のほぼ中央部に位置する朝倉市は、筑後川に沿った肥沃な平野を南に擁し、古処山や馬見山など800〜1000級の山々を北に抱く、自然あふれる地です。小京都・秋月、菱野の三連水車、原鶴温泉に代表される観光資源にも恵まれています。そして、朝倉の歴史や風土を背景に、優れた業績を残した先人たちが数多く輩出しています。

「ふるさと人物誌」では、市にゆかりのある人物で、領国・藩の発展に尽くした人、政治・司法界で活躍した人、産業振興に貢献した人、医学の進歩に寄与した人、教育・研究に力を注いだ人などを取り上げ紹介しています。

この冊子を多くの方々にご覧いただき、先人たちの功績を市民のみならずと共有し、郷土に誇りを持つるまちづくりを進めていきたいと考えています。

私は現在、「親と子と孫が一緒に暮らす朝倉市」を目指し、「日本一のふるさと『朝倉』」づくりに向け邁進しています。私たちの故郷・朝倉に対する理解を深めていただくとともに、次世代を担う子どもたちに語り継ぐための一助となれば幸いです。

終わりに、「ふるさと人物誌」発刊にあたり、調査・執筆にご尽力いただきました編纂委員の方々や、資料提供にご協力いただきました関係各位のみなさまに、心から感謝の意を表します。

発刊にあたって



朝倉市ふるさと人物誌
編集委員会委員長 三浦 良一

報あさくら」で平成18年7月から5年間、合計40回、「ふるさと人物誌」として紹介しました。

執筆は、延べ11人の「ふるさと人物誌編纂委員」が交代で担当しました。写真などを組み入れて親しみやすい紙面を心がけるとともに、人物が活躍した時代や活躍の分野、出身地に偏りがないように出来る限り配慮しました。今回紹介した人物以外にも優れた業績のある方々がありますし、市民からも提案がありました。40回の連載で終了いたしました。

「ふるさと人物誌」の掲載にあたり、多くの方々から貴重な写真や参考資料をご提供いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

このたび「広報あさくら」に連載された「ふるさと人物誌」が小冊子にまとめられて発刊される運びとなりました。多くの市民のみならず、郷土に対する理解が深まり、先人たちの偉業を継承していく気運の向上につながればこの上ない喜びと考えます。

私たちの郷土・朝倉の地には、歴史上それぞれの時代を誠実に力強く生き、郷土社会のために大きな事業を成し遂げたり、優れた業績を残したりした人物がたくさんいます。

平成18年3月、甘木市・朝倉町・杷木町が合併し朝倉市が発足しました。それぞれの市町で郷土の偉人として敬愛、感謝し、その志を継承してきた人物の功績を、朝倉市民の誇りとして共有したいとの思いから、市報「広

表紙題字

森田俊介朝倉市長

表紙版画の詩解説

「花下醉歌」

樽前有客抱琴来、花底春風对举杯
白日斜時宵然醉、玉山頽不待人推

樽前に客有り、琴を抱えて来る

花底の春風、举杯に対す

白日斜く時、宵然として酔い

玉山頽るるに人の推すを待たず

(大意)

酒樽を前にしていると

客が琴を抱えてやって来た

桜の花の下でお互いに杯を挙げて飲んでいると

花を散らす柔らかな春風が杯に吹きかかかって心地いい

(ゆつくり琴を弾き、酒を酌み交わすうちに)

いつの間にか時が経って午後の陽が傾くころ

樽酒と春に酔って意識が薄れ、何だかぼーっとしてきた

こうなるとだれも押さなくても自然に座体が崩れて

ここでごろんと寝てしまいそうだ

表紙版画の作者紹介

佐野至(昭和2年～平成22年)

佐野至さんは、本誌にも登場する佐野東庵や佐野弥平を生んだ甘木高原町の佐野家当主で、郷土の自然と人々を、また芸術をこよなく愛しました。

戦後、甘木・朝倉で中学校の理工系の教師を長年勤め、「ふるさと甘木・朝倉」各地の名所旧跡や日常風景を題材に、躍動感があり、愛情あふれる数々の版画作品を制作。そこに登場する子どもたち、山や川、田んぼや木々、人々の営みなどは実に生き生きとしていて、日本のふるさとの原風景を見るようです。

本誌の企画を最初の段階から主導しましたが、平成22年逝去。謹んでご冥福をお祈りいたします。

目次

執筆者 頁

はじめに

発刊にあたって

領国・藩の発展に尽力した人々

1	戦国時代を翔けた 秋月種実	三浦 良一	6
2	福岡藩筆頭家老 三奈木 黒田一成	安陪 悟	9
3	黒田52万石を救った 栗山大膳	平田 利一	12
4	秋月藩初代藩主 黒田長興	三浦 良一	15
5	三奈木黒田家を救った忠臣 鬼木佐太夫宗直	安陪 悟	18
6	秋月藩中興の祖 黒田長舒	実藤 輝夫	21
7	秋月藩の財政再建に奔走した 間小四郎	三浦 良一	24

政治・司法界で活躍した人々

8	初めての国会議員 香月恕経	八尋 節夫	27
9	自由民権の闘士 県政から国政へ 加藤新次郎	安陪 悟	30
10	戦後司法界の功労者 馬場義統	川端 正夫	33

産業振興に貢献した人々

11	堀川の恩人 古賀百工	松本 憲明	36
12	国境を越えて排水工事に尽力した 松岡家三代	川端 正夫	39
13	福岡藩第一の筑前商人 佐野半平、弥平父子	後藤 正明	42
14	県下第一の養蚕業興隆に尽くした 安陪庄作	宮崎 成光	45
15	織に情熱を注いだ二人 梶原虎次・熊本与市	安陪 悟	48
16	地下水で美田を拓いた 橋本郁太郎	宮崎 成光	51
17	久喜宮に水田を作った 都合徳太郎	平田 利一	54

医学の進歩に寄与した人々

18	わが国種痘の祖 緒方春朔	三浦 良一	57
19	原爆医療の先駆者 調来助	山崎長太郎	60
20	世界で初めてレントゲン胸部間接撮影法を開発 古賀良彦	山崎長太郎	63

教育・研究に力を注いだ人々

21	邑に「学び舎」を起こした 井上節堂	八尋 節夫	66
22	近代日本哲学の父 井上哲次郎（巽軒）	川端 正夫	69
23	『あさくら物語』を著した 古賀益城	松本 憲明	72
24	『大西郷全傳』の著者 雑賀博愛	松本 憲明	75
25	朝倉考古学の先駆者 坂本真鈴	松本 憲明	78
26	歴史編纂の先駆者（記録を次世代へ） 緒方傳	後藤 正明	81

文化・芸術の世界を彩った人々

27	九州俳諧のリーダー 蕉門の俳人 篠崎兎城	平田 利一	84
28	秋月藩の学問振興に尽くした 原古処	三浦 良一	87
29	町医者にして文人 佐野東庵	川端 正夫	90
30	秋月の生んだ女流漢詩人 原采蘋	川端 正夫	93
31	帰省の前に帰省なし、帰省の後に帰省なし 宮崎湖処子	安陪 悟	96
32	新聞人、教育者、歌人（雅号比露思） 花田大五郎	後藤 正明	99
33	児童文学作家 豊島与志雄	八尋 節夫	102
34	芸術振興に寄与した画家 金田和郎	八尋 節夫	105
35	木屐製造家で俳人（朝倉文化の顕彰者） 上野嘉弥太	後藤 正明	108
36	俳誌『鬼打木』を主宰した 小野房子	松本 憲明	111
37	西行・良寛・愚庵を敬慕した歌人 大坪草二郎	松本 憲明	114
38	郷土が誇る日本芸術会員 画家 大内田茂士	山崎長太郎	117

スポーツ界で活躍した人々

39	第十五代横綱 初代 梅ヶ谷藤太郎	平田 利一	120
40	郷土朝倉が生んだオリンピック選手 後藤暢	山崎長太郎	123

ふるさと人物誌 ゆかりの地

ふるさと人物誌 関連年表

参考文献・資料一覧

編纂委員紹介

126	128	132	135
-----	-----	-----	-----

戦国時代を翔けた

あきづき たねざね
秋月種実

執筆者

三浦良一

秋月氏は種雄たねかつを初代として、鎌

倉時代の初めから400年近く、

秋月の古処山城を拠城として、朝倉地方を領有支配した武家です。

その16代・秋月種実は、少年期には毛利元就もつりもとよゆりに庇護されるなど苦勞をしましたが、成長してからは北九州の有力な戦国大名として活躍しました。

しかし晩年は、豊臣秀吉の命令によって日向国高鍋の地に移封されるといふ波瀾の生涯をおくった人物です。

毛利元就のもとへ

種実たねざねは、秋月氏15代・種氏たねうじ（文種ぶんしゆ）の二男として天文14年（1545年）に生まれ、幼名を黒帽子くろぼうし

といました。時は戦国時代のただ中です。彼が13歳の弘治3年

（1557年）、豊後大分の大友宗麟おもうりりんの軍勢が秋月に攻め寄せ、秋

月方は奮戦むなしく敗れて種氏と嫡男の晴種は討ち死にし古処山城は落城しました。このとき種実と弟2人は家臣に守られて城を脱出

し、周防山口の毛利元就を頼って落ち延びました。

毛利元就の庇護を受けて成長した種実は、数年後に元就の支援を受けて秋月に戻り古処山城を奪還しますが、その時期や経緯については諸説があつて明確ではありません。種実帰還との報せを聞いて旧家臣が参集し、秋月氏は再び勢いを盛り返しました。



▲秋月種実の花押
(天正8年大河内文書、個人蔵)

大友宗麟との戦い

永祿10年（1567年）、大友氏の重臣だった筑前宝満城の高橋

鑑種あきたねが大友宗麟に反旗を翻ひるがえしました。このとき種実は高橋鑑種に味

方して挙兵しました。このことに腹を立てた宗麟は秋月討伐のため2万余の大軍で攻め寄せてきました。これに対して秋月勢は果敢に迎え撃ち奮戦しました。さらに、休松やすまつ（現在の朝倉市柿原付近）にあった大友軍の本陣を奇襲攻撃して勝利し、大友勢を筑後川近くまで撤退させました。この秋月方の勝利は23歳の青年武将秋月種実の實力を近隣の武士たちに認識させ、種実の名声は上がりました。このあと種実は大友方と一時和睦して宗麟に従属しますが、天正6年（1578年）、日向国耳川みみかの合戦において大友軍が薩摩の島津軍に大敗して大友宗麟の勢威が衰えると、種実は再び反大友の旗を掲げて大友勢に挑戦し各地で合戦を繰り広げました。大きな戦いでは

【秋月氏の支配領域】



〔『甘木市史 上巻』より転載〕

田川の猪膝合戦（天正8年）や筑後川原鶴合戦（天正9年）などがあります。

有力な戦国大名に成長

このころ、薩摩の島津義久が北部九州にまで勢力を拡げてきました。種実はこの島津氏と同盟して、

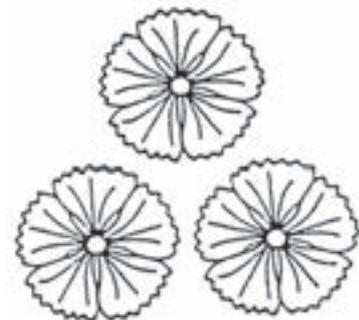
筑前や豊前の大友領内に進出していき、やがて筑前、筑後、豊前3カ国内において11郡を手に入れ、石高36万石に相当する領地を有する有力な戦国大名に成長していきましました。しかし大友方の名将立花道雪や高橋紹運に阻まれて、商業都市博多に進出できなかったこと

【秋月氏の家紋】



▲劔菱
(資料提供：高鍋町)

は種実の痛恨事でありました。種実は広大になった領土に秋月二十四城と呼ばれる支城を築き、重臣を配置して防備に当たらせ領民の統治をさせました。しかし彼の領国行政についての記録は何も遺されていません。ただキリスト教の布教を許しキリシタンを保護したことが『耶蘇会日本通信』のなかに載っています。また肥前の龍造寺隆信が島津氏と対立したときには和議の仲介



▲三つなでしこ
(資料提供：高鍋町)

をしたり、近隣の国人衆（地方の小領主）をまとめてその盟主になるなど外交的な手腕も持っていました。

豊臣秀吉の九州征伐

天正15年（1587年）、全国平定を目指す豊臣秀吉は、大友宗麟の要請を受け太閤の威令に服従しない島津義久を討伐するために、20万余の大軍を率いて九州に出兵してきました。このころ、種実は

領主の座を嫡男の種長に譲って隠居し名前も宗全と改めていました。が、采配の実権は種実が握っていました。秀吉の九州征伐に対しても、秋月方の対応が重臣を交えて評議されましたが、秀吉軍の情報を持たずその強大さを知らないまま、島津方との盟約を尊重して秀吉軍と戦うことを決しました。このとき恵利内蔵助暢堯は秀吉軍と戦うことは無謀だと主張しましたが聞き入れられず、妻子を刺殺して切腹し自らの命を投げ出して主君を諫めるという悲劇も起こりました。

豊臣秀吉との決戦を覚悟した秋月勢は近隣の国人衆の応援も得て2万人余が古処山城を中心に陣を構えました。やがて秀吉の大軍が古処山の北側一帯に着陣しました。その軍兵の多さと軍装の華やかさに圧倒され、忽然と出現した「一夜城」に肝を潰して、秋月勢は一

気に戦意を喪失してしまい、種実、種長親子は墨染衣に身をつつみ秀吉の前にひれ伏して降伏しました。このとき天下の名器と賞された肩衝茶入「檜柴」を献上したので、秀吉が機嫌を直し、種実、種長親子は死罪を免れたといわれています。秀吉は秋月に3日滞在したのち、島津討伐に軍勢を進めますが、このとき種長は島津攻撃の先鋒を命じられて手勢を率いて従軍しました。

日向高鍋に移封

天正15年（1587年）5月、島津義久が降伏して豊臣秀吉の九州平定は完了しました。秀吉は博多に戻って市街の復興を命じるとともに九州諸大名の知行割を決めました。この中で秋月種長は筑前、筑後、豊前の領地を没収されて、日向国財部（高鍋）に500

町（3万石）を頂戴して移封（領地替え）を命じられました。種実一族や家臣とともに日向の新封地に移りますが、いよいよ秋月を離れるときに、波瀾の生涯を振り返り「知行は十石でもよいから秋月に留まりたい」と嘆いたという十石山の伝説があります。秋月氏は種長を祖とする高鍋藩3万石の藩主として江戸時代まで存続しますが、九州からの雄飛をも夢見たであろう種実は、失意の晩年を福島（串間）の御館で過ごし、また人質のような立場で京都や大坂で暮らすことも多かったようです。秋月を去って9年後の慶長元年（1596年）9月に京都で病没しました。享年52歳、墓は京都の大徳寺と串間の西林寺にあります。

秋月氏が移封された関係で、福岡県甘木市と宮崎県高鍋町との間に、昭和42年（1967年）に姉妹都市の縁組みがなされました。朝倉市になってもこの縁組みは継承され、文化、スポーツ、その他多くの分野で両方の市民・町民の交流が活発に行われています。



▲写真奥が古処山城跡。手前の山は、秀吉が2泊した荒平城跡

福岡藩筆頭家老

三奈木
黒田 一成

執筆者 安倍 悟



▲巨大な水牛兜をかぶる黒田一成（福岡市博物館蔵）

三奈木
黒田氏の起り

戦国時代、織田信長は、当時の常識を破る新しい政策「天下布武」のもと、天下統一を目指していました。しかし、天正6年（1578年）、信長の家臣・荒木村重が離反し、有岡城（兵庫県）にこもって信長と戦うことになりました。

このとき、豊臣秀吉の使者として、村重に翻意を促すため城へ向かったのが、黒田孝高（官兵衛、号を如水という）です。

しかし逆に孝高は、城の土牢に幽閉されてしまいました。孝高の監視役を命じられた村重の家臣・加藤重徳は、監視をしているうちに孝高の智才を慕うようになり、2人は心が通じ合うようになりました。孝高は「そなたは私の命の恩人。もし私がこの城から脱出し、

再び活躍するときにきたら、そなたの一子を立派な武士として育てたい」と、重徳と約束したのです。

村重は戦いが不利と見るや、妻子や多くの女房たちを残し、天正7年（1579年）、近臣の数名と密かに城を脱出します。村重の脱出で孝高も城から救出され、孝高は秀吉の軍師として活躍しました。

戦国時代、約束の反古や裏切りは日常茶飯事でしたが、孝高は約束を守り、重徳の次男を養子に迎えました。我が子・長政と同様に養育し与えます。

これが三奈木・黒田氏の始まりで、初代が黒田一成です。

生い立ちと戦歴

黒田一成は、元亀2年（1571年）、伊丹村（兵庫県）に加藤重徳

の次男として生まれ、幼少のころは玉松と呼ばれていました。9歳のとき、孝高の養子となり、孝高の薫陶を受けて育ち、名も黒田一成（美作、三右衛門）となります。

天正12年（1584年）、一成が14歳のとき、長政に従い、根来雑賀の僧勢と泉州岸和田（大阪府）で勇戦します。これが一成の初陣でした。

一成はその後も幾度となく出陣しますが、天正15年（1587年）、秀吉の九州征伐のとき、薩摩と日向耳川の激戦で先陣をなし、高名をあげます。

文禄元年（1592年）と慶長2年（1597年）の二度の朝鮮出兵のときも、長政に従い、後藤又兵衛とともに勇敢に戦い、「黒田藩に一成あり」といわれるようになりました。

豊臣秀吉の死後、慶長5年（1

600年）の関ヶ原の戦いでは、長政が徳川家康に味方するや、君命を受けて、石田三成派と死闘を繰り広げ、徳川方の勝利の一因をなします。

その軍功で、長政は筑前52万石の大封領を与えられました。長政は一成の偉功に対し、三奈木を中心とした下座郡（旧甘木市の一部）1万2000石（幕末には1万6000石になった）を与えます。

その後も、大阪冬の陣・夏の陣に出陣し、今までの武勇をもって、最も若くして黒田二十四騎の1人に加えられました。一成は、その二十四騎の中でも、7人の剛将の1人に選ばれるほどの実力でした。

最後の出陣、島原の乱

島原藩の松倉重政・勝家父子2代にわたる藩政は、領民へ苛酷な賦役と重税を課し、また、キリシ

タン弾圧などを厳しく行いました。このため領民は、寛永14年（1637年）

10月、天草四郎時貞を盟主として一揆を起します。後にこの

一揆は「島原の乱」と呼ばれるようになりました。

幕府は、板倉重昌を大将にして九州地方の諸大名を中心に3回の総攻撃を行いました。失敗して重昌は戦死します。

ことの重大さに驚いた幕府は、松平信綱を急いで派遣し鎮圧に努めますが、なかなか終結しません。

信綱は、軍議を開き、各大名の意見を聞きました。そのとき、大名格で軍議に加わることを許されていた一成は、度重なる戦いの体



▲原城跡にある、天草四郎時貞の像

験を踏まえて「兵糧攻めが最善の策」と進言します。

信綱は、この策を取り入れる一方で、やぐらを組み、地下道を掘るとともに、海上から軍船の砲撃を行いました。

領民たちは、原城に8日間こもって戦っていました。しかし、ついに食料・弾薬とも尽き果て、寛永15年（1638年）2月28日、幕府軍の総攻撃を受け、天草四郎時貞をはじめ約3万7000人の領民が戦死しました。子どもや

女性、お年寄りもすべて殺され、戦いが終結します。

福岡藩は先陣に立ち、一成も家臣団を引き連れ壮烈な戦いを繰り広げました。この戦いで、家臣団から4人の戦死者を出しました。後に歴史家は、島原の乱のことを「苛酷に始まり、迫害に終わつた」といつています。

業績と教訓

一成は、知行領地の神社仏閣の建立に力を注ぎました。元和年間（1615年～1623年）、知行地の交通の中枢である三奈木の小高い茶臼山（元山城跡）に、清岩寺を建て禅宗の教えを広めています。

また、寛永4年（1627年）、兵火にかかり、社殿、家宝などすべて焼失した春日神社（現在の春日市にあり、一成の飛び地）の復

興を、藩主長政から命じられ、見事に再建しています。

秋月氏時代は、神職、社僧36人を有し、村民の心のよりどころであった美奈宜神社は、秀吉の九州征伐のとき、ことごとく破壊され、数10年間、放置されていました。

一成はこれを嘆き、寛永16年（1639年）に再建し、記念に銀杏を植えたのです。銀杏は現在、大樹となり、神木として、夏は緑、秋は黄葉となり、歴史を秘めて美しい景色を醸しだし、三奈木のシンボルになっています。

人材確保の面から見逃すことができないことがあります。長政から蝮城、田島（現在の金川）に2000石の知行を与えられていた新免伊賀守（家臣に宮本武蔵の父で、槍術の達人・宮本無二之丞がいる）が、故あって家禄を召し上げられ細川藩に頼ろうとしまし

た。このとき一成は、その才能を惜しみ客分として招き、その後、新免家は家臣として幕末まで三奈木黒田家に仕えました。

武術にも力を入れました。嫡子・一任を通して帝釈寺（荷原）走下に鉄砲隊を組織し、隊員には夢想権之助が創始した「神道夢想

流杖術（藩外不出の御留武術）を会得させ、強力な武士集団を組織し、いざ事あるときに備えています。

三奈木黒田家は、初代黒田一成から福岡藩の筆頭家老（後に大老となる）として、幕末まで約260余年間続きました。その理由は、黒田宗家孝高が加藤重徳に命を救われたことはもちろん、美奈宜神

社の山門にかかる額「至誠」に、三奈木黒田家の精神を読み取ることができます。

武将としてその名を歴史に刻み、詩歌も愛した一成は、明暦2年（1656年）11月、86歳の生涯を閉じ、崇福寺（福岡市）と清岩寺に静かに眠っています。



▲黒田一成が眠る清岩寺

黒田52万石を救った

栗山大膳

執筆者
平田利一

▲栗山大膳（円清寺蔵）

杷木志波の西側に標高3000メートルほどの麻底良山があり、山頂そばに麻底良城跡が今も残っています。慶長5年（1600年）、関ヶ原

の戦いで活躍した黒田長政はその功績で豊前中津12万石（大分県）から52万石に増えられ、筑前の国に入ります。黒田家の筆頭家老であつた栗山備後守利安（大膳の父）

は、杷木志波の麻底良城主として志波以東の領地を与えられ、30年ほど栗山利安・大膳親子の治世が続きました。

黒田藩のこと

黒田長政は名島城に入りますが土地が狭かったこともあり、新たに福岡城を築き、城下町に福岡と名づけました。徳川家康は、長政こそ「家康を天下人に押し上げた最大の功労者」と称し、「黒田家子々孫々まで粗略にしない」旨の

感状を与えています。また、長政は家康の養女（姪）を正室として迎え、徳川家とは縁戚関係となっていました。

しかし、徳川家の代も変わり3代将軍家光の時代になるころには、黒田藩をはじめ多くの外様大名が「藩とりつぶし」の恐怖にさらされます。江戸幕府が開かれて50年の間に、200を超える藩がとりつぶされたり、領地を削減されたりしています。

長政は、幼いときから人質生活で何度も死線を乗り越え戦国時代を勝ち抜いた武将ですが、長政の嫡子・忠之は、幼いころからわがままで短気で問題を起こしていました。贅沢を好み遊興を重ねるわが子に長政は不安を抱き、幾度も廃嫡を考えたようです。この長政の「忠之廃嫡」の動きに、忠之の守役であつた栗山大膳が防波堤と

なつて、ことごとく守っています。

長政は、人望ある筆頭家老の栗山大膳や重臣たちが藩の運営を間違なく補佐してくれるだろうと後事を託します。

黒田騒動

世に知られている「黒田騒動」は、元和9年（1623年）、長政没後から始まります。

新藩主になった忠之のわがままは治まらず、家臣をむやみに打ち叩いたり、近臣を集めては毎日酒宴におぼれ、剛健・質素の家風は忘れられていきます。大膳をはじめ藩の重臣たちが忠之に何度諫言してもとりあつてもらえず、藩政は険悪な状況になっていきました。忠之は、幕府が最も嫌う軍船を建造し幕府のとがめを受けます。大膳などの謝罪で事なきを得ましたが、忠之の乱行は治まりません。

忠之は、領主になる前から小姓

として仕えていた倉八太夫をかわいがり、食禄は加増を重ね9000石にまで取り立てています。さらに、重臣のだれにも相談なしに十太夫を家老にし、十太夫の権威は藩随一になります。忠之のわがままはますますひどくなり、藩の乱れは承知しながらも藩の重臣たちも口をつぐみます。諫言をなすのは大膳のみとなり、諫言してもしりぞけられ続けました。

忠之は、独断で新規に足軽200人を抱え、一銃隊を編成して十太夫につけます。この時代、大名が城郭を補強・修理したり士卒を雇い入れたりすることは禁止されていた、幕府による藩取り潰しの口実にされかねない出来事です。大膳は、若輩の十太夫に頭をさげ、諫言書を藩主忠之に届けるよう依頼します。十太夫はこれを握りつ

ぶし、大膳の悪口を言いつけて忠之をたきつけます。こうして忠之と大膳の間には修復できない亀裂が生じてしまいます。忠之は大膳の殺害を口にしますが、大膳は職を退いて杷木志波の邸に帰り、藩をつぶすことなくこの急場を乗り切る方法を考えていました。

寛永9年（1632年）6月、大膳は九州大名の総目付け日田代官・竹中采女正に「藩主に反逆の企てあり」との訴状を差し出します。これは、裁きの庭で長政と家康の関係を幕府高官に再確認させることが目的で、自身は「主に対する反逆の罪」に問われることを覚悟しての行動でした。

思惑どおり寛永10年（1633年）3月、大膳は裁きの庭で諸老中を前に「御老中の御威光による御意見をいただく以外には、主・忠之をして神君・家康公の御厚志



を守り通さず方法見当たらず公訴の手段をとりました。家康公の御意思をふみにじってはなりません」と釘をさしています。大膳の命をかけた訴えによって、次のような幕府の評定が出されました。「治世不行き届きにつき、筑前の領地は召し上げる。ただし、父・長政の忠勤戦功に対し特別に旧領をそのまま与える」「大膳は主君

を直訴した罪で奥州盛岡に配流。150人扶持を生涯与える」

こうして黒田藩はとりつぶしを免れ、その後忠之は島原の乱や長崎警護の任で活躍し、城下町の賑わいのために尽力しています。大膳は、盛岡で罪人あつかいされることなく、62歳で生涯を終えました。お墓は岩手県盛岡市にあります。

栗山大膳と父・利安の業績

大膳は、遠賀川流域の洪水調整や灌漑、水運を目的に、遠賀川から洞海湾に通じる堀川の工事を元和7年（1621年）に着工しています。長政の死によって中断しましたが、128年後の宝暦元年（1751年）に再開し、宝暦12年（1762年）に完成しています。灌漑用水として田畑を潤

し、物資の輸送路としても活用されました。全長約12・5キロメートルで「大膳堀」と呼ばれています。

大膳の父・利安が、長政の父・官兵衛孝高（如水）の菩提を弔うため建立したのが杷木志波の「円清寺」で、黒田家ゆかりの品々が文化財として大切に保管されています。

松末地区の杷木星丸にある「野手八幡宮」の元宮は杷木林田であり、宇佐八幡の神領で、寛永7年（1630年）に大膳が宇佐八幡宮を勧請したものです。1686年に現在の地に遷宮しています。杷木神社に伝わる春の大祭の「杷木市」は農機具の展示・販売の市が起源ですが、大膳は城下町の賑わいのために一時期、杷木志波に移しています。

国道386号線沿い香山入り口に「大膳楠」があります。昔、こ

の楠木の側に大きな池があり、「大亀が住んでいて旅人を襲うので退治して欲しい」と村人から願いが出されます。一方、別の村人からは「あの亀は村の守り神だから殺さないで」と頼まれます。現場に出向いた大膳は、池中央の岩の上で甲羅干しをしている牛ほどもある大亀が長い首を出しにらみ付けるのを見て、鉄砲で殺してしまいました。とたんに黒雲が一面を

覆って激しい雨が降り、地面が揺られて香山の半分が崩れ落ちたため、大膳はほうほうのていで逃げ帰りました。そのがけ崩れで、民家も池も埋もれてしまいましたが、楠の木は残りました。地元の人はこの楠を「大膳楠」と呼び、がけ崩れのことを「大膳崩れ」と呼んでいたと、そんな話が伝わっています。



▲円清寺にある大膳追悼碑



▲香山入口の道沿いにある大膳楠

秋月藩初代藩主

くろだ ながおき
黒田 長興

執筆者
 三浦良一



▲黒田長興（古心寺 蔵）

黒田家秋月藩は、黒田家52万石福岡藩から分知した支藩です。知行高5万石の小藩ながら質実剛健の気質を持ち、武芸や学問に優れた藩風を誇りとして、247年間安泰を保ち、明治2年の版籍奉還まで存続しました。この秋月藩の礎を築いたのが初代藩主・黒田長興です。

秋月5万石の分知

福岡藩を興した黒田長政はその死に際して、三男の長興に5万石を分知するよう遺言しました。この遺言に基づき元和9年（1623年）8月、福岡藩を継いだ兄・忠之から長興に、秋月で5万石の分知目録および2人の付家老と47人の付属する家臣（御付衆）の名簿が渡され、ここに長興を藩主とする秋月藩が誕生しました。長興が14歳のときでした。

長興は慶長15年（1610年）生まれで、母・永子は徳川家康の養女（親戚の保科正直の娘）です。幼名を犬万といいましたが、少年期から聡明で、父の長政は何かと不行跡の多い長男・忠之よりも三男・長興に世継ぎの期待をかけていたともいわれています。長興は13歳のとき、祖父・官兵衛孝高（如水）の名をもらって勘解由孝政を名乗り、23歳で長興と改めました。

長興は寛永元年（1624年）7月に秋月に入り、梅園（現在の秋月中学校）にあった古い屋敷に普請を加えて居城（御館）としました。城下町の縄張り（都市設計）が行われ、武家屋敷や町家の建築が進みました。当時の槌音高い秋月町の賑わいが想像されます。



▲長興が島原出陣に着用した甲冑
(秋月郷土館蔵)

秋月藩創立の苦勞

長興が大名として認められ秋月藩が公認されるためには、江戸に出て將軍に拝謁し、所領安堵の御朱印を拝領することが必要です。そのため秋月では家老の堀平右衛門たちが長興の江戸参府を計画しました。ところが、福岡本藩から長興の江戸参府を禁止する命令が届きます。これは兄・忠之が弟・長興を家来として処遇し、秋月の5万石は福岡藩領内の一部

であると解釈するもので、秋月側としては承服できないことでした。

長興は、この命令を拒否して江戸参府を強行しました。福岡藩の監視の目をかすめて、僅か10数人の供回りで密かに秋月を立出、夜陰に小さな漁師船で関門海峡を渡るなどの苦勞を重ねて江戸に到着しました。寛永3年(1626年)正月に、長興は3代將軍・徳川家光と前將軍・秀忠への拝謁が許され、同年8月には朝廷から甲斐守に叙任されて正式に大名に列

座することができました。

このあと長興は、江戸に滞在して將軍上洛のお供をしたり江戸城警備や幕府普請の手伝いなどをして將軍家への忠勤に励み、ようやく寛永11年(1634年)に秋月領5万石の朱印状を賜うることができました。孝政から長興と改名したのもこのころで、黒田長政血縁の新しい藩を立派に興そうとする決意がくみとれます。

藩政の基礎固め

このころ国元の秋月では、城下町の建設が進み、併せて新しい家来の雇い入れが行われ、藩の行政組織や藩士の役割編制がなされました。ちなみに長興時代の家臣の数は(詳細にはわからないものの)、馬廻・無足・組外等の上士身分の者が1000人、徒士・郡方・目付等の下士身分の者が1

500人、足軽身分の者が3000人くらいであったと考えられます。

このような藩の仕組みを整える過程で、その仕事の中心にあったのが上席家老の堀平右衛門(知行5000石)ですが、次第に彼の独断専横が目立つようになり、家臣の中に不満の声が出てきました。このことで藩主・長興から厳しく叱責された堀平右衛門は秋月藩を退去してしまいました。同時に堀

一派の10数人も集団で脱藩し、藩内に大きな動揺が起きました。しかし、長興は19歳の若年ながら沈着冷静に対処してこの混乱を見事に収拾し、家臣領民の信望を集め藩政の基礎を固めていきました。

島原の乱に出陣

寛永14年(1637年)10月、島原の乱が起きました。天草四郎を総大将に奉じた一揆3万人余



が島原半島の原城に立て籠って、領主の過酷な重税とキリシタン弾圧に抵抗して反乱を起こしたので。この乱の鎮圧に幕府は、九州の諸大名に号令して12万人もの大軍を動員しました。

寛永15年（1638年）1月、幕府の命令を受けた黒田長興は、

約2000人の兵を率いて島原に出陣しました。同年2月末の原城

総攻撃のときに秋月勢は奮戦しましたが、このときの長興の泰然とした大将ぶりと的確な采配は、家

臣たちに勇気と安心を与えました。この乱は激しい戦闘の末に鎮圧

されましたが、秋月勢は戦死者35

人と負傷者345人を出しました。

秋月に帰陣後、戦死者の葬儀を盛大に執り行い、遺族や負傷者への見舞いを懇篤にしました。また、

各人の働きに応じた褒賞が適切公平であったので藩主・長興に対する家臣たちの敬愛は絶対的なものになりました。

長興の領内統治

秋月藩5万石の所領は、夜須、下座、嘉麻の3郡内の55カ村ですが、山間地が多く含まれていて農業生産力が低く、また、商業の盛んな甘木町は秋月領から外されていたので、藩の財政は当初から多くの困難を抱えていました。しかし、長興が家老などに与えた文書には、「百姓ヲ憐ミ」とか「百姓ニ痛カラザルヨウニ」とかの文言があつて、藩財政を支える農民に対して無理な年貢や労役を課さな

いように戒めています。

長興時代の事業で主なものとしては、原地蔵（筑前町）の新田開発や、小石原川と野鳥川が合流する女男石の護岸工事等があります。また、山間地を家臣に分け与えて植林育成させることも行いました。新八丁峠道を開削したり、

野町（筑前町）に宿駅を創設したりするなど秋月街道の整備にも努めています。

長興の日々の暮らしは、質素儉約を率先するとともに武芸や学問に励んだと伝えられています。秋月藩の質実剛健で尚武の気風は、初代藩主・長興のときから始まったといえましょう。

長興は、父・長政の菩提寺として古心寺を、母の菩提寺として大涼寺を建立するなど数々の業績を残し、寛文5年（1665年）3月、江戸の藩邸で亡くなりました。

享年56歳、藩主在位42年でした。遺髪が秋月の古心寺に葬られ、また、死後200年経った安政6年（1859年）に垂裕明神の神号を贈られて、今も垂裕神社に祭られています。

秋月藩は世継ぎの長重（当時7歳）が襲封し、その後も長興の子孫が代々藩主の座を受け継いで、第12代藩主・長徳のときに明治維新を迎えました。

▲秋月の古心寺にある長興の墓



▲秋月の古心寺にある長興の墓

三奈木黒田家を救った忠臣

鬼木佐太夫宗直

執筆者 安倍 悟



▲宗直一家を祀る五所権現社（桑原）

慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いは徳川家康の勝利に終わります。この戦いで軍功のあつた黒田長政は、家康から筑前国52万石の領地を与えられます。長政には、黒田二十四騎と呼ばれる武将がいて、数々の戦いで武勇を発揮します。その中の1人が、後に三奈木黒田家初代当主となった黒田一成です。筑前国を拝領した福岡藩

初代藩主黒田長政は、黒田二十四騎の面々に万石・千石以上を与えますが、2代藩主忠之、3代藩主光之のころになると、その多くが減祿、除封されます。しかし一成は、三奈木を中心に1万2000石の領地を与えられ、その後も加増が続き、幕末には1万6000石の大身となります。

また、福岡本藩の筆頭家老を務め、さらに大老を命じられ、藩の政務の中心となって働き幕末を迎えます。このように江戸幕府が開かれてから幕末まで（1603年～1868年）の長い間、三奈木黒田家が断絶しなかった理由として、家臣たちの努力を見逃すわけにはいきません。今回は、特に三奈木黒田家3代当主一貫公の時代に重臣を務め、諫死（主君や目上の人に向かって、欠点や過失を、死をもっていさめ

反省させること）をもって生涯を終えた、鬼木佐太夫宗直について紹介します。

宗直の生い立ち

鬼木氏の発祥は、豊前国上毛郡鬼木村（現在の豊前市鬼木）です。200町を領する城主でしたが、黒田孝高（長政の父）が豊前に入国したとき、鬼木宗正は手勢500余人を率いて黒田長政勢と戦い、討ち死にします。その後、遺児は縁あつて三奈木黒田家の臣となります。

宗直は、鬼木惣左衛門の嫡男です。福岡に出て三奈木黒田家2代当主一任、3代当主一貫に仕え、元祿のころは一貫公の目付役を務めました。寛文12年（1672年）6月、桑原村に移住を命じられ、下座（現在の三奈木、金川、福田、蜷城の一带）の目付役の仕事をし

ます。さらに小隈村に住んでいた松田某なる家臣が暇を出されたので、宗直は屋敷替えとなり、桑原村から小隈村に移住します。

宗直は、文武に優れた人物で、日夜忠勤に励み、三奈木黒田家を支えました。

宗直、主君に諫言

早朝の稽古を終え、空を仰げば一片の雲もなく快晴のある日。それとは裏腹に宗直の心は晴れませんでした。一貫公に関して福岡藩から入った情報が気になって仕方なかったのです。

一貫公は文武両道に優れていましたが、そのことがかえって禍をなし、おごり高ぶり人を見下す心がありました。家臣の中には一貫公を憎み、藩主に事実を曲げて告げ口する者もいて、藩主も一貫公を政務から遠ざけようとします。

また、無用の用金を申し付けるなどの悪評も届きました。

このような悪評を知った宗直は、このまま放置しておくこと三奈木黒田家の存亡にかかわる一大事に繋がると考え福岡に向きます。そして宗直は、在福の留守居（家老）

たちに、諫言すべきと申し出ました。在福の家臣たちは、宗直の諫言を了承しますが、自信が強く容易に人の意見を聞かない一貫公を恐れ諫言する者はなく、月日がい

たずらに過ぎていくばかりでした。それどころか、一貫公の言動はますます悪くなります。

宗直は、再度福岡に赴き、直接一貫公に拝調し直言します。一貫公の反省すべき点を27カ条にまとめ諫言したのです。

一貫公は、すべてを聞かぬうち「家来の分際で何を言うか」と刀の柄に手をやるほど激怒します。

しかし、丹田に力を入れ諫言する宗直に忠節を感じ、態度を和らげ「以後言動を慎む」と改心の情を示します。

宗直は安堵し、忠勤を誓って退出します。宗直は、直ちに在福の家臣たちと主家を盛り返すための協議を行います。家臣の中には改革を喜ばぬ者もいて、話し合いはまとまりませんでした。

諫死を決意し帰郷

宗直は「この諫言は私利私欲から出たのではなく、三奈木黒田家のさらなる繁栄を願ったこと。もし断絶ともなれば、多くの家臣が路頭に迷うことは必定」と、至誠をもって家臣に対します。

しかし、家臣の中には、主君の悪事を助長する者や、宗直の諫言は売名行為に過ぎぬと陥れようとする者もいます。宗直は、武士が

身を賭して行った諫言が受け入れられないと感じ、この上は諫死をもって三奈木黒田家を救うしか道はないと決意し、在所・小隈村に帰ります。

小隈村に帰るや、宗直は妻子に今までの経緯を話しました。「武士として己の道を貫くため、止むに止まれぬこの心情を理解してくれ。そなたたちまでの道連れの諫死、これも武士の家に生まれた者の宿命」と、苦悩に満ちた表情で話す姿に、黙って聞いていた妻子たちも、共に死ぬことを決意します。

宗直は、武士が



▲宗直が血刀を洗った「五所権現血洗池跡」(小隈)

夕闇の中、家族全員が正装し、死別の宴を催しました。その後、宗直は妻と養女と2人の息子を刺殺し、己も割腹します。時に元禄7年（1694年）5月16日、田植えの時期でした。

宗直が自刃したところ、福岡城三の丸にある一貫公の上屋敷の寝所に宗直が突然現れ「御目覚を、鬼木佐太夫宗直罷出候」との声に、一貫公夫妻は驚き目を覚ましました。宗直が麻袴あさかほに正装した姿で平伏し「先日の諫言、受け入れられる意志がおりか、再度お伺いに参りました」と真剣な眼差しで問いかける姿に、一貫公も姿勢を正し「先日そなたに申したこと、いささかも間違いない」と答えました。宗直は深々と平伏し、突然の訪問の無礼を詫言姿を消します。

その同時刻、一貫公は、上屋敷の玄関口に馬が嘶いななくのが聞こえる

ので確かめると、宗直の愛馬が槐えんじの木の前に留まっていました。城門は閉ざされ、上屋敷の門も施錠されたまま、宗直の愛馬はどうして駆け込んできたのか、みな驚きました。

すると翌日、一貫公のもとに、鬼木家の惨事の知らせが届いたのです。直ちに福岡藩から鬼木家へ検視役が発ちます。検視結果の後、鬼木家は家名断絶しんぷくつたつ、食禄没収となりました。

その後の鬼木家、三奈木黒田家

その後、宗直を陥れようとした庄林しやうりん要人夫妻が原因不明の熱病で急死し、嫡男も狂死しました。さらに諫言を喜ばなかった家臣も次々と斃たおれるという変事がたびたび続きます。三奈木黒田家も、一貫公の跡を継いだ一春公が早死にす

る不幸が起き、次男・一利公が5代目当主となります。

一利公は、宗直の死を悲しみ精忠を賞し、宝永6年（1709年）9月、桑原村に一社を創建し、宗直一家5人を祀ります。この社は、最初のころ「宗直権現むねなおごんげん」と呼ばれていましたが、一利公により「五所権現ごしごんげん」と尊称され、武運の神・熱病の神・雷除けの神として信仰され現在に至っています。

また、鬼木家は、天明6年（1786年）に再興が許され、桑原村に屋敷を賜り、宗直と同様、三奈木黒田家の家臣として、尽忠をもって幕末まで仕えます。

三奈木黒田家は、一貫公自身が身を慎み家名を盛り返し、以後、主君と家臣が心をつにし、宗直の諫死を教訓として文武両道に励みます。

特に武術では、三奈木黒田家中

から始められた「真心陰流兵法しんしのんかげりゆうへいほう」があり、桑原村の片岡伊兵衛秀安ひょうえいひやうやすなりや小隈村の中村権内安成ごんないやすなり、桑原村の楓傳左衛門重房かえでんざえもんしげふさの達人が出ています。また、夢想権之助勝吉むそうごんのすけかつよしを祖とする神道夢想流杖術しんどうむそうりゅうじょうじゆつを、三奈木「走下組はしりおりぐみ」「帝釈寺組たいしゃくじぐみ」に伝授し、強力な武士集団を形成します。

三奈木黒田家は、福岡藩にとつてなくてはならない存在となり、江戸時代260余年間の長きに渡り続きました。



▲宗直一家の墓と供養塔（小隈）

秋月藩中興の祖

黒田長舒

執筆者
実藤輝夫

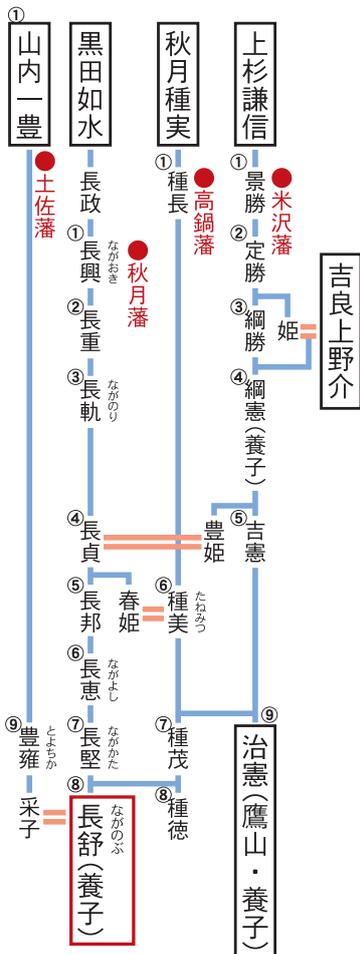
秋月藩は、福岡藩の支藩で、元和9年（1623年）、黒田長政の三男長興が福岡藩52万石から5万石を分知され、立藩しました。

8代藩主長舒誕生

黒田長舒は、明和2年（1765年）、日向高鍋藩7代藩主種茂の二男（幸三郎）として生まれましたが、天明5年（1785年）、21歳のとき、秋月藩8代藩主として迎えられました。長舒は叔父の上杉鷹山をはじめ、先祖に上杉謙信・

文政の江戸文化が花咲く前のころでした。秋月藩は、天明4年（1784年）、7代藩主黒田長堅が嗣子がないまま、18歳で若死にし、断絶の危機を迎え

長舒を彩る系図



妻方に山内一豊等多彩な血筋を持ち後に秋月藩中興の祖と讃えられました。時まさに徳川11代将軍家斉の治世、老中松平定信の寛政の改革、その後の文化・

典膳などが建白した「国計大則」

道上也らも、長舒は子の間引きを

ました。秋月藩のこの事態に、福岡藩は秋月藩廃絶を画策しましたが、家老渡辺典膳などの努力で藩取り潰しの危機は免れました。このとき、長舒は、父の高鍋藩主秋月種茂の母（春姫）が秋月藩4代藩主黒田長貞の娘という黒田家・秋月家双方の血をひき、若いころから文武に秀で、その資質を高く評価されていたので、まさに秋月藩が跡継ぎとして渴望した人物でした。

によって蓄えられた備蓄金を活用し、若さと英知を駆使してさまざまな業績を残していきました。

長舒の善政

長舒は、叔父上杉鷹山を畏敬し、鷹山を範として諸般の振興を図り、藩主として領民への慈しみの心を終生持ち続け、「経世済民」を實踐しました。このころ、全国的に危機的な年貢の減少と農民の労働力が不足していたので、その増大を図るとともに人命尊重という人道上也らも、長舒は子の間引きを

禁止し、妊婦は庄屋に届けさせ、子育ての困難な家庭には養育米を与えました。さらに領内を巡回し、領民に声をかけ、善行者を表彰し、80歳以上の人を招いて労をねぎらい、酒食をともにして贈物をしました。また、長舒は相撲を好み、力士を競わせたり、別荘で花火を揚げさせたり、八幡神社で歌舞伎芝居を催させたりして、人心を和ませました。領民への慈しみと高齢者へのいたわりの心を藩主自ら実践したのです。

学問奨励と藩校稽古館

安永4年（1775年）、7代長堅のとき、後に稽古館と呼ばれ、藩校となる学問所が設けられました。長舒は、藩主となると本藩から旧來派の亀井南冥や京から山崎派の小川才次などを招き、学問を奨励しました。その後亀井南冥に

学んだ原古処を稽古館訓導（後に教授となる）に任じました。向学心の旺盛な長舒は、自ら我が子を連れて講義を受け、さらに家老や諸役人に至る家臣たちにも広く講読させました。また、兵学をはじめあらゆる武芸を奨励し、熟達の藩士に師範役を命じ、指導に当らせました。

こうして長舒は、稽古館を、実父高鍋藩主秋月種茂の明倫堂、叔父米沢藩主上杉鷹山の興讓館に比肩する藩校とならしめ多くの人材を育成しました。

秋月の文化を彩る 俊英たち

長舒の治世の下、秋月文化の中心的存在として原古処・緒方春朔・斎藤秋圃などが輩出しました。原古処は、手塚家の二男として生まれましたが、生来の利発さと英

才ぶりを儒学者原担齋に見込まれ、懇請されて原家の養子となり、家督を継ぐことになりました。その後、藩の諸奉行などを歴任し、長舒の信任を得て、稽古館の教授となり、秋月の文化・教育を大いに振興し、有為な人材を育成しました。また、長舒は原古処の意見を採り入れ、藩財政立直しとして、特に桑の栽培と養蚕を奨励してきました。

長舒の学問の奨励は、医学の研究発展にも寄与しました。長舒は7代藩主長堅が痘瘡に罹り、18歳で早世したため、痘瘡を防ぐ方法を模索していました。そのころ藩医の緒方春朔がこの難病と取り組んで、中国の書籍の研究を続けていたので、長舒も協力し、遂にその免疫法が考案されました。春朔は、久留米の領民でしたが、医者を目指し長崎で勉強に励んだ後、長

舒によって秋月の藩医に迎えられ、種痘の研究に専念してイギリスのジェンナーより6年も早く免疫法を完成させたのです。成功の陰には、上秋月の大庄屋天野甚左衛門の多大なる協力があればこそでしたが、藩主、藩医、篤志家の心がひとつになつての偉大な功績と称賛されるべきでしょう。この種痘法の成功は、秋月藩のみならず全国の医学の進歩に寄与しました。

さらに秋月文化の担い手として、絵師斎藤秋圃がいます。秋圃は長舒に見い出され、秋月藩御抱え絵師となりました。秋圃は、長舒主催の太宰府書画展覧会に施龍図を出品するなど、筑前絵師の中心的存在で、特に秋月時代は狩野派風御用絵のほか写生的鹿の絵の名手として知られていました。島原の乱戦闘図屏風は、秋月郷土館に、また長生寺の秋葉堂には天井絵が

今に残っています。

殖産興業と 秋月の特産品

長舒は殖産興業として特産品の開発製造を奨励しました。まず秋

月名産として名高い葛の製品化でした。葛湯や葛根湯として知られる葛は、昔から解熱や筋肉の弛緩の働きがあり、風邪、下痢、肩こりに重用されていました。廣久本葛は、歴代久助の努力によって秋月藩の将軍家献上物となり、江戸でも高い評価を得、秋月を代表する特産品として全国に広まりました。

もうひとつは、川苔です。現在の黄金川に清泉が流れ込み、その流れの中に繁茂する青緑色の苔です。宝暦13年（1763年）、秋月の町人遠藤幸左衛門がはじめて保護栽培を始めました。改良後献

上された川苔は、長舒により寿苔と名づけられ、後に寿泉苔と改められました。藩は遠藤家に特許権を与え、筑前の特産品として奨励し、販売も大阪をはじめ異国へも輸出されました。

長舒は他に、茶・桑・楮・櫛・木蠟・製紙・養蚕・びん付油などを産業として奨励し、藩財政の立直しと領民の生活を安定させていきました。

悲願の目鏡橋完成

長舒が行った今なお残る業績に、秋月街道に架かる目鏡橋があります。7代藩主長堅の急逝による8代藩主長舒擁立に際して、秋月藩はその代償として、福岡藩が幕府から任じられていた長崎警備役を代わりに務めなければならなくなりました。そのころ、筑前秋月と筑後・豊前を結ぶ木の橋は、人馬

の往来も激しく橋の損傷も著しく、大洪水時には瞬時に流されてしまいました。長崎に警備していた長舒は、長崎の石橋と同じものを野鳥川に是非架けたいと熱望しました。そのころは藩財政も厳しくなっていました。家臣や領民の要望が強まり、長舒はついに架橋建設を決断しました。ところが

不幸にも竣工を目前にして橋は崩壊し、病床にあった長舒は、目鏡橋の完成を見ることなく、文化4年（1807年）、43歳で逝去しました。しかし崩壊から3年後の文化7年（1810年）、9代藩主長留のとき、悲願の目鏡橋が野鳥川に美しいアーチを描いてその姿を現しました。ただ、渡り初めのそのときに、晴れやかな前藩主長舒の姿を見ることができなかつたのは、家臣・領民の涙を誘うものでした。

今でもこの目鏡橋を見るとき、秋月藩中興の祖と称賛される長舒の想いが伝わってくるようです。



▲目鏡橋

秋月藩の財政再建に奔走した

間小四郎

執筆者

三浦良一

江戸時代も中期になると、どこ

280石)の次男として生まれま

の藩も財政が苦しくなり、大商人
からの借財が膨らみ藩の政治が揺

した。幼少のころから聡明であつ
たといわれています。19歳のとき、

るぎ出しました。秋月藩において
も1800年代の初めに家老の不

間篤実充(馬廻250石)の養子
となつて家督を継ぎ、間小四郎俊

正が発覚して秋月藩の存続を危う
くする事態を迎えましたが、この

勝を名乗りました。
秋月藩では、文化4年(180

とき藩の財政再建や藩政の改革に
奔走した人物に間小四郎がいます。

7年)に8代藩主長舒が亡くなり、
長韶が9代藩主になりましたが、

秋月藩の財政事情

間小四郎は、天明7年(1787
年)に吉田太郎大夫勝知(馬廻

若年のため藩政の実権は筆頭家老
の宮崎織部舒安が掌握していま
した。名君といわれた長舒は、学

問を奨励したり、有能な人材を召

し抱えたり、新しい産業を保護し
たりと進歩的な政治を推し進めま
したが、そのために藩の財政負担
は大きく、藩庫は底をついていま
した。

藩主長韶の信任を得た家老の宮
崎織部は、この財政難にあたり、
家臣の上米(所務渡米の減額)と
富裕な商人からの献金や借入れ
で対処しようとなりました。この上
米の実施に対して家臣一統に不満
がありました。

文化8年の政変 「織部崩れ」

文化8年11月、間小四郎は伊藤
惣兵衛ら6人の同志と語らつて
「家老宮崎織部達に不正あり」と、
本家である福岡藩主に訴え出まし
た。秋月で訴えても家老たちに握
りつぶされることを予想したから
です。訴えの内容は「筆頭家老宮

崎織部、財用方家老渡辺帯刀とそ
の同腹の者は、若い藩主を侮蔑し
て藩政を牛耳り、政事に不公平多
く、藩士の窮乏をよそに、商人か
らの賄賂で贅沢をし女色に溺れて
性根宜しからず、また公金を使つ
て豪遊している」というものです。
出訴を受けた福岡藩は家老を秋月
に派遣して、事実関係を調査し、
訴えの多くのことが事実であつた
ので、宮崎、渡辺の両家老は罷免
されて福岡沖合の姫島、大島に流
罪、その他10数人の者が処分され
ました。この中には用人・郡奉
行・勘定奉行など藩の重要な役職
にいた者が含まれ、秋月藩の政治





▲秋月城跡長屋門

は中枢が崩壊した状態になりました。この事件を「織部崩れ」と呼んでいます。

秋月藩の危機と 福岡藩の介入

秋月藩がつぶれるかもしれないとの危機感に家臣・領民は動揺しましたが、同時に秋月藩に金子を貸し付けている大坂・博多などの商人たちもこの事件に驚いて、一斉に貸付金の返済を迫りました。

しかし返済するお金はありません。新しく就任した家老や重臣たちはおろおろするばかりでした。

結局は本家である福岡藩に支援を求めることしか手立てはありません。福岡藩も分家の危機を見捨てておけず、秋月御用請持の役名で沢木七郎大夫を秋月に派遣しました。着任した沢木七郎大夫は、まず秋月藩の借財を調べましたが、負債総額は銀3800貫余（現在で約63億円）で、このうちの8割は大坂の商人からの借り入れと分りました。

文化14年に、沢木に代わって井手勘七が秋月御用請持として福岡から着任しました。井手勘七は、秋月藩の郡奉行の職にあった間小四郎の人物と力量を信頼して、間小四郎と2人で秋月藩の財政再建を図ることにしました。

まず、福岡藩から15年間に総

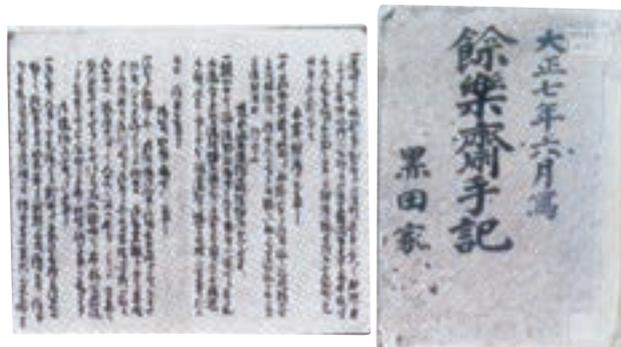
額15万俵の米を支援してもらって、これは主に江戸藩邸の費用にあてることにしました。秋月藩士の

の所務渡米を数年間は知行禄高の半分以上にして、借財の返済にあてることにしました。文政4年（1821年）には、勘七と小四郎の両人が大坂へのほり、債権者の商人と折衝して12年間の返済猶予の約束に成功しました。

郡奉行としての 農政改革

間小四郎は、文化12年（1815年）に郡奉行に就任してから、農村支配の仕組みを改編しました。まず年貢取り立ての方法を、代官がその年の収穫を検分して取り立てる方式から、大庄屋が村軸帳（農地の基本台帳）を基に豊凶にかかわらず一定量の年貢を納入する方式に改めました。これは福岡藩の

方式を見習ったもので、年貢が確実に収納されるようにしたものです。農民のこれまでの年貢の未納米を帳消しにし、商人が農民に貸し付けた金子も帳消しにすることを求めました。農民の夫役（人夫労働）を軽減させて農民を保護しました。また凶作に備えて米を備蓄する仕組みを創設しました。



▲余楽齋手記（秋月郷土館 蔵）

河川の堤防や井手を石積みにして洪水に備えさせました。遠賀川の上流を改修して年貢米の積み出しを川舟でできるようにしました。山間部を公儀山と村渡山に区分して植林を奨めました。

これらの実績は小四郎が隠居後に記した余楽斎手記に詳しく述べられています。文政3年からは、土井正就と大倉種周を起用して藩内の大掛かりな検地を実施しました。この検地は13年かけて行い、極めて詳細な藩内の測量絵図（秋月封内図）として完成しました。

小四郎は文政4年からは町奉行も兼任し、同7年には中老職に昇り用人役と郡・町奉行も兼任しました。文政6年に井手勘七が福岡に帰った後も、その明晰な頭脳と卓越した手腕で秋月の藩政を主導しました。文政12年（1829年）、小四郎は43歳のとき隠居を願い出

て許され、余楽斎と号して悠々自適の生活に入りました。

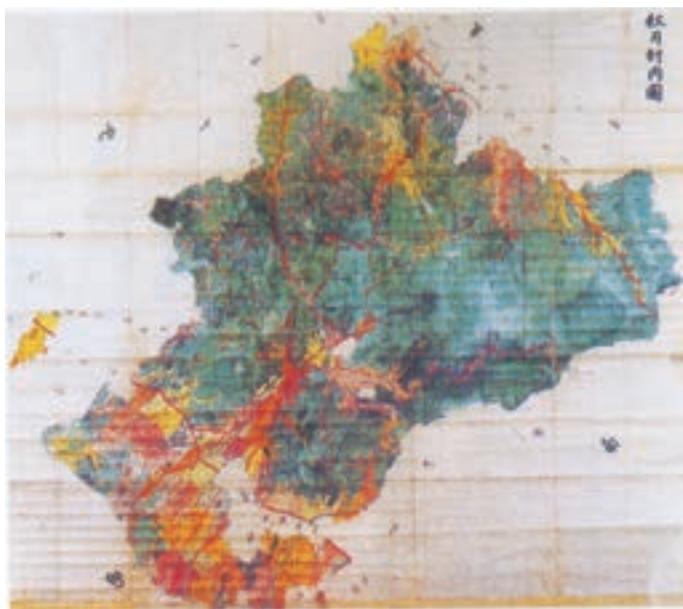
10代藩主長元と 間小四郎

天保元年（1830年）、藩主長韶が退隠して、土佐藩の山内家から養子に迎えた長元が10代藩主を襲封しました。長元は秋月に入ってから藩士たちの士気が低いことに驚きました。秋月は尚武の藩と聞いていたのにその気風がまったく見えません。

家老を務めた田代政美は手記の中で「文化8年の政変以来、何ごとも福岡藩から派遣された秋月御用請持の言いなりで、秋月の家老を始め執政の者は床の間の置物同いである。藩士たちも長年の上米のために耐乏生活を強いられて武芸に励む余裕がない」と述べてい

ます。この意見は藩の重臣の感情を代弁するもので、その中には、福岡藩の威光を背にして井手勘七と2人で藩政を独善的に仕切ってきた間小四郎に対する重臣たちの反感が込められています。長元は藩士たちの気風を刷新するために手を尽くしましたが、同時に間小四郎が進めた諸改革のうち年貢取り立ての手法などは従前の方法に戻させました。

弘化2年（1845年）、間小四郎余楽斎は突然呼び出されて「御主君の思し召しに叶わず」との理由で、博多湾の玄界島に流罪を申し渡されました。そ



▲秋月封内図（秋月郷土館蔵）

の訳は藩主長元の廃立の陰謀を企てた罪という噂が流れましたが真相の程は不明のままでした。嘉永5年（1852年）に流罪を赦免されて嘉麻郡桑野村に蟄居を命じられ、淋しい晩年を過ごし、3年後の安政2年6月、同所において死没しました。享年69歳でした。

初めての国会議員

香月 恕経

執筆者
八尋 節夫

▲香月恕経（『香月恕経翁小伝』より転載）

香月恕経は、現在の馬田の下浦の地に縁のある人です。もともと医者ですが、後年には教育者として、また政治家として、当時の郷土を代表する素晴らしい先駆者といえるのではないのでしょうか。

献身的な恕吉郎少年

恕経は、天保13年（1842年）

6月、代々医業を引継いできた香月春庵の長男として生まれました。

幼いころの名前を恕吉郎といい、小柄で活発な子どもだったようです。そして11歳になってから、甘木高原町に住む佐野東庵の経営する「梅西舎」に入門して漢籍を学ぶことになりました。どんなに暑い日であろうと、どんなに厳しい寒さであろうと、恕吉郎は1日も怠けることなく下浦から甘木までおよそ1里の道のりを通い続けました。そして学び始めてから3年目

のこと、13歳になってから書いた「月露下檣鳥」の詩の書軸は、それはそれは見事なもので居並ぶ人々を驚かせた程の素晴らしい出来栄でした。このように大人も及ばないほどの学問を身に付けたのも、恕吉郎の日ごろの努力のお蔭だといって間違いのないでしょう。

それから間もなく、師匠である東庵の身に異変が起き、長らく床に臥す日々を送らねばならなくなりました。佐野家では、遊学中の息子も急いで帰郷し看病することになります。肉親でもない弟子の恕吉郎も一緒になって看病を続けたのでした。それこそ昼夜通して帯も解かず看病すること実に数10日、どうにか師匠は快方に向かうまでになりました。おかげで師匠が元気を取り戻したことを見届けた息子は再び遊学にと去っていききました。

しかし師匠の身体は、以前の身体には戻らず、その後も身の回りのことはすべて傍にいる恕吉郎に頼る他ありませんでした。三度三度の食事も含め、すべて恕吉郎の手に託され、託された恕吉郎も精一杯その期待に応えようと頑張りました。残念ながら翌年の9月、師匠東庵はついに永遠の眠りについてしまいました。師を失った恕吉郎は1人淋しく下浦の実家へと帰って行きました。

尽きることなき 学問への思い

そして明けての安政5年2月、恕吉郎は17歳となりました。昨年まで学舎で身につけてきた学問への思いは強く、今度は遠く熊本の医師深水玄門を訪ね入門を願うため我が家を発ちました。深水玄門といえは当時儒医としての名

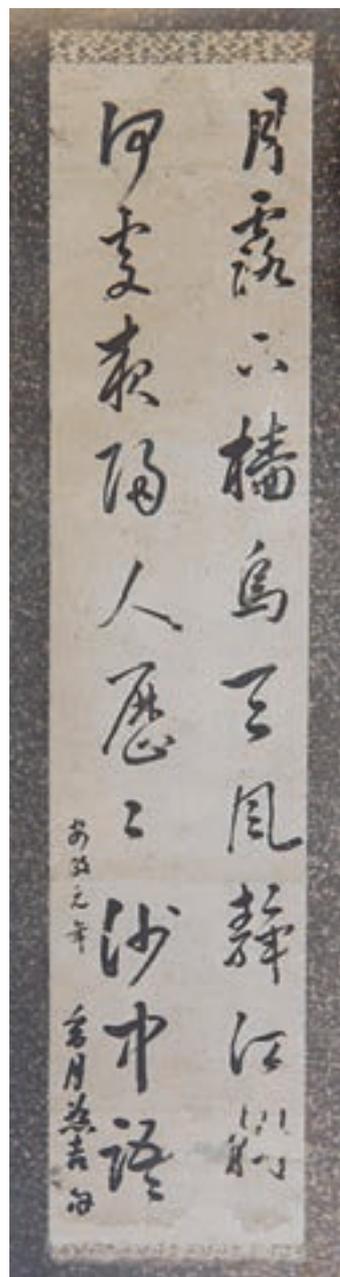
声高く、遠方からはるばる入門のため訪れてくる者も多く、入門は狭き門でした。

恕吉郎が門を叩いたその日は、生憎と玄門が留守でしたので、書生から筆紙を借りて訪ねてきたことの意味を書き残しておきました。これが幸いしたのか後刻玄門からの使いのものがやって来て入門を許されたのでした。

それは恕吉郎が書き残した書の筆跡と文章の素晴らしさを認められたことによるものだと後で分かりました。早速、学ぶ機会を得た恕吉郎は漢方内科医師を身につけ

ることになりました。そして塾に滞在すること約2カ年、やがて恕吉郎はわが郷土へと戻って参りました。

明けての文久元年(1861年)2月、20歳となった恕吉郎は、さらに近くの筑後の国生葉郡(浮羽郡)隈上村の玉井養純にも師事して漢学と医学を学びました。ところが翌年の10月になって、父春庵が病氣だとの知らせを受け、急いで下浦に帰って来ました。恕吉郎は長い間父の傍にいなかったことから、あらんかぎりの看病を続けましたが、その甲斐も無く父は54



▲恕吉郎少年13歳の書(複写資料)
(香月玄洋氏蔵)

歳で息を引き取ったのでした。父を失った恕吉郎は再び修学への道を歩むことは許されませんでした。というのも、もともと家の生計も苦しい上に、かねてから病弱の母は落胆と疲労が重なり床につくことが多くなってきたからです。そこで恕吉郎は父の後を継いで正式に医者として身を立てることにしました。21歳のときでした。

本業の医者から 教育者・政治家へ

さて医者にはなったものの時は明治になったばかり、当時の世情

は激しい変わりようでした。秋月藩の動きも慌しくなるなか、恕吉郎は時代の変化に気付き、政治に対して自分なりの考え方を持つとともに地域にも大きく関心を持つようになりました。

まずは明治2年の暮れ、恕吉郎は秋月藩校の訓導に任じられます。寒村の一開業医から藩の学館訓導に取り立てられたことは、当時としては実に名誉なことでした。翌明治3年には郡村教導役兼郡監察となり夜須郡牛木村に勤めました。

さらに明治4年には現在の三輪新町・依井等の開拓係となつて、もともと原野であったのを村民とともに開墾に当たるなどして行政の道にも一段と関心を持つようになりしました。同年7月には廃藩置県となり、秋月藩に代わり「福岡県出張所」という役所が秋月に設置されました。その折にも恕吉郎

は役人として囑望され役に着いたのですが、地元に着した活躍を次々と展開していくのでした。

そのうち明治6年(1873年)に名を恕経と改め、明治9年までのおよそ3年間は「筑前竹槍一揆」や「秋月の乱」等の大きな事件にも関わり牢獄に入れられるなど苦しい経験もしました。とにかく波乱万丈、ここで恕経は一段と政治に対して強い関心を持つようになっていったのです。

激動の時代を 駆け抜けた恕経

このころの国内は不穏の空気に充たされていました。当時の政府の動きに対しての不平不満は広がり、農民にも旧武士にも強くくすぶっていたのです。「佐賀の乱」「神風連・秋月の乱」「西南の役」などがその現れといえましょう。

こうした事件を経過する中で民衆は武力による反抗の空しさを悟り、言論こそがこれからの政府を動かす大きな力になるとして論客を中心とした政治結社の動きが地方で次々と出て参りました。恕経も明治12年(1879年)当時の夜須郡を中心に同志を募り「集志社」を設立、推されて社長となり大いに民権自由の思想を勧めていったのです。

また、これをきっかけにして他の同志団体「筑前共愛会」や「玄洋社」との繋がりも密となり、やがて恕経はその中心となって活動するまでになりました。そして明治13年11月、国会期成同盟の集会在東京で開催されたときも、恕経は筑前国代表として出席、国会幹事として活動することとなりました。また一方で恕経は教育者として明治14年に第2代福岡県立甘木中

学校長に任じられ、多くの人材を育てたことも郷土発展に結びつく貴重な業績といえましょう。

そしておよそ4年間校長を勤めた後は「玄洋社」に正式に迎え入れられ、そこで社員の教養を高める傍ら、自らも国に関与するために必要な力量と人格を磨き、次第に多くの民衆の信望と期待を高めていったのでした。かくて頭山満をはじめ親しい仲間の勧めによって明治23年には第1回衆議院議員選挙に立候補、見事当選しました。さらに明治25年第2回の選挙にも当選し大いに国会で熱論を吐いて国政における存在の大きさを世に知らしめたのです。

このように大きな期待を寄せられていた恕経ですが、惜しいかな政治家としての道半ば、脳溢血にて東京の自宅において死去したのです。時に明治27年、53歳でした。

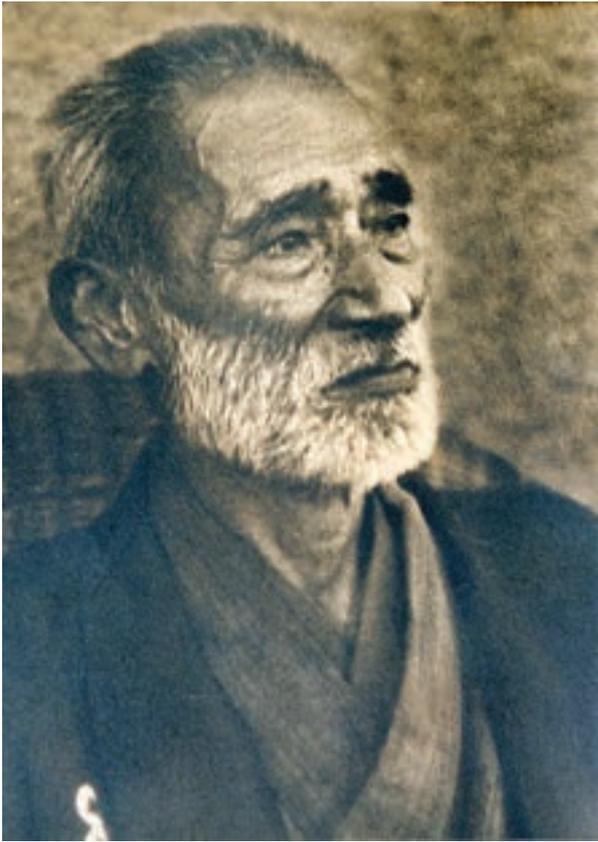
自由民権の闘士 県政から国政へ

加藤新次郎

執筆者

安倍

悟



▲加藤新次郎（写真提供：加藤直日子氏）

生い立ちと時代背景

加藤新次郎は、三奈木黒田家の重臣・加藤正倫まさみちの次男として、嘉永7年（1854年）に三奈木に生まれました。

三奈木は、1万6000石を領する福岡藩の大老・三奈木黒田家の領地で、初代黒田一成公から明治維新まで約250余年続く、まれに見る歴史のある土地柄です。

三奈木黒田家は、日常は福岡で城に勤めて、三奈木には「お茶荘」といわれる別邸がありました。幕末の福岡藩には、勤王派きんおうは（幕府を廃止して、朝廷を中心とする政治構想を掲げるグループ）と佐幕派さまくは（幕府を支えるグループ）の2つの勢力があり、勤王派が藩を動かしていました。藩主専制政治の継続を望む藩主は、幕府が藩の勤王派の動きに疑いを持ったこと

を契機に勤王派を圧迫し、勤王派の中心人物7人に切腹を命ずるなど厳しい処分を行います。これを「乙丑の獄いっしゅうのごく」（1865年）といいます。

三奈木黒田家は勤王派でしたが、当主・播磨はりまは大老という身分であったため切腹は免れたものの、三奈木に蟄居ちゅうきょ（自宅や一定の場所に閉じこもり謹慎すること）を命じられます。

かねてから三奈木黒田家は、長崎出島警護に総督として出向くなど、西洋文化に直接触れる体験を通して外国の事情に詳しく、知識も豊かで先見性があり、文化的教養（謡曲宝生流等）も身につけていました。家臣たちは、蟄居の身である三奈木黒田家に接触する機会が多く、いろいろな面で影響を受けています。

また、三奈木の家臣たちの中には、



三奈木黒田家と一緒に長崎出島の警護にあたった者もあり、世の中の動きを敏感に受け止めながら明治維新を迎えます。

そのような村の時代背景の中で、新次郎は成長していきます。

三奈木村の再興は養蚕ようさん

江戸時代の三奈木は、英彦山街道の交通の要として栄えていましたが、幕藩体制の崩壊の後は寒村となり、三奈木村の再興は急務です。

村の再興は養蚕にありと考えていた安陪庄作は、甥にあたる加藤新次郎、守島正路の若い2人に言いました。

「実は君たちにお願ひがある。新

しい時代を乗り越え、豊かな三奈木にするために産業を起こすことが大事と

出島の警護に行った関係で、外国へ輸出する品物として養蚕を盛んにし、品質の良い繭まゆ、生糸きいとを生産

することが必要と考へている。自分も各地に行つて研究しているが、

今までの飼育法では生産も少なく、利益も上がらない。新しい飼育法

が熊本にあると聞く。熊本へ行つて勉強してきてほしい」

話を聞いていた新次郎は、かねてから東京で発刊されている『日

新々事誌』を購読し、その養蚕に関する記事に刺激され、自らそれを試みたいという志を抱いていた

ので、「わかりました。勉強してきます」と即座に快諾し、2人の青年は熊本へ旅立ちます。明治8

年（1875年）のことです。

熊本に着いた2人は、養蚕家として著名な竹崎吉晴の家に数カ月寄宿して、清涼育せいりやういくおよび座繰ざぐり製糸法の伝習を受けます。

養蚕技術を身につけて村に帰るや、早速夏蚕なつごを飼ひ、村の青年男女に講習します。これが福岡県の新式養蚕、座繰製糸の最初です。

その後、養蚕は三奈木の基幹産業となり、三奈木だけでなく、朝倉郡はもとより福岡県全体に広まっていくのです。

そして新次郎は、養蚕の育成と並行して自由民権や政治へと志向していくのです。

明治6年（1873年）、征韓論争後に参議を辞職し下野げや（官職を辞めて民間に下ること）した板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平ら8人は、明治7年に愛

国公党を結成し、「民選議院」の設立を求める建白書を新政府に提出しました。これが自由民権運動の先駆けをなすものです。

新次郎は、明治3〜4年ごろ蘭学を学ぶため出郷を家人に願ひ出ますが、許されなかったのです。

新次郎の向学の意志は強く、家にあつた本をことごとく読破し、特に福沢諭吉の『西洋事情』『文明論之概略』に最も啓発されたと

いわれます。

加藤家に種々の本があつたのは、先に述べたように、三奈木黒田家が長崎出島の警護の責任者として

長崎に駐在したとき、加藤も三奈木黒田家の重臣として随伴ずいはんし、数多くの本を持ち帰った故で、それを若き新次郎が読み魂を揺さぶられたのです。特に明治11年（1878年）に刊行された『佛国革命史』は、新次郎の手沢本しゝたくほん（繰り返

史）は、新次郎の手沢本（繰り返

し読んで手のつやの付いた本)で自由民権の思想を確固たるものにするのです。

その熱意は、理論だけでなく、実行面でも示されています。

自由民権の説に強く共鳴した新次郎は、郡下の同志と「集議会」を結成し活動します。明治14年(1881年)、板垣退助が九州遊説に来るや、それこそ手弁当で参加していきます。

そして、新次郎が最も自由民権に傾注したのは、明治22年(1889年)、大隈重信外相が条約改正(不平等条約を改定するに不十分な内容)を進めようとしたとき、新次郎は選ばれて東京に行き、天下の同志とともに反対運動をしています。

条約改正は、玄洋社員来島恒喜が外務省門前で大隈外相を襲って重傷を負わせ、自らは自刃する(刃

物で自分の生命を絶つこと)という事件のため行われませんでした。

この事件に関して新次郎は、そのころ撮った自分の写真の裏に「明治22年、大隈ノ一脚ヲ奪ヒシ時」と自署し、来島の行動に理解を示すなど、自由民権の闘士としての気骨、反骨精神を垣間見ることができます。

県政から国政へ

村の再興に尽力し、自由民権運動に力を注いでいた新次郎は、明治15年(1882年)、29歳の若さで福岡県会議員に当選しています。

その後18年間、県会議員の要職を務め、明治29年に副議長となり、明治31年(1898年)には第8代議長に選任され、政治家としての手腕を発揮し、県民の生活安定向上に努めています。

明治41年には、県立朝倉中学校(現在の県立朝倉高等学校)の創立に尽くすなど、教育の面でも活躍しています。

明治45年(1912年)、県会議員在任中に得た政治家としての力量を生かすために衆議院議員選挙に立候補して当選し、国政に奔走する日々を送っています。

なお、衆議院議員を辞職した後は三奈木に帰り、昭和2年から1期4年間村長の職にあり、三奈木村発展のため尽力しています。

晩年は、政治家・教育家として活躍した長男の新吉が満州鉄道や華北交通の要職についていたため満州で生活し、昭和8



▲後に内閣総理大臣となる原敬が、福岡県を訪れた際に加藤新次郎に歓待を受けたことへのお礼に送った手紙(加藤直日子氏蔵)

戦後司法界の功労者

馬場 義統

執筆者

川端 正夫



▲検事総長時代の馬場義統（『馬場義統追想録』より転載）

馬場義統は上秋月出身で、「検事総長」という世の中の正義を守る役人（法務官僚）として最高の地位に上り詰め、戦後の激動の日本社会と国際司法の場で、その見識・能力・情熱を発揮した人です。義統は、勉学に優れ、仕事上有能であっただけでなく、人情に厚く、郷土や職場の同僚・後輩を大切にしたこと

知られています。厳しさと温かさを兼ね備え、身をもって後進に範を示した教育者でした。

上秋月時代と
佐藤東岸先生

明治35年（1902年）、義統は、9人兄弟の長男として上秋月の農家に生まれました。父親は農業を営み、足が悪かったのですが大工もしていました。母親は、知人をもてなすのが好きな大変明るい人柄だったそうです。

上秋月は、小石原川が江川の谷から出た所に開けた小平野で、古くから水田が営まれ、江川から小石原を経て英彦山へ通ずる道（国道500号線）が通っています。清流と山の幸に恵まれたこの地で、義統は育ちました。義統は幼いころから活発で、上秋月尋常小学校に入学すると成績は常に1番。足も速く運動会で大活躍するなど、

勉学・運動両方に優れた子どもでもした。

当時の上秋月小学校には佐藤東岸という若い教師がいて、「不撓不屈、一直線に進め」という精神をもって生徒を指導しました。東岸先生に可愛がられた義統は、断固とした不屈の意志を鍛えられました。東岸先生は上秋月の専念寺住職でもあり、後に上秋月農協長なども務め、製茶工場を作るなど地域の活性化に貢献しました。義統は、後に第五高等学校（現在の熊本大学）に進んでからも、夏の帰省の際には専念寺の涼しい座敷で勉学に励んだそうで、師弟の関係は後年まで変わりませんでした。

明治・大正時代、学校の成績が極めて優秀な子は、小学校を卒業すると旧制中学校に進み、高等学校・大学へと進学して社会で指導的な立場につきましたが、それは経済的にかなり恵まれた家庭

でないとい難しいことでした。義統は、家庭の事情から、尋常小学校を終えると旧制中学校ではなくそのまま高等小学校（2年間）に進

み、卒業後は八幡製鉄所（現在の新日本製鉄）の職工養成所に入り、働きながら門司の私立豊国中学校の夜学で勉強しました。高等学校進学希望を捨てなかったのです。

旧制田川中学と

田中常憲校長

義統は、旧制高等学校進学に必要であった県立中学校への転入を強く希望していましたが、郷里の県立朝倉中学校（現在の朝倉高校）は、私立中学校からの転入を許可しませんでした。義統が幸運だったのは、当時八幡で教員をしていた才田伊右エ門・シツ夫妻（安川出身）を介して、創立されたばかりの県立田川中学校の初代校長・田中常憲の知るところとなり、田中

校長の英断で、田川中学4年生への転入が許可されたことです。大正9年（1920年）4月、義統18歳の春のことです。

田中校長は、義統の転入を許可しただけでなく田川郡育英会奨学生に推薦し、田川の有力者であった筑豊銀行頭取・柳武亀太郎の援助を取り付けました。このことから、義統にとって田川は第二の故郷となり、田中校長と柳武頭取は生涯の恩人となりました。

田中校長は鹿児島出身の優れた教育者（国語・漢文）で、「水平線上に突起をつくれ」と説いて多くの学生に影響を与えた人物です。才田伊右エ門は、その後、田川中学や浮羽中学で教鞭を執りました。義統は、それらの恩義を生涯忘れることなく、東京に「田川学舎」を建設し、同窓会「岳陽会」の会長として、後輩たちの支援に尽力しました。

義統は、田川中学校4年修了で旧制第五高等学校文科に進学し、優秀な成績で東京帝国大学（現在の東京大学）法学部に進学します。

法務官僚（戦後復興、 経済疑獄事件

東京帝国大学を卒業後、高等試験（当時の高級官僚登用試験）に合格し、昭和4年（1929年）、東京区で検事となり、若手検事として活動を始めます。次第に軍部の圧力が強まり、学問・言論の自由や司法の独立が危機に瀕し、戦時経済統制が強まるなか、義統は首都・東京で職務に励み、経済檢察の第一人者として頭角をあらわします。

昭和20年（1945年）敗戦、日本はアメリカ軍占領下で治安は悪化、食糧難、闇経済が横行します。義統は、日々発生する犯罪案件を日比谷公園のバラック庁舎で

懸命に処理しつつ、新刑事訴訟法制定など新しい司法制度確立に力を尽くします。

戦後、日本社会は混乱を極め、労働者と経営者間の対立や将来の社会像をめぐる思想的対立から「メーデー事件」「下山事件」「三鷹事件」など難事件が発生。また、急速な制度改革と経済復興に伴う公的融資制度の導入をめぐる「昭電疑獄」「造船疑獄」など脱税事件や贈収賄事件が多発しました。

義統は、東京地方検察庁の検事としてそれら難事件捜査の陣頭指揮を執り、抜群の記憶力と明晰な論理能力を発揮、緻密で徹底した捜査と大胆果断な実行力で容疑者を逮捕・起訴しました。これは職務とはいえ、自身も部下も生命を懸けた仕事でした。政治の介入で実刑にできなかった例が多いのですが、その中には福田赳夫、大野伴睦、芦田均、佐藤栄作など政

界の実力者も多数いました。義統は、後に「ロッキード事件」「リクルート事件」「佐川事件」などを摘発した「東京地検特捜部」の創始者でもあります。

義統は検事として、容疑があれば権力機構でも怯まず捜査対象としましたが、「検察はあくまで協役の外科医であり、国会や社会の浄化の主役は国民である」と度々語っていました。

事務次官・検事総長、国際社会での活躍

日本は戦後の混乱を経て何とか独立を果たし、昭和31年に国際連合に加盟します。昭和30年以降、義統は最高検察庁を経て法務省事務次官になり、昭和39年から3年間は検事総長として、日本司法の中心で司法制度の研究・確立と司法の国際協力を推進します。

また、法務総合研究所の初代

所長として司法の研究体制を主導、日本初の国連機関として「アジア極東犯罪防止研修所」を誘致し、アジア各国の司法官育成に尽力。「犯罪防止および犯罪者の扱い」に関する国連会議を主催し、より良い司法制度の国際研究を推進しました。これらの事業は後進に受け継がれ、日本司法界の国際的評価を支えています。

その長年の功績が評価され、昭和47年に勲一等旭日大綬章を受章しました。

「秋月郷土館」と「秋月小・馬場文庫」

義統は、郷土秋月にも多大な貢献をしました。昭和40年、旧秋月藩主黒田家の家宝（甲冑、古文書、調度品など）を中心に設立された「秋月郷土館」建設にあたって、出光興産の出光佐三やブリヂストンの石橋正二郎などから多額の寄

付を受けることができたのは、郷土を愛し、美術愛好家でもあった義統の尽力によるものといわれています。その後、郷土館は美術館も併設し、現在も秋月の文化観光の拠点となっています。

昭和45年、江川・上秋月・秋月・安川の4小学校が統合され「秋月小学校」ができた際、義統は辞典・美術書・伝記類などの図書購入費として多額の私費を寄付しました。

自分が小学生のころ身近に良い本が無かったことから、幼い後輩たちに一流の読書環境を整え、一文を添えて子どもたちに読書と勉学を勧め、温かく激励しました。この図書は「馬場文庫」と名づけられ、その一文とともに今でも大切に利用されています。

義統は、ずっと東京での生活でしたが、田川の恩人宅と秋月には機会あるごとに立ち寄り、旧恩・旧交を温めました。秋月に来ると、

よく古処学園の子どもたちと古処山に登ったそうで、山頂で撮られた晩年の写真が残っています。そこには、かつて周囲を圧倒する迫力で畏敬された人とは思えぬ穏やかな笑顔が見えます。

義統は、昭和42年の公職引退後も司法界を見守り続け、先輩としての助言・指導を惜しみませんでした。昭和52年2月、病に倒れ、東京の警察病院で亡くなりました。74歳でした。



▲秋月小学校・馬場文庫

堀川の恩人
ほりかわこがひゃっこう
古賀百工執筆者
松本 憲明

▲堀川の概略図



▲百工の努力で整備された堀川には、後に三連水車などがかけられ、さらに田畑を潤すことに

「猿どん」と呼ばれ、堀川の恩人と慕われた庄屋がいました。その人、下大庭村庄屋古賀百工の知恵と努力の生き方とは。

筑後川の水が欲しい

まず、百工が生まれる前の筑後川と堀川の話をししましょう。今こそ穀倉地帯といわれる朝倉も江戸時代の初めのころ

は、小さな川の周辺に広がる水田や、溜め池から水を引く田が散在する程度で、松原や荒地が目立っていました。また、日照りが続くとわずかな稲も立ち枯れてしまい、作物も取れず、さらにはいなごなどの害虫にも襲われ、何度も飢饉（作物がとれず、飢えに苦しむこと）におちいりました。人々は筑後川の豊富な水

量を見て「なんとかして、これだけの水を荒地に引き込めないだろうか」と嘆きました。

堀川（人工の水路）が初めてできたのは、寛文3年（1663年）のことです。この年も長い間雨が降らず、草まで枯れはてる大旱魃（日照りで作物が枯れること）に見舞われました。

福岡藩はこの災害をきっかけに、堀川を作り、筑後川の水を導入して、水田を開発する工事を計画、翌年春には完成しました。恵蘇八幡宮前の筑後川に、小さな堰（井堰ともいい、川の流れをふさぎとめるところ）を築き、樋（水を送る仕掛）を通して堀川に注がれた水は、古毛村から下座郡城力村まで9カ村を流れ、150鈔の田を潤しました。堀川着工は、百工誕生の56年前のことです。

切貫水門

さて、百工という名は晩年名乗りました。正しくは古賀十作義重といい、享保3年下大庭村の庄屋の家に生まれました。

堀川ができて60年目の享保7年、堀川の取水口を変更することになりました。その訳は、取水口に土砂が積もり、堀川への水の流れ込みが少なくなり、せつかく開発した田も、また早魃の被害を受けるようになったからです。今回の計画は、元の取水口より少し上流にある、筑後川に面した岩盤をトンネル状にくり抜き、堀川とつなぐうとするもので、切貫水門と呼ばれ、難しい工事が予測されました。また、山田堰も移転改修が必要になりました。

の日は、百工を連れて行くことがありました。幼い百工は工事を眺めるのが大好きで、指揮をとる役人や測量の様子を見ては、木切れや小石を積んで遊びました。切貫水門と山田堰は見事に完成し、堀川には豊かな水が流れるようになりました。

百工の誓い

やがて、百工も元服（男子が前髪を落とし、服装を改めること）の日を迎えました。儀式の後、父重厚は『朝倉紀聞』と呼ぶ書物を手渡し、「これは本家の庄屋古賀高重が著した物で、この地方のことがよく調べて記されている。高重叔父は中町の荒地を開墾し、小松を植林するなど、偉い庄屋だった」と教えました。

めに尽くした高重の生き方に、あこがれを抱きました。そして、「農業を発展させ、多くの人を幸せにする庄屋になるう」と心に誓いました。

百工の決心

あの切貫水門工事から37年の歳月が過ぎ、その間新田も増加したので堀川の水量は不足し、下流の田には水があたりなくなりました。また、堀川が通っていない長洲・余名持・中村の各村はいつも早魃に見舞われ、疲れきっていました。庄屋になった百工は、深刻な水不足の問題に日夜思いをめぐらし、ようやく結論に達しました。

幾つもの工事をやることになるが、まず、現地の測量にかかろう」

苦心した測量

堀川を改修し、新堀川を延長する工事には、水路と土地の高低を測量した図面が必要でした。百工は新堀川の位置を決めるため方々の木に登っては、方向を定めました。いつも木登りをしているので、「猿どん」と呼ばれるようになりました。

土地の高低を測るには、村人の協力を得て、夜間高張提灯に燈をともし、二点間の高低差を求める作業を繰り返しました。また、細かな測量の場合は、水を盛った甕を水準器として使うなどの工夫を重ねました。こうした苦心の結果、新堀川の計画書ができ上がり、早速藩庁に提出されました。

百工の父重厚も、庄屋として工事に参加しましたが、安全な作業

百工は朝倉紀聞を何度も読み直し、誠実で学問を好み、人々のた

堀川に分岐点を作り、新堀川をおこして、これまで堀川の恩恵を受けていない村々にも水を送るのだ。

百工の業績

百工と農民の願いは福岡藩に聞き届けられ、宝暦9年12月、取水口の切貫水門を広げる工事から始まりました。まず切貫水門の内径（内側の直径）を今までの2倍に切り広げ、多量の水が流れ込むよう工夫しました。

また、平行して、古毛村柴田橋から下流の堀川の川幅を広げ、堤防を高くする工事も行いました。

翌年9月、山田堰の高さを上げ水量を確保する工事に着手、年を越えて完成しました。そして、百工の念願であった新堀川を開く工事は、5年の歳月をかけ、明和元年に完了、通水しました。具体的には、田中村北側を通過した堀川に分岐点（突分）を設け、ここから西南方向に新堀川が開通、日照り・早魃に泣いた村々に、希望の

光が点りました。これにより、堀川を水源とする水田面積は370畝に広がりました。

菱野村付近の堀川に水車が架かった数年後の寛政2年（新堀川開通26年後）、山田堰大改修の藩命が百工に下りました。

73歳の高齢ながら、百工は命をかけてやり遂げようと決意しました。

それまでの山田堰は、筑後川の対岸まで伸びておらず、そのため堀川に流入する水量も不安定でした。百工は山田堰を川幅いっぱい広げ、大量の水を堀川に送り込もうと計画したのです。大変な難工事でした。しかし、高齢を押し、採配を振る百工のもと、工事に当たった農民は不可能を可能に変えていきました。

こうして百工最後の大工事は完成しました。堀川は、一挙に

487畝の農地を潤すようになりました。寛政10年（1798年）5月24日、信念を貫いた百工は81歳の生涯を終えました。

〔史跡案内〕

山田堰・堀川取水口〓朝倉市山田、
惠蘇八幡宮前
古賀百工の墓〓朝倉市大庭三寺の上
楽墓地



▲百工の測量（版画：佐野至氏）

くにぎかい
国境を越えて排水工事に尽力した

まつおか けさん だい 松岡家三代

執筆者
川端 正夫



松岡九郎次（安貞）



松岡九一郎（保家）



松岡九平（保直）

▲松岡家資料（松岡保浩氏 蔵）

今回紹介する松岡家三代（九郎次・九平・九一郎）は、江戸後期から明治初期にかけ、当時の国・藩境を越えて川の下にトンネルを掘り排水路を横断させる大工事を行った人で、水害に苦しんでいた朝倉市南西部（蜷城・福田地区等）の排水工事「湿抜普請」に力を尽くし、その改修・改善に大変な功績を挙げた庄屋です。

時代と環境

江戸時代、朝倉市は筑前国の福岡藩（黒田藩）領、久留米市や大刀洗町は筑後国の久留米藩（有馬藩）領でした。国も違えば藩も違いますから、その境目で互いの利益が対立することも多く、さまざまな争いが生じました。川の流れが強く当たらないよう、川岸に杭を打ったり竹藪を作ったりすると、こちら側が受け流した流れは反対

側に強く当たるため調整は難しく、鮎などの漁業権も利害が対立しました。

床島用水の建設と下座郡の湿地化

蜷城・福田地区など筑前国「下座郡」と筑後国久留米藩の境は、筑後川の北側にあり、桂川・佐田川・小石原川は、国境を越えて筑後川に流れ込みます。

筑後久留米有馬藩は正徳2年（1712年）、筑後川本流に「恵利井堰」と「床島井堰」を築造し、「床島用水」を引いて三井・御原郡約1500鈔の灌漑を行いました。このことで、下座郡は川尻を塞がれてしまい、蜷城・福田地区では水が滞って稲作・畑作に大変な被害が生じました。裏作の麦も大豆も菜種も生育せず、大雨で洪水になると水が引かないのです。

湿田では牛馬で耕すことも、稲の刈り干しでもできません。村人は蓮根を作り、福岡藩も免税などさまざまな対応をしましたが、国境を越えた排水工事を実施するまでには至りませんでした。

長田村庄屋・ 松岡九郎次（安貞）

江戸時代は、集落ごとに庄屋といわれた村役人が藩から任命されていました。地元の名望家（財産・人望がある人）が任命され、多くは世襲でした。庄屋の役割は、年貢の取り立て、村人の生活の管理、藩命の伝達、藩への調査報告などで、村の行政一般を行いました。

松岡九郎次は、寛政12年（1800年）に長田村の庄屋に任命され、また、筑後川に関する水問題の交渉役「三庄屋」を命ぜられました。「恵利井堰」「床島用水」の

築造から100年を経過しても、長田村を含む下座郡蜷城・福田から筑後三井郡本郷・千原一帯の数十カ村の湿地状況は変わらず、毎年水害が起こり、作物も十分に生育しない状態が続いていました。

九郎次は、上座郡菱野村（旧朝倉町）の庄屋・大内弥平義延と協力して、この長年にわたる湿害を一挙に解消するための排水工事の実施を福岡藩役人に進言し、許可を得ます。国境・藩境を越えて、同じ被害にあっている村々の庄屋と何度も話し合い、辛抱強い交渉の末に久留米藩側の同意を取り付けました。

それは、福岡藩が久留米藩領も含めて排水溝工事を行って湿害を除く一方、福岡藩が筑後川の護岸のために作った上座郡原鶴の竹林と下座郡長田の柳乱杭を除去するというものでした。こうして工事

の実施にこぎつけたのです。

文政8年の大工事

文政8年（1825年）2月、10月、桂川右岸の下長田に鉄製水門付き「第一暗渠（トンネル）」を作って西へ水路を引き、次に久留米藩領床島村で佐田川の下に「第二暗渠」を掘って横断後、佐田川に平行して流し、さらに西流する床島用水に「第三暗渠」を設け、潜って筑後川本流へ水を流し込むという、全長約2キロメートルの大排水路「長田川」掘削工事を実施したのです。



▲石で作られた第一暗渠

同年1月～4月、下座郡福田村と三井郡大堰村の一部約200鈔の湿害を除くため、小石原川の支流「二又川」を、床島用水の下を暗渠で潜らせて下流に流し、西原村で小石原川に合流させる工事を行いました。全体で約5キロメートルに及ぶ水路掘削・暗渠工事でした。

また、交換条件の上座郡志波原鶴の竹林と下座郡長田の柳乱杭の除去作業も誠実に行いました。

これらの事業は、明治・大正・昭和の改修を経て、平成になってようやく完成した大事業で、当時としては技術的にも大変な難工事でした。事業の経緯は、今は逆に床島用水が二又川を潜る左岸（大刀洗町徳次）の「二又川改修記念碑」に記されています。

「長田川」「二又川」の二大排水工事によって、下座郡南部と三井郡東部の百数十年にわたる湿害の

苦しみはほぼ解消し、肥沃な耕地に豊かな農作物が生育できる環境ができたのでした。

文政9年（1826年）に現地を視察した福岡藩主黒田斉清は、この工事を成し遂げた功を賞し、九郎次を士分（武士）に入れようとしたが、彼はそれを固辞して受けず、代々3人分の俸米を賜り、苗字帯刀（姓を名乗り、刀を持つこと）を許されました。九郎次は天保13年（1842年）、66歳で亡くなりました。

松岡九平（保直）

九平は九郎次の子で、父の後を継いで長田村の庄屋となりました。人柄は質朴で才知に優れ、思いやりのある人でした。職を奉じて村民のために尽くし、村民をまとめて度々の洪水に対処し、地域の水利を守りました。

「長田川」も被害が出れば修理が必要になります。筑前福岡藩領の改修はできても、筑後久留米藩領での工事は思うようになりません。筑後久留米藩領の床島で佐田川の底を西に横断する「第二暗渠」に砂石が詰まり水が吐けなくなったことから、両国を何度も往復し約10年地道な交渉を続け、文久元年（1861年）12月、排水溝修理の工事を完成させました。藩主黒田長溥はその労を賞して俸米を与えました。九平は慶応3年（1867年）、59歳で亡くなりました。

松岡九一郎（保家）

九一郎は、娘婿として松岡家に入り、九平の後を継ぎ長田村の庄屋となりました。この人も「長田川」の維持・改修に力を尽くしました。

特に、佐田川を潜る「第二暗渠」改修の際、父・九平は暗渠を短くした方が水吐けが良くなると考えますが相手に聞き入れられず、長い暗渠にしたところ数年で砂石が詰まり、暗渠を短くしなかったことを後悔していたことから、明治の改修で短く幅の広い暗渠にする工事を実現したのでした。

この工事も事前交渉が大変でした。何しろ明治4年（1871年）の廃藩置県で福岡藩も久留米藩もなくなり、福岡藩は「福岡県」に、相手の三井郡は一時「三潴県」になったため、調整は困難を極めました。しかし苦労を重ねた末、明治5年（1872年）、父の遺志を実現しました。また、長田川堤防に筑後川への水抜き自動開閉水門を設け、排水を強化しました。

明治8年（1875年）、県から松岡家三代の功績を賞する賞金

を受け、明治15年（1882年）には、長田村民が下長田の堤防に、松岡三代の功績と工事の事跡を記念して大きな石碑「鑿渠碑」を建てました。この碑は今も、その後新しく作られた「床島用水」の魚道や「新桂川水門」を見守るように建っています。

明治16年、九一郎は54歳で亡くなりました。松岡家三代の墓は、八重津の松岡家墓所に並んで建てられています。治水に功あつた人におさわしく、墓石は大きな丸い川石で、法名、卒年、墓誌が記されています。



▲丸い石が特徴の墓

福岡藩第一の筑前商人

佐野半平、弥平父子

執筆者 後藤 正明



▲佐野半平（佐野家資料、佐野命子氏 蔵）

郷土朝倉地方（旧福岡・秋月藩領。甘木町は福岡藩領）の産業・

経済において、活躍した人物に佐野半平と長男弥平がいます。江戸時代中ごろから筑前国朝倉地方の特産物にまで発展した産物に木蠟（はぜろう・ろうたけの原料）がありますが、その木蠟業の代表的商人になった人物が佐野父子でありました。今回、朝倉経済の代表となった半平、弥平の商人としての生き方、経済活動について紹介していきます。

半平の生い立ち

半平は寛政9年（1797年）、佐野家の6代目として甘木高原町に生まれました。代々小規模な商家であったと思われませんが、木蠟が朝倉地方の特産物になっていく中で、木蠟問屋、質屋業を営みました。当家の屋号は佐野屋といい、商標は「令」を使用しました。半

平の妻は、甘木庄屋町の白水休助の娘でした。

朝倉の特産物木蠟と佐野屋

筑前国では、享保15年（1730年）に那珂郡山田村庄屋・高橋善蔵が肥前国に櫛樹栽培の研究に出かけたのが最初でした。善蔵のまとめた「窮民夜光之珠」は北部九州の櫛樹栽培の技術書として普及しました。農民らは、副業として、櫛蠟に期待をしていたのです。宝暦元年（1751年）、藩は上座郡（朝倉郡の前身）内の櫛畑に櫛樹を植えさせて栽培普及にあたりました。そして寛政8年（1796年）、藩は御国中櫛実蠟御仕組を實施し、博多、植木、甘木に蠟座（ろうざ）（藩営専売所）を設置させました。蠟座に集まった蠟は、大阪や江戸に売り払われました。甘木が蠟座

になったことでも、当地方の蠟燭生産が高かったことを物語っていますが、盛況なことは甘木町の蠟燭数が25軒を数えるほどになっていることでした。やがて、佐野屋は木蠟問屋の代表として活躍しました。

福岡藩の莫大な借金解消のため 生蠟御仕組の業務担当

藩は、藩政の改革と財政建て直しを計りますが、その一つに特産物蠟燭の一手買占め、販売がありました。嘉永2年（1849年）から藩の生蠟御仕組を指導したのは、天領日田の富商広瀬久兵衛でした。安政4年（1857年）になると、広瀬は総支配人になり、藩領の有力商人博多の瀬戸惣右衛門と甘木の佐野半平の兩人に領内の蠟・蠟買占め業務を担当させ、

藩独占の販売が改めて実施されました。瀬戸、佐野とも広瀬に信用された商人でした。

半平は、藩内の窮乏を救うため、藩に対し金1万4000両の献金をしたことが、記録されています。「奇特者佐野半平、褒美として永代70人扶持（扶持米）を給い、年始の礼を給う」とありますが、こ

の献金は藩内随一の献金だったことがうかがえます。また、秋月藩からも相当の待遇を受けたと伝えられています。

安政2年（1855年）の記録では、「甘木の家々に限らず大庄屋等を勤めた面々、いずれも衰退し、（中略）半平は質素の人で粟畠にも出かける心掛けて次第に資

金を殖やしていきました。悴代にその教えは引き継がれ、家は取り続いた」と記録されています。

半平は、慶応2年に藩の御用達方、翌3年に夜須郡（朝倉郡の前身）甘木村大庄屋格、明治2年3月に財政顧問たる御銀用受持に就任、地元地域はもちろん、藩の財政建て直しのために奔走したのです。半平は、その後佐野屋の大坂進出を見届け、明治9年、80歳で亡くなりました。

弥平の生い立ち

弥平は、文政9年（1826年）、甘木高原町に半平の長男として生まれました。妻は野見山信といいます。弥平は、半平の教育のもとに成長し、一族の佐野東庵の影響を受けたといわれています。苦勞して医師になった東庵は、天領日田の広瀬淡窓の咸宜園で学びました。



▲佐野弥平（佐野家資料、写真提供：佐野命子氏）

後年、木蠟の商いで関係する広瀬久兵衛は淡窓の弟に当たる人です。半平と弥平は、東庵の生き方に強い影響を受けたと伝えられています。弥平は、東庵のもと勤王志士（高杉晋作、真木和泉、伊藤博文等）を高原町薬師堂にて支援したと伝えられています。のち弥平は、藩から咎めを受け、数年間謹慎したといわれています。

佐野屋の大阪進出

明治5年、佐野屋こと佐野商会は旧福岡藩との関係を兼ねて、福岡藩の蔵屋敷（大阪中の島三丁目）を使用しました。この大阪支店には、貯蔵倉庫、生蠟問屋、醤油西店がありました。なお、弥平の弟・半五郎は、大阪高麗橋に佐野屋出店を出し、博屋輪兵衛と名乗り、生白蠟（蠟製品には2種類あり、生蠟は樫実から蠟を採った製

品をいい、白蠟とは蠟を天日で干して白くした製品のことをいう）、米穀の商いを行いました。その後、佐野屋の商取引（蠟・米・染物・薬等）を甘木商人（佐野一門、緒方具嶋、藤井、平井、高山、上野、相川等）とともに行いました。弥平は、大阪に佐野屋組の消防団組織を結成し、長堀川に佐野屋橋を架けました。弥平は父・半平同様に社会貢献を進んで行いました。

福岡銀行の前身 国立十七銀行への参加

秋月の乱の翌年、明治10年（1877年）、弥平は国立十七銀行の初代頭取に就任します。旧福岡藩黒田家・三奈木黒田家、旧福岡藩士、筑前商人らの期待が、国立十七銀行の創設でした。弥平は、同14年まで取締役として働きました。

海運業・運送業への 挑戦と、蒸気船「寛永丸」 の購入

佐野屋は藩政時代に蒸気船を購入したと伝えられていますが、記録では明治6年以降、福岡県に払い下げの申請をして、寛永丸（通称）を所有したことが

受け継がれた気風は、朝倉経済を代表しただけでなく、福岡、大阪までも佐野屋の商人としての生き方を示せたと思えます。明治23年（1890年）、熱心な仏信者弥平は、65歳の生涯を閉じたのであります。お墓は、父・半平と同じ甘木光照寺に葬られました。



▲朝倉の堀川沿いの樫並木

わかります。貨物運送では、福岡の村上義太郎と共同で商いを行っています。しかし、残念なことに、佐野屋所有船の沈没の影響からか、明治15年に佐野屋の経営が見直され、大阪店も閉鎖することになりました。弥平の大経営者としての夢は打ち砕かれましたが、父・半平から

県下第一の養蚕業興隆に尽くした

安陪庄作

執筆者
宮崎 成光



▲安陪庄作肖像（安陪悟氏 蔵）

生い立ち

安陪庄作（天保3年～明治30年）は三奈木の出身で、農業家として郷土の産業の発展に尽くした人です。また県会議員をつとめ、政治でも活躍しました。特に、県下でいち早く養蚕業の振興に努め、農家の中心産業として広めることに力を発揮しました。

庄作は、天保3年（1832年）、萩本伊右エ門の第3子として生まれ、天保10年、福岡藩家老黒田氏の家臣に属していた安陪家の養子となりました。天保13年、家を継ぎ三奈木に住みました。そして、福岡藩の命で長崎警備に従ったり、慶応2年には、長州追討の役に従ったりしました。

明治の世になると、王政復古、四民平等、廃藩置県と世の中の仕組みが急激に変わりました。その

激動する中であって、庄作は郷土のリーダーとして村々の世話を任されました。県会が開かれると、庄作は公選で朝倉3郡の最初の議員の1人にも選ばれました。

しかし、庄作の心にはどうしてもやりたい夢がありました。人間には、もって生まれた才能がある。人間としての成功は、その才能を伸ばし生かすことだ。自分にとっては、殖産興業を通して世の役に立つことだ。彼は、県会議員を辞めて、殖産興業の振興に専念しました。

難局を養蚕で乗り切る

明治になって多くの士族は仕事をなくし、何で生計を立てるか迷っていました。農業や商売などいろいろ取り組みましたが、士族の商法でうまくいきませんでした。そのとき庄作は、「三奈木は、東北

に山があり、南は広く開けた地形で、空気の通りもよい。また、佐

田川の水も豊富で、川が運んだ砂や土でできた土地である。この地形や気候から考えると、蚕を飼うのに適していると考ええる。この難局を養蚕業を起すことで乗り切るうではないか」と仲間呼びかけました。

各地の養蚕業に学ぶ

明治5年（1872年）の春、庄作は桑種を求めため、仲間を募って筑後地方に出かけました。買い求めてきた苗は、仲間に分配して桑園を作るよう勧めました。

「この養蚕業は、郷土の産業として大きく伸ばさなければならぬ。多くの人と手を携えてやることで、郷土の産業として成長させることができる」。これが彼の信念でした。これ以後、これまでの自然生

の山桑から品種の良い桑園へと年々改良されていきました。

明治6年春、庄作は各地の養蚕業の篤志家を探しては、よい蚕を育てる桑種、蚕の育て方や製糸業の在り方などについて教えを請いました。

庄作は自ら出向いて学び、工夫するとともに、仲間にも教えさせた。また、仲間に旅費を与えて各地の養蚕業についても学ばせました。養蚕業を盛んにするためには、よく働くことも大事だが、多くの人に広める手助けができるようにならなければならないと考えたからです。

養蚕から製糸へ

明治7年、上州（群馬県）製の座操車ざくろぐるまを手に入れると、郷里の職人奈田金十にこれを大量に造らせ広めました。

明治8年、仲間を熊本に派遣して、夏蚕かさんを飼育する清涼育という方法や座繰製糸法を学ばせました。自らも夏蚕を飼い、蚕児育養法や座繰製糸法を多くの人に伝えました。努力の結果、養蚕事業がようやく郷土に根を下ろし始めました。

明治9年、養蚕製糸の技術者を養成するため、県内に広告し募集しました。すると、技術を学ぼうと、遠近の有志の女性たちがたくさん集まって来ました。

その一方で、仲間と計画して、肥後の製糸場に女工を派遣して、さらに新しい技術を取り入れることも続けました。そのため、製糸

業はさらに充実していきました。

この年、養蚕製造組合条例に基づき、筑前の同業者がまとまって筑紫組という会社を設立しました。庄作は、選挙で役員に選ばれました。

明治10年、庄作は、蚕種の飼育に成功し、同業者に分けることができるようになりました。このころになると養蚕業が充実し、機織法の研究が必要になりました。そこで、庄作は二女のいとを熊本に派遣し、その方法を学ばせました。そして、自宅で郷土の女性たちに技術を教え広めることにも取り組みました。この技術を学んだ多くの者は、家計の収入を増やすことができました。

世界に羽ばたく「月恒社」誕生

明治14年（1881年）、庄作



は仲間と力を合わせて製糸会社を起こしました。新月が満月になるように、会社がますます盛んになることを期待して、会社の名前を「月恒社」と名付けました。

社長に推された庄作は、「今我が国は、多くの品物を輸入に頼っているが、本当にこのままでいいのだろうか。人々の暮らしを豊かにし、国を富ませるためには、私たちの智恵で産業を興し、作った品物を諸外国に売る策を考えなければならぬ。私たちは養蚕業をさらに盛んにして、絹糸を諸外国に輸出しようではないか。このこととで国の輸出入の均衡を取り戻すことの一助になろうではないか」と社員に熱く語りかけました。

明治16年、「月恒社」は経営に失敗し解散することになりました。しかし、庄作の養蚕業に対する情熱は衰えませんでした。庄作

は、その後も新しい養蚕技術の普及・指導活動を続け、長男勝太郎には、顕微鏡を使った繭まゆの研究に取り組ませました。

やがて、三奈木を中心とする朝倉地方の養蚕・製糸法の技術は、九州地方で高く評価されるようになりました。大正14年には、朝倉地方の桑園の面積約1120ヘクタール、繭の収穫量約395ト、売上は当時のお金で117万7224円になりました。その後も、昭和15年ごろまで伸び、郷土を豊かにしていきました。

郷土の新たな発展を願って息づく精神

庄作は明治30年、60歳で亡くなりました。村民は、庄作の功績に感謝して墓前に石灯籠1対を建立しました。安陪庄作の小伝編纂のおり、三奈木黒田家の黒田一雄

は、彼の業績を讃え、易経の中から取った、人知を開発し事業を成し遂げた意味の「開物成務かいぶつせいむ」の書を贈りました。庄作が取り組んだ養蚕業は、太平洋戦争に伴う食料難や化学繊維の発明などによって、この地方から姿を消してしまいました。しかし、庄作が残した「開物成務」の精神は息づいています。

三奈木地区の体育祭では、

- 〳自然のふところ溢るる恵
 - 〳土にしたたる熱汗こって
 - 〳垂穂豊かに桑園続く
 - 〳県下の養蚕始めしところ
 - 〳三奈木三奈木先覚の村
 - 〳古武士の山河に意気なお宿る
 - 〳救え難局振るえよ農村：
- と歌い続けることでしよう。



▲清岩寺にある安陪庄作の墓と石灯籠

のぼり
幟に情熱を注いだ二人

かじわらとらじ
くまもとよいち
梶原虎次・熊本与市

執筆者
安陪 悟



▲虎次が不眠不休で描いた幟下絵の一部（梶原康嗣氏 蔵）

歴史の表舞台で活躍し、歴史にその名を刻む人がいる一方で、地味ながらも自分の信念を貫き通し、地域で伝統の技を伝えた偉大な人物もいます。

私たちの故郷で、職人として情熱を注いだ、杷木染職人・梶原虎次と、甘木染職人・熊本与市を紹介します。

独学で職人になった
梶原虎次

虎次は、米山よねやまを源流とする筑後川の支流、白木谷川のほとり、杷木池田に、慶応元年（1865年）、梶原仁助の長男として生まれました。父・仁助は、鍛冶を業とする職人で、農具を製作するかたわら、刀鍛冶としても地域で名の通った人物でした。

虎次は、幼いころから父の仕事を受け継ぎたいと思っていました

が、父に連れられ神社にたびたび参拝するうちに拝殿の絵馬に興味を持ち始め、暇があれば武者姿の絵を描くようになります。

そしてある日、父から「お前は、このごろ、絵を描くことばかり夢中になっているが、家業の鍛冶を、長男のお前に継いでもらいたい」といわれます。いつかはこの日が来ると思っていた虎次は「実は父さん、絵馬に描かれた武者姿の絵が好きで、絵師になりたい」と打ち明けます。

父・仁助は、顔を曇らせましたが、虎次の歩く道に強く反対しませんでした。

絵の修業で上方へ

青年期を過ぎるころ、虎次は大胆な行動に出ます。家族の反対を押し切って田畑を売り、上方に絵の修行で旅立ったのです。そして、

大坂、京都などの神社仏閣の絵馬を始め絵に関する多くのものを見聞修業し帰ってきました。

虎次は、人から認められる立派な絵馬を描きたい一心で、古里の一番高い山「米山」^{よねやま}を雅号とします。虎次の絵馬は、人々のうわさになり、伊勢神宮参拝の記念にと注文が相次ぎました。

現在でも虎次の絵馬は杷木神社、久喜宮の日吉神社に残っています。

絵馬師から職職人へ

虎次は絵馬師として認められ生活も安定しましたが、武者絵を別な形で生かすことができないかと考えていました。

杷木神社に参拝し、幼い子どもが神殿に向かって柏手を打つ姿を見たとき、上方で修業中に見た端午の節句の職が脳裏をかすめました。虎次は「そうだ。子どもたち

の立身出世、無病息災を祈る職作りを一生の仕事に」と決心します。

その日から職の下絵描きを始め、不眠不休で500枚以上の下絵を描き上げます。絵馬には自信がありました。しかし、職は不安でした。しかし、一度決めたら後に引けません。まず注文取りから始めます。男子誕生の家を一軒一軒まわり、下絵を見せて注文を取っていきました。交通が不便な時代にたいへんな苦勞でした。

虎次の職の武者絵は、いつしか評判になり、遠くからの注文もありました。職職人として認められた虎次は、父への恩返しができたと思いました。

虎次の職職人としての技術を頼りに、日田方面から弟子入りする人も増えてきました。弟子たちには必ず、父の言葉であった「職人は作品に魂が入ってこそ真の職

人」を指導の中心におき、立派な職職人を育てました。

独学で自らの才能を開花させた職職人・虎次は、昭和12年、端午の節句の前日に72歳で亡くなりま

した。

職は、昭和60年、福岡県の伝統工芸品に指定され、その伝統と技術は現在にも受け継がれています。

三奈木の手作業職職人 熊本与市

与市は、寺内堰から佐田川の水を三奈木川に流し、家の前を流れ

る小川で米や野菜を洗うことができるほど水清き三奈木の里に、明治38年（1905年）、熊本文太郎の四男として生まれました。幼少のころの与市は、学校から



▲与市が製作した職（個人蔵）

帰ると、道をはさんで自宅の向かい側にあった林染屋に遊びに行くことが日課でした。

与市は父・文太郎から「お前は長男ではないから、家業の農業を継がせることはできん。だからといって分家して農業をさせるだけの田畑はない。職人として身を立ててくれないか」といわれました。

父の話聞いた与市は、数日考へ抜いた末、「そうだ、自分の遊び場であった林米吉さんから染物の技術を習おう」と決心し、父の口添えで見習いになりました。これが与市の職職人としての始まりです。

本格的な職職人の修業へ

与市が最初に職職人として弟子入りしたのは13歳のときで、田主丸の染物屋でした。ここで3年間

修業して、甘木の染屋に再度弟子入りし、本格的な職職人の道を歩み始めます。大正10年（1921年）、16歳のときでした。

そのころの甘木の町には庄屋町筋に問屋9軒、染屋7軒、型屋7軒、晒屋4軒、仕上屋5軒がありました。甘木染の全盛期で、年間400反の生産をしていました。なお、甘木染は、天保5年（1834年）、甘木の町で興業を打った、7代目市川団十郎の目にとまり江戸に持ち帰られたことが始まりとされています。

新弟子の修業の仕事は、明け方も暮れても洗い張りで、冬の朝の冷たい水が身にしみました。この辛い仕事を2年間経験した後、型押しに進むのです。なかには、辛い修業に耐えかねて辞めていく弟子仲間もいました。一人前の職職人になるためには、弟子の年期が

5年間で、その後、半年間のお礼奉公が必要でした。

刷毛一本に魂をこめて

与市の得意な絵は、加藤清正の虎退治を始めとする、勇ましい武者絵でした。

職の製作過程は次のとおりです。まず木綿の生地の上に型紙をのせ、これを型板で押さえ、次にもち米

で作った型地のりを塗り、生地に下絵を描きます。のりが乾いたら染色作業です。刷毛に10色あまり混ぜ合わせ、染料を含ませ、武者の顔、鎧、馬などを一つひとつ描いていきます。失敗は許されません。集中心が強く要求され、刷毛に魂をこめての手作業です。その後、流水で水洗いしてのりを落とし、天日に干します。清流と太陽の光が職の美しさを決めます。

職職人の神髄を發揮

昭和20年（1945年）の終戦直後、一時的に空白の時代もありましたが、まもなく手作業による職作りが復活します。修業時代の完全な手作業に、熟練の技が加わり、与市が製作した美しい職が5月の空にたなびくようになります。

与市の手作業による職に心を打たれ、注文が後を絶ちません。自分一人では仕事がさばけないので、晩年は妻・ナヲの協力を得て職職人としての神髄を發揮しました。甘木連合文化会は与市の功績をたたえ、第2回甘木文化功労章を与えます。与市は苦しかった修業の日々や、人々に喜ばれ天空にはためく職を思いながら、平成12年（2000年）、95歳で天寿をまっとうしました。

地下水で美田を拓いた

橋本郁太郎

執筆者

宮崎成光



▲橋本郁太郎（写真提供：橋本菊江氏）

橋本郁太郎（明治元年～昭和14年）は、立石の相窪に生まれ、25年間も立石村の村長として郷土の発展に尽くした人です。

なかでも、世に先駆けて地下水を利用して美田を拓いたことは、その後の農家の暮らしを豊かにすることに大きな力がありました。

郁太郎は、庄屋であった茂七郎、トマ子の長男としてすくすく育ちました。明治13年6月に県立甘木中学校が創設されると、早速入学しました。しかし、郁太郎が16歳のときに父を亡くし、18歳のときに母までも亡くしてしまいました。3年ばかりの短い在学期間でしたが中学校をやめました。郁太郎は、3人の弟たちに「生活を豊かにするには、産業を盛んにすることだ。そのためには学問が大切になる」と、産業を興すことや勉強することの大切さを話しました。郁

太郎は、暇を見付けては読書に励み、いろいろな知恵を身につけていきました。

困ったことや分からないことがあるときは、叔父の利一や大叔父の藤右衛門にすぐ相談しました。2人は郁太郎の相談を受けると、「苦しくても、寂しくても負けるんじゃないぞ。兄弟仲良くがんばるんだぞ」と、仕事のことや弟たちのことなど親切に世話をしてくれました。

米作りには むかなかった相窪

そのころの相窪の土地は、米作りにあまり適しませんでした。佐田川の左岸にある相窪は川が山を削って造った扇状台地にあります。そのため土地は砂質で水がすぐ染み込んでしまうのです。わずかに湧き水が流れるそばや、長畑の



落とし水が来るところに田んぼがあるくらいでした。それで相窪の田んぼは耕地面積の1割もありませんでした。明治36年に大干魃かんぼつがありました。水が足りなくて撥釣瓶はねつるべで水をやりましたが、到底

焼け石に水で、かけるとすぐに乾いていきました。その年はとうとう1粒の米も取れませんでした。そんな年は、相窪の人たちは苦しい生活をしなければなりません。サトウキビから取れた砂糖を売ってお金に換えたり、軍の仕事を引き受けてお金をもらって生活したりしました。相窪の人たちは、隣村の秋祭りの音をきくと、「自分たちも米の取れる田が欲しい。

い。水さえあれば、自分たちも生活が豊かになるのにな」と、つくづく思うのでした。水を確保して水田を広げるとは相窪の大きな夢でした。

仲間と取り組んだ 水田開発

あるとき、相窪で火事がありました。みんなは駆けつけ必死に水をかけました。そのうち手押しポンプが付きました。ガツチャン、ガツチャンと力一杯押すと水が勢いよく飛びました。しばらくして火が消えました。郁太郎は腰を下ろすと今汲み上げた井戸が目に入りました。郁太郎はじっと食い入るように井戸の中を見つめました。「あれだけ、水を汲み上げたのに、この井戸の水は…そうだ、水はあるんだ」

郁太郎は、早速仲間たちに呼び

かけました。「みんなこの土地を拓いて田んぼにしよう」

「田んぼにすると言うてん、水がないとでけんばい。水はどこにあるとな。それに、費用もえらいしこかかるもん。そげな金はなかばい。それはどうするな」

「いや、水はある。水のこと俺が考えるけ、耕地を整理して田んぼにしようや」

この前火事があった日のこと、井戸の水を汲んでも汲んでも涸かれなかつたこと、他の井戸の水もあつたことなどを話しました。そして、新しい法律ができて国からお金が借りられるようになったことなど一つひとつついでいねいに説明しました。始めのうちは、みんな

は本当にできるだろうかと半信半疑でした。しかし、苦しい生活から抜け出すため頑張ろうと熱心に語りかける郁太郎に、反対してい

た者の中からも賛成する者が出てきました。

明治42年、仲間が集まり相窪耕地整理組合を作りました。仲間とともに委員に選ばれ、委員長には橋本郁太郎がなりました。県に耕地整理事業の申請を出しました。許可が下りるといよいよ工事を始めました。日々の仕事は大変でしたが、しかし、みんなには大きな夢がありました。田んぼを造って家族の者を幸せにしたい。みんなは力を合わせ励まし合って、来る日も来る日も働きました。努力の甲斐あつて整地した柳原、輪ノ内方面の田んぼは約15畝にもなりました。

水田を潤す地下水

一方、郁太郎にはいつも頭から離れない大きな問題がありました。「確かにこの土地には豊富な

地下水がある。さて、問題はこれをどうして田んぼへ汲み上げるかだ。うーん。なにか、いい手だてはないものか」

そんなとき、米国に渡って工学の勉強をしていた末の弟義夫のことが頭に浮かびました。義夫は、たまたま病氣治療のため帰国していました。早速弟の義夫に相談しました。

「米国には石油で動く発動機というものがあって、それを使って水を汲み上げていました。しかし、残念なことには、日本には石油発動機で水を汲み上げるポンプはまだありません。私が設計しますから、福岡の工場で機械を造ってもらってください」

それから、準備しなければならぬことをメモにして渡しました。メモには、水源池を掘ること、機械を据えるために煉瓦を敷き詰め

たしつかりした基礎を造ることが書かれていました。郁太郎は、義夫の手をぐつとにぎりしめました。

機械の製作を頼むと、郁太郎たちは明治43年7月、相窪字前田に1㍍程の水源池を掘りました。また、石油発動機やポンプを据えるための基礎に使う煉瓦を探しました。久留米の宮ノ陣に煉瓦を造る工場があることが分かりました。

早速出かけて煉瓦を注文しましたが、宮ノ陣から相窪まで約30キロメートルもありました。今と違ってトラックもないころのことです。しかし、若者たちはよく協力して重い煉瓦を牛を引いて運んで来ました。

明治44年1月、待ちに待った発動機とポンプが着きました。新しい赤い煉瓦の上に発動機とポンプが据え付けられました。いよいよ試運転です。6馬力の大型発動機を2人がかりで力一杯回しました。

バース。爆発音とともに黒い煙がぱつと吹き出しました。バキューン。バース。ドスッ。ドスッ。ドッ、ドッ、ドッ。音は遠くまで響いていきました。

「やった。水が出たぞう。万歳。万歳。万歳」

みんな大喜びです。手を握りあつて涙を流す者もいました。汲み上げた水は瞬く間に近くの田んぼを潤していきました。これまでの苦労も一度に吹っ飛びました。

機械による揚水事業にかかった総工費は、当時の金で1375円

39銭9厘(明治42年当時は、米

1俵(60キログラム)の値段が4〜5円)でした。こ

の耕地整理以後、相窪で取れる作物は麦、粟

から米に変わりましたので、それ

によって収入が毎年1200円もの増収になりました。石油発動機、

ポンプによる地下水利用は、大成功を収めました。発動機も、ポン

プ揚水も大変珍しかったのでたくさん

さんの見物がありました。機械による揚水事業は、その後も改良が

加えられ今日のようになりました。やがて、相窪は豊かな土地へと

発展していきました。今青々と広がる相窪の田んぼには、郁太郎た

ちの夢とそれを受け継いだ人々の魂が息づいています。



▲相窪公民館横の池跡地に、郁太郎たちが取り組んだ耕地整理の記念碑があります

久喜宮くぐみやに水田を作った都合とごう徳太郎とくたろう執筆者
平田利一

▲久喜宮須賀神社境内にある都合徳太郎の頌徳碑

杷木久喜宮に地域の人々から
祇園様ぎおんさまとよばれ大事にされている
須賀すが神社があります。

その境内に都合徳太郎の頌徳碑しょうとくひ
が建っています。

読者からの一通の手紙

「私が小学校のころ、父から聞
いた話ですが、明治のころ久喜宮
は畑ばかりで田んぼがなく米がと
れず困っていたそうです。そのこ
ろ、久喜宮の都合徳太郎という方



▲久喜宮耕地整理の功労者・都合徳太郎（『杷木町史』より転載）

が大変な努力をされ筑後川から水
を引き久喜宮に水田を作られ、お
かげで村民は米食がされるよう
なったと聞いています。いま、時
代の流れとはいえその田園が次第
に消えようとしています。調べて
みなさんに知ってもらいたくお願
いいたします」

とのお手紙が「ふるさと人物誌
事務局」に寄せられました。お手
紙に感謝しながら、都合徳太郎を
紹介します。

25歳で村会議員に

都合徳太郎は明治4年（1871年）、久喜宮古町に都合惣兵衛の長男として生まれました。久喜宮小学校卒業後、福岡商業学校に進み、明治21年（1888年）から福岡県立勸業試験場農業実習専攻科で学んでいます。

明治24年に近衛歩兵第二連隊に入隊し同27年に日清戦争に参加し郷里にもどりました。その翌年には久喜宮発展に尽力していた父・惣兵衛が亡くなりました。

徳太郎は父の後ろ姿を見て育っていたのでしよう、明治29年（1896年）に久喜宮村会議員に当選し地域のために活躍しています。25歳の若さでした。

そして26歳で朝倉郡郡会議員に当選し、地域産業発展に努力しています。28歳のときには、志波

葉煙草専売管内（福岡県一円と大分県玖珠・日田2郡）の煙草製造者組合長に就任し、品質改良、生産拡大にとりくんでいます。

土師炭坑経営

明治37年（1904年）、33歳

のとき、宝珠山村（現在の東峰村）で土師炭坑の経営にのりだしています。当時地元の人露出している石炭を採掘し家庭用を利用していました。徳太郎は採掘権を手に入れ産業として発展させていった最初の人物です。明治45年に伊藤伝右衛門が土師炭坑を統合買収し、伊藤合名会社宝珠山炭坑として本格的な炭坑開発をはじめまでの8年間、炭坑経営をしています。

当時の久喜宮村の状況

久喜宮は北と西を山にかこまれ、東は杷木村と境し、南は筑後川に

沿っているにもかかわらず、大字久喜宮、大字若市は粟や唐芋の産地として有名でした。しかし、水利の便が非常に悪く、また水田が極めて少ないため、食料も他村から購入しなければ不足する状態だったそうです。

徳太郎の父・惣兵衛や村内有志は、筑後川の水の利用を考え協議を重ねていました。しかし筑後川水面と畑地の高低差が約6メートルあり、筑後川の水を引くためには杷木村の上流から5キロメートル以上木村を横切って掘り切り、または暗渠工事をしなければなりません。このためこの大工事業は経費負担で行き詰まり、実行不可能という結論になります。溜池設置案も位置や水量の問題で完全ではなく、揚水機設置の案については、当時の機械技術が幼稚で不完全だったため、望む効果は期待さ

れず消えていきました。

父・惣兵衛は「久喜宮に水田を作りたい、村を豊かにしたい」との思いが強く、満々と水をたたえている筑後川を見てはこの水を引くことが自分の一生の仕事と取り組んでいました。しかしその思いがかなわぬまま、明治28年（1895年）に他界してしまいます。その後、耕地整理も筑後川水利の問題も立ち消えの状態になっていました。

委員長になって水田化へ

炭坑経営の多忙の中に、徳太郎は父の意思を継ぎ、耕地整理・水田化の研究をひそかに続けていました。揚水機で筑後川の水を汲み上げる案をもって立ち上がりました。自ら委員長になって一大事業を開始します。徳太郎35歳のときです。

工費の調達、農業組合員の説得、官庁への陳情、筑後川水利組合（山田堰関係）との交渉、性能のいい揚水機の研究、視察など不眠不休の努力がみのり、明治39年（1906年）12月に工事が始まり、翌年7月に工事が完成し、59町7反歩の整然とした水田が出来上がりました。

愛知県新川耕地整理組合が使用していたドイツ製揚水機を設置し、筑後川の水はどうとうと久喜宮の整理田に流れ始めたのです。

水路の両側は玉石積みめの石垣で、久喜宮小学校の前を通り、旧街道沿いに街並みを通り左折して現国道沿いに原鶴まで続いています。約6キロに及ぶ大工事でした。

100年以上たった現在も久喜宮揚水土地改良区の管理・改良で、国道386号線の浜川信号機近くにあるコンビニエンスストア裏の

取水口からとりこまれた筑後川の水は、全長15キロにわたる水路を通り久喜宮地区の整理田102町を潤しています。

この総工費は現在の価格にすれば10数億円という巨額と考えられ、農業組合員の負担も大変なものであったと思われます。

整理当時は土地が堅く植えつけにも非常に困難だったそうです。米の収穫量も現在の半分程度で、農業組合員の中には負債の返済に困り泣く泣く田んぼを手放さなければならぬ人が多くあったと古老は語っています。徳太郎の頌徳碑が建立されたのは工事完成後23年を経た昭和5年（1930年）のことです。

産業開発に一生を捧げる

その後、徳太郎は久喜宮村を離れ、大正2年（1913年）に朝



▲久喜宮小学校前の水路



▲筑後川の取水口

鮮へ渡り、葉煙草栽培をめざし未開墾地の開墾にとりくみ、その功績を賞されて開墾地と賞状が贈られています。大正12年には一連の産業振興に尽くした功績が認められ朝倉郡長から金時計1個が贈られたとのことです。

朝鮮から戻った徳太郎は、熊本県球磨郡川村（現在の人吉市）で耕地整理委員長として同村の耕地

整理にたずさわっています。さらに雑木林を開墾し水田化する案をつくり、村当局と協議に入っている途中で、福岡市今泉で昭和8年（1933年）5月、62歳の生涯を終えました。

若いころから各地域の発展にとりくみ、一生を地域開発に捧げた都合徳太郎。産業開発の偉人として忘れることができない人物です。

わが国種痘の祖

緒方おがた春朔しゅんさく

執筆者

三浦良一



▲緒方春朔（杉東明氏 蔵）

緒方春朔これあきらは、名は惟章（1748年～1810年）は、久留米藩瓦林家の生まれですが、医業緒方家の養子となって医者になりました。長崎に留学するなどして医学の勉強に励みましたが、30歳のころに秋月に移り住んで医業につとめ、1789年に秋月藩主黒田長舒くろだながのぶにその才能を認められて藩医となりました。

春朔が挑んだ恐ろしい伝染病

春朔は、「ほうそう」の予防に強い関心を持ち、熱心に研究するようになりました。「ほうそう」というのは、現在でいう天然痘てんねんとうのことです。

この病気は伝染病の一種で、これに罹かかると死亡率が高く、運よく助かっても顔や身体にできた吹き出ものの痕あとが残って、みにくい顔

になってしまふ恐ろしい病気です。いまは、予防や治療の方法が進み、天然痘は絶滅していますが、江戸時代までは、数年毎に「ほうそう」が流行し、多くの人々、それも子どもがたくさん死んでいました。それで、当時の医者に「ほうそう」の研究をする人が何人もいたのですがなかなかよい予防法が見つかりませんでした。

緒方春朔は、たくさんの方の医学書を読み、インドや中国で考案された方法などを調べた結果「鼻乾苗びかんびょう法ほう」という予防法を発見するにいたりしました。この方法は、すでに発病している患者の「痘と」と吹き出ものの膿うみを採取し、これを乾かして「痘苗とうびょう」をつくり、それを、健康な人の鼻から吸入させて、体内に「ほうそう」の免疫めんえきをつくり出そうというもので、これを「種痘しゅとう」といいます。

春朔のよき理解者 天野甚左衛門

しかし、医学の研究というのは、理論や実験が完成しても、人間の身体で実験してみても成功しなければ完全とはいえません。ですが、人の生命にかかわる実験です。失敗すれば人が死ぬのですから、おいそれと簡単に人体実験はできません。春朔は、非常に困っていました。

このとき協力を申し出た人が上秋月の大庄屋、天野甚左衛門です。甚左衛門は春朔が秋月に移ってきたときに自宅の離れを貸すなどして以前から親交があり、春朔の研究の後押しをしてきた人であり

信を持っています。痘苗の用意も

しているのですが、いよいよとなると人様のお子を試験台にするこ
とには気が引けます。お金を出して希望者を募ってはどうかとす
める人もいるが、人の命をお金で
買うようなことはしたくありません。
こんなとき、自分に子どもが
いればわが子で実験できるのです
が、私には子どもがいないのでど
うすることもできません」と力な
く答えました。

それを聞いた甚左衛門は「私に
は、2人の子どもがいます。この
子たちに実験してごらんさい」と
言いました。春朔は驚きました
がこの申し出を断りました。

甚左衛門は家に帰って、自分た
ちの子どもを種痘の実験に提供し
たいと彼の妻に相談しました。妻
はとんでもないことと泣いて激し
く反対しました。

しかし、甚左衛門は、こんな
と熱心に妻を説得しました。「こ
の実験が成功すれば私たちの2人
の子を含めて、世間の多くの子ど
もたちがほうそうの災いから救わ
れるではないか。私は春朔先生の
熱心な研究のお姿を見てきている。
その先生が種痘の成功に自信を
もっていないさるのだから、私たち
もそれを信じようではないか」

言葉を尽くして説く甚左衛門の
熱意に打たれて彼の妻も心を決め、
「もしも不幸にしてこの子たちが
死ぬようなことがあったら、その
ときは私たち夫婦も死にましょ
う」と覚悟を定めて同意しました。
数日後に、天野夫妻は春朔を訪
ねて「どうぞ、私どもの子どもに
種痘を試みてやってください」と
頼みました。
春朔は感激しましたが、それは
できないと断りました。しかし、

天野甚左衛門は、「私は先生のお
人柄を尊敬しています。先生の研
究が成功すると信じています。こ
の実験が成功すれば、どれだけ多
くの人々がほうそうという恐ろし
い病気から救われるかもしれませ
ん。私の子どものために、また、
世の中のたくさんの子どもたちの
ために、どうぞ私の子たちに種痘
を試してください」と頼みました。

天野夫妻の誠意あふれる決心に
春朔は大変感動し、「私も命をかけ
て種痘を試させていただきます。
そういつて涙を流し、甚左衛門の
手を強く握りました。

はじめての「種痘」

寛政2年（1790年）2月4
日、緒方春朔は、痘苗を持参して
天野家に行き、2人の子どもに種
痘の術を試みました。
それから、1週間後に、男の子

が熱を出し鼻がつまって風邪のよ
うな症状になりました。その2日
後に、女の子の方にも同じ症状が
でたので、これは種痘の結果であ
ると診断しました。

それから3日後には2人とも顔
や体に赤い発疹ができましたが、
10日ほどで熱が下がり発疹も治つ
て、もとの健康な身体にもどりま
した。緒方春朔の試みた種痘法は
成功したのです。

彼の長年の苦勞が報われました。
春朔はもとより天野甚左衛門と彼
の妻も大喜びしました。その夜に
は知人を招いて祝宴を開いたと春
朔は著書に書いています。

天然痘根絶へ続く道

この後、上秋月の本田という人
の2人の子どもにも種痘を実験し
て、これも成功をおさめましたの
で、春朔は、自分の種痘法に大き

な自信を持ったのであります。

ところが、世間の人々は春朔の
種痘法の成功をすぐには認めよう
とはしませんでした。同僚の医者
のなかには、あれはごまかした、
偶然だなどと陰口をいう人もいま
した。彼は、そんな中傷にもくじ
けないで自分の種痘法の正しさを
説いていきました。

その努力が世間に認められるよ
うになり、彼の医院に種痘を受け
にくる人が増えてきました。

春朔は、彼の著書『種痘必順弁』
の中に次のように書いています。

「私が、種痘を施した子どもは
千数百人いるけれども、まだ1人
も死なせた者はなく、顔にみにく
い痘痕のあるものはだれもない」
春朔は、彼の種痘法を自分だけ
の秘伝とせず、他の医者にも広め
ました。

彼の種痘法を習い入門した医

者は100人近くいますが、近郷
はもちろん江戸、大阪、京都など
遠方からの人がたくさんいて、緒
方春朔の名声が全国に広まったよ
うすがわかります。

緒方春朔が種痘の人体実験に成
功した6年後に、

イギリスのエド
ワード・ジエン

ナーは牛痘接種に
よる種痘法を自分

の子どもに実験し
て成功しています。

春朔やジエンナー
たちの種痘の研究

が今日に引き継が
れて、恐ろしい天

然痘が地球上から
根絶されたのです

(1980年、W
HOは「世界天然

痘根絶」を宣言)。

緒方春朔は文化7年(1810
年)に63歳で亡くなりましたが、
彼の墓は秋月の長生寺にあります。
また、昭和2年に地元の医師会が
建てた緒方春朔の顕彰碑が秋月城
跡梅園にあります。



▲秋月城跡にある緒方春朔の顕彰碑

原爆医療の先駆者

調しらべ
来助らいすけ

執筆者

山崎 長太郎



▲調来助（写真提供：調朝子氏）

昭和20年（1945年）8月9日、長崎に原子爆弾が投下されたとき、長崎医科大学（現在の長崎大学病院）の教授であった調来助は救護班を作り、救出や治療を先頭に立って指揮し、活動した人です。今回は、原爆医療の先駆者・調来助を紹介します。

医学の道を目指して

来助は、旧大福村大庭の調房吉の長男として明治32年（1899年）5月15日に生まれました。

大福小学校を卒業し、県立朝倉中学校（現在の朝倉高校）に入学。大正6年に卒業し、第五高等学校（現在の熊本大学）第三部に入学。卒業後、大正9年、東京帝国大学（現在の東京大学）医学部医学科に入学しました。5年間の学業を終え、卒業と同時に第1外科の助手となり2年6カ月勤め、念願の

目標であった医師としての第一歩を力強く踏み出しました。

伊藤伝右衛門との出会い

来助の実家は、旧大福村の小さな農家で、大学に行けるだけの余裕がある生活ではありませんでした。来助は、できるだけ親に負担をかけないよう心がけ、勉学に励みました。

また、大正時代は農家の子どもが大学に行くことは、大変難しい時代でした。こういう時代でしたから、第五高等学校在学中に学資を援助してくれる人を探していました。

幸いなことに、九州の炭坑王といわれた伊藤伝右衛門が県下で優秀な青少年育成のために奨学金制度（伊藤育英会）を作り、希望者を募集していました。

第五高等学校第三部の生徒の中

から1人だけ採用したいという知らせがあり、来助が選ばれました。来助は、朝倉中学からの秀才、努力家で、将来有望な人材であるということ、早速2学期から毎月25円の奨学金（当時の教員の初任給は45円）を受けることができた『長崎医人伝』に述べられています。

3学期を迎え、来助は奨学金のお礼に福岡の「あかがね御殿」と呼ばれている伊藤邸を訪問し、伝右衛門と白蓮夫人に厚くお礼を述べました。伊藤夫妻は大変喜ばれ、3人で楽しく会食をしました。その折に将来のことなども話題となり、東京帝国大学医学部への入学希望も話されたと思像されます。東京帝国大学に合格すると、早速今までの2倍の月50円の奨学金が支給されることになりました。来助は、奨学金と軍人である叔

父の援助で、東京帝国大学医学部を卒業することができました。このような援助に感謝した来助は、「人様に恩を受けたら必ず恩に報い、恩を返す」という信条を持ち、以来このことを実践しました。

中国・朝鮮病院派遣

初志貫徹を成し遂げた来助には、大きな期待がかけられました。それは海外派遣でした。大正15年9月、北京医院外科医長に27歳の若さで赴任しました。これは、日清戦争後の日本と中華民国（現在の中国）の友好親善という日本の大きな目的と、同仁会（医界と民間外交団体幹部が作った医療事業団体）の主な活動である中華民国の医学・薬学およびその技術を普及させ、一般衛生状態の改善を図るという大きな使命がありました。来助は、2年半にわたり実践し、

成果を上げました。

さらに昭和4年4月からは、現在の韓国の朝鮮京城帝国大学第2外科助教として8年間にわたって朝鮮の医学の普及と優秀な医師の養成に尽力しました（昭和9年に医学博士号取得）。

昭和12年5月からは、朝鮮全羅南道立光州医院長を5年間務め、医療業務達成のために努力しました。およそ15年間の長い海外派遣で、日本医学の普及と日・中・韓の友好親善を、医学を通して立派に果たした彼の功績は高く評価されました。

原爆被爆の悪夢

来助は、朝鮮から帰国後、東京帝国大学の推薦と長崎医科大学の強い要請を受け、昭和17年4月、長崎医科大学第1外科教授に就任し、以来、23年間優秀な医師の養成と医学研究に没頭しました。

昭和20年8月9日の原子爆弾投下で自らも被爆し、原爆症に耐えながら、被爆者の治療・救済に努め、その悲惨さを『医師の証言長崎原爆体験』や、被爆者約8000人の治療と同時に原爆による症状等を分析して「原爆障害の概要」として報告しました。

この『医師の証言長崎原爆体験』の中には、『長崎の鐘』や『この子を残して』の著者・永井隆助教の活動や、永井助教を手術したこと、多くの教授や学生たちの看護の様子等が詳細に記述されて



います。

特に、来助が2人の息子を原爆で亡くしながら、多くの市民の救済のため家族ぐるみで看護・治療にあたったことは、涙なしには読めません。

この記録からは、彼の医師としての使命感の素晴らしさだけではなく、原爆の恐ろしさ、悲惨さ、原爆投下への怒り、戦争という悪魔に対する憎しみが、心の底から湧いてきます。

大福小学校の調文庫

来助は、大福小学校で楽しく学んだこと、そのおかげで今日の自分があること、お世話になった故郷の学校へぜひ恩返しをしたいという思いで、昭和44年から平成元年に亡くなるまで、毎年10万円円の図書費を寄贈しました。彼の死後は、妻がその遺志を継いで、平

成10年まで続けられました。

大福小学校はこれに感謝して、図書館の中に「調文庫」を作りました。その数は数千冊にのぼり、今なお子どもたちに利用されています。また、郷土思いの来助の心に報いるため、6年生の長崎への修学旅行には、毎年必ず調家を訪れ、お参りと交流が今も続けられ、生きた平和教育が行われています。

また、原爆で亡くなった2人の息子の出身校である長崎西高校には、2人がお世話になった恩返しに、奨学金が贈られています。

医師一家の調家

来助は、不幸にして原爆病にかかりましたが、この難病を克服して、89歳まで医学一筋に生き続けました。

長女・朝子には、外科医の田崎 亘治を婿養子に迎えました。亘治は、大分大学医学部第2外科教授でしたが、平成13年に亡くなりました。

亘治と朝子の息子は3人も医学者で、長男・漸は、現在、長崎大学の副学長、次男・恒明は山口



▲『医師の証言 長崎原爆体験』



▲大福小学校の「調文庫」

大学医学部を卒業し、山口県環境健康管理センター所長、三男・憲は九州大学医学部を卒業し、現在は飯塚病院外科医として活躍しています。

まさに3代にわたってお医者さん一家で、社会医療、医学研究に大いに貢献されています。

【受賞歴】

- ・勲二等瑞宝章
- ・長崎市栄誉市民
- ・長崎新聞文化賞

世界で初めてレントゲン 胸部間接撮影法を開発

古賀良彦

執筆者
山崎長太郎



▲古賀良彦（写真提供：古賀恒喜氏）

私たちの郷土朝倉から放射線（レントゲン）研究をして、保健面で広く世界の人々にまで大きく貢献した親子が生まれています。

その父親は、世界で初めてレントゲン胸部間接撮影法を開発した古賀良彦という人です（注・世界で2人、同時期にブラジルのド・アブローも開発）。

子どもは古賀佑彦すけひこといい、現在も名古屋において研究活躍中です。良彦が放射線研究をはじめた昭和のはじめごろは、肺結核けっかくにかかると「肺病」といわれ、人に伝染する恐ろしい病氣・一生治らない金食い病・ぜいたく病と大変きらわれました。

肺結核にかかったら別の建物へ移され、家族から離れて暮らさなければならぬ時代で、患者の家には子どもたちも寄りつきませんでした。

医学の道を志した 良彦少年

良彦は、明治34年（1901年）、旧大福村大字入地（現在の朝倉市）の乳業家（乳牛飼育から牛乳販売）古賀章太郎しょうたろうの三男として生まれ、きょうだい12人（男6・女6）の大家族の中で育ちました。

小学校を卒業して県立朝倉中学校（現在の朝倉高校）へ進学しました。

彼の毎日は、家業の牛乳配りの大変な仕事を手伝いながらの生活でした。毎朝暗いうちから牛乳を背負って、しかも歩いて一軒一軒に配る大変根気のいる手伝いでしたが休むことなく続け、仕事が済むとおよそ8キロメートルもある中学へ歩いて通いました。

良彦のこんな姿を見て近所の人たちは「なんと親孝行で、辛抱強い

働きたるう」と感心しました。

青雲の志に燃える良彦は、働きながら人一倍勉強に励み中学校5年間、成績はいつも首席（1番）で通し、中学を卒業すると熊本第五高等学校（現在の熊本大学）へ進み、さらに医師の道を求め九州帝国大学医学部（現在の九州大学）にみごと合格、医師を目指しての第一歩を、自分の力と努力によって得ることができました。

こうして日夜勉強にはげみ、昭和2年（1927年）にめでたく卒業、同時に医学部内科学教室に入局し、放射線研究をしていた中島教授の研究室で放射線研究をはじめました。このころの時代は放射線研究をする人はごく少なく、また変わり者とまでいわれました。それは、「放射線を研究しても金にならない。放射線を研究していると自分の命が危ない」といわれ

ていたからです。しかも医学会も外科とか内科のように重要とは考えなかったようです。

良彦はこのようなことも理解し、自分の信じる道・放射線研究へただひたすらに黙々と5年間研究して、助手から講師へ進み、昭和7年（1932年）、助教授となり併せて博士号も取得しました。彼はこの5年間の中で、すでにレントゲン胸部間接撮影法の構想を持っていました。

東北大学放射線研究へ

良彦は東北大学医学部放射線研究医師として赴任以来退官するまで実に30余年間、東北地方の結核撲滅のための研究と医師育成に情熱を傾けてとりくみました。

昭和8年（1933年）に当大学からの招聘の赴任でしたが、講師・助教授の身分が長く、冷遇と

もいえる9年間を彼は甘んじて受けました。昭和17年（1942年）に、ようやく東北大学に放射線科が設置され、はじめて初代教授となり手腕を発揮することができるようになりました。

昭和18年（1943年）には、日本で初めてレントゲン胸部間接撮影法を開発して、第1回「技術院賞」を受け、九大研究室以来の成果が認められました。

この開発した撮影法は日本の陸海軍で取り入れられて立派な成果が上がり、そして広く使用されるようになりました。それは集団検査ができ効率がいいだけでなく、胸部写真に基づいて正しい診断ができるという画期的な開発だったからです。

一方、良彦の研究室からは彼の適切な指導によって、多くの放射線研究医師たちが輩出しています。

良彦の一番弟子といわれる高橋信次は、X線CTの先駆者といわれ世界的に有名になりました。現在のコンピュータ断層撮影の基本・土台となった「回転撮影法」を開発して、輝かしい文化勲章を受賞しています。その外、松川明（福島医大校長）、星野文彦（東北大学医学部長）などの人々です。

昭和27年（1952年）には附属病院内に「放射線学校」を創り、自ら校長となって多くの放射線技師を養成して、レントゲンの普及にも力を入れました。

また実際医療活動も積極的に続けました。自分で開発した器具を自分で担いで岩手県奥まで数日間の泊り込みで多くの人々の診断をしました。

東北地方は、従来、結核患者の多い地方といわれ、特に岩手県は全国1、2となっていました。

このような地域ですから、良彦の診断活動が基になって結核への取り組み方・結核への認識などが大変前進しました。

以上のような良彦の活動が認められて、昭和23年（1948年）には「保健文化賞」を受け、さらに昭和37年（1962年）には「結核半減記念賞」という名誉ある賞を受けました。

親と子2代の放射線研究

良彦の息子もまた、父と同じ道を歩き世界の人々の幸福のために、医学・医療に大きく貢献しています。

古賀佑彦は、昭和10年（1935年）、良彦の次男として生まれ、東北大学医学部を卒業して父親と同じ道歩いて名古屋大学放射線医学教室に入局、講師を経て昭和48年（1973年）に名古屋保健衛生大学（現在の藤田保健衛生大

学）の医学部教授に就任。平成13年、退職と同時に、同大学の名誉教授になりました。

平成13年4月には、原子力安全研究協会参与として、「緊急被ばく医療ネットワーク」づくりに参画、そして医療放射線防護連絡協議会会長の重要ポストにつき、医療における被ばく問題や防護などについての研究や、この問題解決への取り組みを放射線医学会に提起しています。

特筆することは、父親良彦と2代に亘つての重要ポストに就任していることです。それは、「日本医学放射線学会会長」という日本を代表するものであるし、日本の放射線研究が世界の医学界でも大きく正しく認められ、世界の医学界をリードする役割をも担った要職です。現在名古屋において遠隔画像診断の仕事に取り組んでいます。

郷土の医学発展を夢みて

良彦は、昭和39年（1964年）、久留米大学の強い招聘を受け、第4代学長に就任しました。

久留米大学は旧制の医科専門学校が基になって新制総合大学と大きく発展をしています。その途上の学長就任ですから、研究の実績は勿論のこと経営の手腕、教育者としての人格や識見の秀れた人ということ、良彦が最適任者と認められ白羽の矢が向けられました。良彦は地域住民の要望や新制大発展のために、遠い東北から故郷久留米へと着任しました。この着任には地域のすべての人たちが両手を挙げてよろこび迎えました。そして、良彦の手腕にも大きな夢が期待されました。良彦の手腕は着々と発揮され、いろいろなプランの消化や、新し

いアイデアもできました。特に良彦の夢である医学の充実発展と現在直面している放射線治療や「癌」治療を最高の技術と最新の施設でということ、ヨーロッパまでわざわざ研究視察に行き、夢実現の第一歩というときに残念ながら病魔に倒れました。

長年の放射線研究のためか、また精力的研究の疲れのためではと案じられながら、久留米大学附属病院で最新の治療と手厚い看護を受けながら65歳の若さで、昭和42年6月29日に急逝しました。

良彦のあまりに早い死を先輩後輩、多くの人々は惜しみ悲しみ、こう言っています。「古賀良彦の早すぎた死を開拓者の運命と言いきってしまふには、あまりにも哀切にすぎる」と。

その功績によって、従三位勲二等瑞宝章を贈られています。

邑に「学び舎」を起こした

井上節堂

執筆者
八尋節夫

わが国における 学校制度の始まり

井上節堂（本名・収）を語る前に、わが国の学校制度がいつから、どんな形で発足したかについて触れておきたいと思います。

それは、幕末・徳川300年の封建社会から解放された明治元年（1868年）あたりから始まったといえるのではないのでしょうか。誕生したばかりの明治新政府は、明治4年に教育行政の府として文

部省を設置、直ちに12人の学制取調掛りを任命し「学制」条文の起草にあたらせました。そして明治5年8月3日、太政官布告で「学制」を公布しました。つまり近代的国民教育制度を作り上げたのです。

これは、わが国の教育の宣言ともいえるべきもので、子どもを入学させることは親の責任であり、必ずこれを果たさなければならぬものとなりました。それには次のように書かれています。

「人々自らその身を立てその産を治め、その業を盛んにして以つてその生を遂ぐる所以のものは他なし。身を修め智を開き、才芸を長ずるによるなり。而してその身を修め智を開き才芸を長ずるは、学にあらざれば能わず、これ学校の設ある所以にして、爾今以後一般の人民必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す。人の父兄たるものよろしくこの意を体認し、その愛育の情を厚くし、その子弟をして必ず学に従事せしめざるべからざるものなり。高上の学に至つてはその人の機能に任ずると雖も、幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せざるものはその父兄の罪とならう」

こうして全国を8大学区、256中学区、5万3760小学区に分け、それぞれの学区に大学、中学、小学校を配置するという制度

を設け、全国いたるところでその実現に向けて動き出したのでした。それこそ合理的・体系的・梯子型の国民教育制度の下、小学校教育を義務化したものであり、これらは欧米の近代学術の吸収を主としたものでありました。

明治12年（1879年）には「教育令」を公布して、教育を地方の実情に即するように、明治14年には「小学教員心得」を発するなどして、次第にわが国の教育を不動のものとなるよう努めてきました。

初めて誕生した 邑の小学校

こうした国の流れは、当然私たちの郷土にも入ってきました。早速、明治7年に私どもが住む朝倉市・郡の26カ所に小学校が誕生しています。しかし、どの学校も教師はほとんど1人で、学ぶ生徒は

多い所で100人ほど、少い所で15人ほどだったと当時の記録に記されています。まさに、にわか仕立ての学校といえるかも知れません。

特に、私たちの地域は農村であり、中にはこの時代の風習として「百姓に何で学問がいる。紙や筆に銭を出して、子どもに学問させるやつは、田んぼに草を生やすもとじゃ」といわれ、ためらいを持つ者もいました。

下座郡長田村の井上節堂

そうした地元に誕生したばかりの26の小学校の一つに「長田小学校」があります。現在の蜷城地区で長田村藤島神社の社殿を仮教場にして開校したものです。実は、その最初の教師として白羽の矢を射止められたのが、これから紹



▲長田小学校跡に建つ節堂の頌徳碑（藤島公民館横）

介する井上節堂です。

節堂は、天保9年（1838年）に秋月藩の松村方成の子どもとして生まれましたが、同藩の井上正敬の養子となりました。21歳で秋月稽古館の訓導となった後、藩主の侍講も兼ねたほどの英才でありました。儒学に精通し、およそ読まない書は無いというほどの読書家であり、博学の人といえます。明治維新後、廃藩のため職を失い、自分の住まいを当地下座郡長田村に移していました。そして、この

度の小学校設立の話が出てきたのです。今になって思うことですが、節堂が居たからここに学校を設立したのか、それともこの地に学校設立を決めたとき、偶然に節堂の存在を知っ

たものか。いずれにせよ、幸いにもこの地に余人よじんならぬ井上節堂という人材を得たことは、村にとつても大きな喜びだったに違いないと思います。早速、村の要請で明治7年（1874年）2月から明治14年2月まで長田小学校の首座訓導として勤めることになりました。

邑の学び舎

長田小学校の誕生

しかし、当初は就学率も低く、

低調な取り組みだったようです。なぜならば、農村では小学校を1校設けること自体厳しいものがありました。小学校に要する運営経費は、管内村々の各戸の賦課金や有志による寄付金などに頼らなければならず、住民に多くの負担をかけることになるからです。村長は、小学世話役として任命され、そのために大変な苦勞を余儀なくされました。

小学校の修業年限は、当初は



▲長田小学校跡（藤島神社／阿弥陀院）
（『村誌ひなしろ』より転載）

2年間でしたが、そのうち4年間に延びたようです。進級や卒業は、他所の学校と組んで試験を課し、その結果によるものでした。試験に優秀な成績を取めると、賞を与えられ、学校も家族も大変名誉なことでありました。

幸いにも、節堂の指導は実に行き届いており、評判を聞きつけて次第に児童数は増え始めます。はじめは藤島の仮教場で男子生徒48人、女子生徒5人の53人でしたが、新たに当初の区域を拡大して、明治8年12月には同じ蜷城地区の林田村に移転。蜷城小学校と呼称し、美奈宜神社の社務所を校舎として選びました。このときすでに男子生徒113人、女子生徒17人で合計130人となり、校区も現在の蜷城小学校区と同等の範囲となりました。

その後、明治13年6月に県立甘

木中学校が設立され、まもなく節堂は同校で漢学を教えることとなります。ところが、県の財政が行き詰まり、勤務先の中学校が明治18年に廃校となってしまいます。

そのため、行き場を無くした生徒とともに郡立勉成学校に移って引き続き教えますが、さらにこの学校も学校令で廃校となり、今度は小田塾取水舎しゅすいしゃで教鞭を執るといふ具合に、節堂にしてみれば実に落ち着かない状態が続きました。

しかし、節堂は何事にも気さくな人で、時には出かけていって生徒の面倒を見たり、時には東京・京都・大阪等を歴遊したり、いたるところで気の合う人と見れば意気投合して派手に振る舞うなど、人を区別することなく接していたようです。また、日常的な問題から倫理的な生き方についてまで、相談を受ければ熱心に相手が納得

するまで、懇切に面倒を見ました。普段は、暇さえあれば詩を吟じたりしていたようで、詩文集も数巻著したようです。

明治21年（1888年）5月、節堂は、教師不足のため、再び県から林田尋常小学校の教師として要請を受け、渋ることなくここで9年間勤め、69歳で依願退職しました。

その後は、節堂に教えを請うものがいれば、だれにでも快く教えたことから、遠い近いの区別無く各地から多くの人が教えを受けにやって来ました。それこそ、まさに郷土教育界の素晴らしき先導者といえます。文部省は、こうした働きに対して特にその

労を賞し、記念に

字典や硯箱すずりばこを贈りました。

大正元年（1912年）、節堂は74歳で生涯を閉じました。節堂の死後、長男・松之助もまた父の志を継いで郷土教育の充実のため、さらなる努力を続けていきました。

このようにして私たちの地域にいくつも学校が生まれましたが、そこには井上節堂と同じように苦勞をいとわず学校を創立し、ひたすら明日を担う地域の子どもたちの教育にあたってきた数多くの優れた先人がいたことも、私たちは忘れてはならないと思います。



▲美奈宜神社近くに建つ長男・松之助の頌徳碑

近代日本哲学の父

井上哲次郎
(巽軒)

執筆者 川端 正夫



▲井上哲次郎 (27 歳ごろ)
 (『井上哲次郎自伝』より転載)

井上哲次郎(号は巽軒)は、安政2年(1855年)に太宰府の医者・船越俊英(後に甘木の富田家を継ぐ)の三男に生まれ、朝倉市甘木で幼少期を過ごしました。日本人初代の哲学担当の東京帝国大学教授として東西(東洋・西洋)の哲学を研究し、多くの人材を育て、その著作で社会に大きな影響を与えた学者です。

「哲学」とは「人間、世界とは何か。美しいとは、良いとはどういうことか」などの問題を正面から考える学問です。

哲次郎の学問の基礎は太宰府で、また甘木で学んだ漢学(儒学)にあります。彼は天神様(菅原道真)の再来ともいふべき秀才で、西洋哲学・中国哲学・仏教学・国学と、その学問の幅が広く深いこと、また漢詩・新体詩(近代詩)など文学表現にも才能を発揮したことなど、近代日本の草創期に聳える巨人的な学者文化人でした。

哲次郎が活躍した明治時代から昭和初期は、近代日本国家が欧米列強に伍して確立していく時代でした。彼が自分の哲学の実践のために唱導した「国民道徳論」に見られる強烈な「天皇制国家主義」「日本民族主義」は、戦後日本の思想界で強く批判されましたが、今日改めて評価すべき人物であると思われれます。

漢学修業

哲次郎の勉学は、太宰府で6歳のころ父から教わった習字・読書、そして中村徳山先生から習った「大学」「中庸」「論語」「孟子」(四書)の素読に始まりました。

哲次郎は家庭の事情で9歳から13歳までの4年間を甘木町で過ごすこととなります。幕末の甘木町には、日田の広瀬淡窓が開いた私塾「咸宜園」で学んだ佐野東庵の子息である佐野文洞がいて、高原町で医業を営みながら私塾

「梅西舎」を開いていました。哲次郎は佐野文洞から「詩経」「書経」「左伝」などの経書（儒教の根本テキスト）を学びました。

哲次郎の哲学研究の「志」は、太宰府と甘木での「論語」をはじめとする漢学（儒教）学習に発したもので、これが後に西洋・インド・中国・日本など世界の哲学を研究する基礎となったのです。

英語を学ぶ

時は明治維新です。哲次郎は、福岡で英語の勉強を始め、明治4年（17歳）から3年間は長崎の「廣運館」で本格的に勉強し、明治8年（1875年）に、成績優秀で「東京開成学校」に送られました。「秋月の乱」前夜のころです。

「東京開成学校」は明治維新政府が西洋人教師を雇って東京神田に設立した「大学南校」を引き継ぐ西洋学学校で、後の東京帝国大学の前身です。全国から優秀な学

生を集めて勉強させ、ヨーロッパへ留学させて、近代日本の建設を急ごうという明治国家の方針によるものです。寮生活をしながら懸命に勉学に励んだ哲次郎は2年間で予科を卒業し、明治10年（1877年）9月、創立されたばかりの東京大学文科に第一期生として入学します。23歳の秋でした。

明治13年（1880年）に卒業するまでの3年間、哲次郎は寮生活をしなが身につけた英語・漢語を駆使して東西の哲学・文学・政治・経済などを本格的に学びます。

哲次郎に大きな影響を与えたのは、後に日本のみならず東洋美術評価の原動力・功労者になった、当時20代半ばのアメリカ人学者で哲学担当のアーネスト・フェノロサをはじめ、シェイクスピアを教えた英文学のホートン、漢学の中村正直、国学の横山由清、仏教学の原坦山などでした。

『新体詩抄』と『哲学字彙』 『孝女白菊詩』

在学中に福岡の医学者・井上鉄英の養子となった哲次郎は、卒業後、文部省に勤務し、結婚して家庭を持ちます。明治15年には東京大学助教として「東洋哲学史」の研究・執筆・講義をしながら、文芸の創作、哲学の研究に専念。日本初の哲学用語辞典『哲学字彙』を刊行し、西洋の哲学用語と日本語を対照させ、まだ基本的な哲学用語が十分に整っていなかった日本語の整備を行います。

自然・経験物の背後の世界についての議論を指す「メタフィジックス」（英語:metaphysics）を「形而上学」と表現するなど、西洋語に対応させて「意識」「人格」「絶対」「美学」「倫理学」などの日本語の訳語を作りました。この『哲学字彙』は2回改訂増補され、当時の学生に活用されました。

明治15年（1882年）、同僚の外山正一・矢田部良吉らと英語の詩を明治の大和言葉に訳して出版した『新体詩抄』は日本の近代詩の先駆けになりました。また、卒業後直ぐに留学できなかった憤まんの中で作った漢詩『孝女白菊詩』は落合直文によって柔らかな大和言葉に訳され『孝女白菊の歌』として大評判となり、ドイツ語、英語にも翻訳されました。

この詩は、西南戦争のときに行方知れずになった父を慕う娘の悲嘆を表現した漢詩（フィクション）で、冒頭「阿蘇山下荒村晚、夕陽欲沈鳥争返、無辺落木如雨繁、隔水何処鐘音遠……」とあるのを落合が「阿蘇の山里秋ふけて、眺めさびしき夕まぐれ、いずこの寺の鐘ならむ、諸行無常と告げわたる……」と訳し、親しみやすい「新体詩」として当時の人々の涙を誘い、阿蘇には記念碑ができるなど国民的な評判を博しました。

官命によるドイツ留学、 ベルリン大学附属東洋語 学校講師

明治17年（1884年）2月、哲次郎は、かねて念願であった哲学研究のためのドイツ留学を命じられます。30歳の春でした（5歳年下の森鷗外が陸軍からドイツ留学を命じられたのも同じ年で、文学好きの兩人はドイツで一緒に観劇したこともありました）。

哲次郎のドイツ留学は、6年10カ月にわたりました。ベルリン大学が主な在籍地でしたが、ハイデルベルク、ライプチヒ、ハレ、イエナ、フランクフルトなどドイツの各地の大学の教授の著書を読み、講義を聴き、自宅を訪ねて議論しています。

明治19年にはパリのコレージュ・ド・フランス（フランスの最高学府）のテーヌ（哲学・歴史学）やルナン（宗教史）を、同21年夏に

はイギリスに渡ってハーバート・スペンサー（社会学者）やマックス・ミュラー（東洋学）など、著書に親しんだ学者たちを訪問しました。最も親しく師事したのは、ハイデルベルクのカント研究で名高い哲学史家クルノー・フィッシャー、ベルリン大学の古代哲学史家ツェラーでした。

留学後半の約3年間はベルリン大学附属東洋語学校で中国人やインド人の教師とともに教鞭を執り、日本語のみならず、日本について、また東洋哲学についての講義を行い、東洋思想を西洋で再確認するとともに、多くの西洋人日本学者・東洋学者を育てました。

東京帝国大学哲学教授、 晩年の日本儒教研究

明治23年（1890年）10月に帰国した哲次郎は、東京帝国大学の哲学の教授を命ぜられ、大正12年（1923年）3月に68歳で退

職するまで33年の間、大学での研究と教育に務めました。明治30年（1897年）にはパリで開催された万国東洋学会に派遣され、帰国後、43歳で東京帝国大学文科大の学長に就任して東洋系の哲学研究の体制強化を図るなど、大正・昭和にかけて国の文化・教育行政の中核にありました。

晩年に至るまで、「陽明学」「古学」「朱子学」など日本の近世儒教哲学諸派の研究に心血を注ぐなど、幅広い視野の下での重要な研究を続けつつも、「キリスト教」対「天皇帝国家（国体）」など、様々な論争にも国民道徳の立場から活発に発言し、賛同と同時に多くの批判・誤解も受けました。大正14年（1925年）、『我が国体と国民道徳』を著した中に天皇への「不敬」（無礼）があるとして非難攻撃され、公職を辞して謹慎せざるを得なかったり、晩年に暴漢に襲われ右目を傷つけられたりした

こともありましたが、何があっても挫けず、快活に、喜んで哲学の研究・教育・普及に精進しました。哲次郎は、昭和19年（1944年）12月7日、太平洋戦争末期の米軍空襲下の自宅（文京区小石川表町）で亡くなりました。90歳でした。自宅は空襲で蔵書とともに焼けましたが、書庫だった土蔵2棟が残り、現在東京都の史跡として「井上児童公園」内に保存されています。墓は東京都豊島区雑司が谷にあります。



▲文京区小石川の書庫（昭和15年ごろ）
（『井上哲次郎自伝』より転載）

『あさくら物語』を著した

古賀益城

執筆者
松本 憲明

▲古賀益城（写真提供：古賀脩氏）

郷土朝倉の歴史を調べるとき、無くてはならない名著があります。『あさくら物語』『あさくら物語別冊』『朝倉風土記』の3冊です（合計約1700ページ）。今回は、その著者古賀益城の生き方と学問について紹介します。

生い立ち

益城の名はペンネームで、明治20年12月26日、福岡県竹野郡船越村（現在の久留米市田主丸町）で、村山左衛太の第7子として生まれ、村山増吉と名づけられました（この年、初めて東京に電気燈が点りました）。間もなく大分県玖珠郡万年村に移住、幼年期をこの地で過ごし、再び船越村に戻ります。成長して浮羽郡教員養成所に学び、同郡千歳小学校教員（訓導）として初めて教壇に立ちました。ここに2年勤務し、青雲の思いやみ難

く、福岡師範学校（福岡市）に進み、明治41年3月、同校を卒業しました（この年、朝倉軌道二日市、甘木間が開通しました）。

青年教師の理想

福岡師範学校卒業後の赴任校は嘉穂郡穂波小学校でした。この炭鉱地帯の小学校では、教え子たちに「自ら進みて自分の機会をとらえよ」と諭し、児童一人ひとりの自発性を高める教育を目指しました。このころの授業の様子を「あれは愛の教育だった」と教え子たちは述懐しています。次に赴任した小倉師範付属小学校では、個性尊重の教育と綴り方教育の革新を目標としました。この2校での実績は明治40年代のすぐれた教育方法として教育史上高い評価を受けています。

明治45年5月、朝倉郡宮野村



鳥集院（現在の朝倉市鳥集院）の

旧家古賀家の婿養子となり、評判の良い女教師古賀フミと結婚して、同家を継ぐことになりました。

チームワークの成果

大正6年、30歳の若さで中牟田小学校校長に任命されました。このころから「益城」の筆名を用い始めました。その後、抜てきされ迎えられた大牟田市第二小学校で、体験主義による大牟田独自の教育を試み、昭和2年、朝倉郡に戻って三輪小学校と次の三奈木小学校で郷土教育を提唱、校長が教師たちとともに調査研究を行うことで

大きな成果を上げています。

両校の郷土教育では、歴史は伝説や由来よりも文献や遺跡を重視し、地理や産業は実態調査を重点としました。また、朝倉郡内の教員同好者とともに朝倉郷土研究会を結成して、研究機関紙『朝倉』を9集まで発行しました。このような郷土調査の経験が、後に益城を郷土史研究に向かわせたと思われれます。

40代は最も教育研究意欲の旺盛な時期でした。『教育聖典と語録』『教育淵源録』『日進朗誦集』等著作が相次いで発行され、特に『教育聖典と語録』は好評で発行部数も多く、戦前教師の座右の書となりました。益城は太平洋戦争が始まった翌年、昭和17年に退職しました。教育に従事すること34年、後日家族に「校長に早くなりすぎたよ。もっと子どもたちと遊びた

かった」と、洩らしたそうです（この年4月に、米軍機が本土を初空襲しました）。

苦しかった戦中戦後

退職後の悠々自適はだれもが望むところですが、時代はそれを許しませんでした。益城も戦時国策団体の仕事をいくつも委嘱され、働きづめの生活を送りました。

戦後しばらくは、自営農業の傍ら、学童雑誌の取次ぎや生命保険代理人も経験、不得手な仕事ながらも家計を支えました。戦後の社会が落ち着き始めた昭和21年1月8日、自宅では養母キヨが81歳の生涯を終え、同日、浮羽郡の入院先では長男稔が33歳で亡くなりました。益城は「百年に一度の悲しみ」と嘆きました。稔は、京都大学卒業後東宝映画に入社、主に成瀬巳喜男監督に付き、助監督を務

めました。将来を期待されながら、中国での兵役で病に罹り帰郷、療養中でした。益城は、悲しみを秘めて黙々と農作業に従事しました。

新生公民館に尽力

終戦の翌年、昭和21年7月、民主主義の普及推進のため、文部省は全国の町村に公民館の設置を要請しました。益城が住む宮野村では、翌年7月、他町村に先駆けて「公民館設置要項草案」を作成、早々に公民館設立準備委員会を開催し、公民館の創設を決定しています。この草案は、村長の委嘱を受け、主に益城が起草しました。その後、村長（公民館長）を助け、益城は副館長として公民館報「ひろにわ」を創刊し、本館・分館の活動を育成、教育文化事業の普及に努めました。特に、館報の記事は大半を益城が執筆し、シベリヤ

抑留のため、宮野村最後の帰還兵となつた青年には、懇切な慰労の記事を掲載するなど、益城らしい真情が溢れていました。その後、村議会議長になり、また公民館長も兼任しました。

『あさくら物語』等完成

公民館の運営が軌道に乗つた昭和26年、64歳になつた益城は生涯の大事業に取りかかりました。

江戸時代朝倉地方115村の郷土誌を総合した「朝倉風土記」、郷土朝倉2000年の歴史を詳細にまとめた「あさくら物語」、郷土研究の骨格となる「朝倉郷土史年表」等、郷土誌3部作の執筆を開始、地方新聞『朝倉タイムス』（甘木）に連載すること13年に及びました。

昭和38年、地元文化人緒方無元おがたむげんの好意によって、『あさくら物語』

と「朝倉郷土史年表」に文献解説等を収録した『あさくら物語別冊』を刊行しました。続いて翌年、『朝倉風土記』が朝倉郡公民館連合会の協力で刊行の運びとなり、ここに郷土誌3部作は完成を見ました。

人柄、そして研究

小柄なお姿でした。教師時代は制服制帽を厳格に着用しましたが、退職後はご隠居さん風で飾らず、温厚篤実な人柄はだれからも慕われました。

少年のころから、好奇心旺盛で、多くの書物に親しみました。文学を好み、宮崎湖処子みやまきこの詩文も愛読、また、剣道も励みました。

若い教師時代の研究目標は、教育指導法であつたようです。やがて、関心は文学や郷土史にも広がり、新聞や図書雑誌の購読も並外れていました。益城の研究

スタイルを逸話から拾えば、資料（図書・雑誌・新聞・学校資料）の収集↓精読↓要約・切抜き↓分類↓執筆↓製本となります。帰宅するとすぐ書齋にこもり、夕食が終るとまた書齋に戻りました。ここには幼児の絵雑誌『コドモノクニ』が並び、郷土玩具も飾られていたとのこと、お伽とぎの国の雰囲気も漂っていたとは、幼き者への慈愛の深さでしょうか。

朝倉の地を去る

昭和43年8月、益城夫妻は住み慣れた烏集院を去り、鳥栖市曾根崎へ転居することになりました。

当時の朝倉町長は、「町の宝として永住して欲しい」と懇願こんがんしましたが、「教員として、老いては子に従えと教

えてきましたので」と語り、永年の感謝と町への愛着の思いを述べたそうです。

ただ、鳥栖市は益城の父祖の地ですから、三男脩しゅうは、父君の心情を酌しやくんで、住居を定められたものと思われます。

曾根崎でも、相変わらず読書と書き物を続ける日常でしたが、脳のうの溢血いっけつがもとで昭和51年1月27日死亡、89歳を一期の清廉な人生でした。振り返れば、教育・歴史・文芸など新聞雑誌に寄稿した数、120編（840回）、まさに、読み書き学ぶの成果が光ります。



▲『朝倉風土記』、『あさくら物語』、『あさくら物語 別冊』

『大西郷全傳』の著者

さいが ひろよし
雑賀博愛

執筆者

松本 憲明

生い立ち

雑賀博愛は、明治23年(1890年)8月19日、父・雑賀義敬よしたか、母・

千代の長男として、福岡県御井郡小郡村(現在の小郡市)の巡查駐在所で生まれました。雑賀家は福岡藩の武士で、禄高は150石。しかし、幕藩体制の崩壊で武士になれなかった義敬は、明治9年、小学校二等授業生(代用教員)となり、同12年には四等巡查になります。そして朝倉郡宮野村(現在の朝倉市)の駐在所に勤務してい

た明治33年、村民の熱望に応え巡查を退職し、宮野村村長に就任しました。

博愛は明治29年に宮野尋常小学校へ入学し、同33年に比良松高等小学校へ進学。しかし明治35年、父・義敬が村長を退任し、福岡市へ転居しました。これに従い、博愛も福



▲雑賀博愛 (写真提供：雑賀明良夫氏)

岡高等小学校に編入学し、明治37年3月、同校を卒業しました。

福本日南との出会い

父・義敬と継母のハツ(生母・千代は明治25年に病没)は年金生活となり、博愛は姉と弟妹の行末を一身に担う立場になりました。

職探しに奔走していた明治38年のある日、耳寄りな噂が聞こえてきました。「東京の新聞『日本』に批判の政治評論を書いた福本日南

が、九州日報の社長に座った」とのこと。日南も福岡藩士の子孫で、学識と人格は福岡の誇りとの評判を知り、博愛は決意して九州日報の門を叩きました。

一途な面持ちで信念を語る少年を微笑ましく思った日南は「よし、私の側で頑張ってみなさい」と見習い入社を許しました。日南は博愛の気骨を愛し厳格に指導し、明治42年には社員に登用、編集局員に任じ、記事も書かせました。日南は同年12月、経営上の対立から九州日報を退社し、博愛ら10数名も、同盟して退社しました。明治43年6月、東京に去った日南の後を追って、博愛も上京を果たしました。

政教社へ入社

日南は博愛を世に出したいと萬朝報、毎日電報、大阪朝日等の大新聞に入社の労をとります。しかし日南の出す条件が「安売りはし

ない」であったので、なかなか就職できません。大正5年、日南の推薦でようやく政教社入社が決まり、雑誌『日本及び日本人』の記者になりました。

大正7年、越後十日町（現在の新潟県十日町市）出身の根津久子と結婚し穏やかな日々が続きましたが、同10年9月、日南が逝去。博愛は悲嘆にくれながらも、恩師・日南の一面であった史論家の道を進もうと決意しました。

大正12年9月、関東大震災が発生し、政教社の社屋も焼失します。雑誌『日本及び日本人』は休刊し、再建が図られました。大正13年1月に再発足し、誌名は『月刊日本及び日本人』に変わり、博愛の立場も重くなりました。

西郷隆盛の研究

博愛が九州日報に勤務していたころ、社長室へ自由に出入りする男がいました。政治結社・玄洋社

の頭山満とうやまみつるです。頭山は西郷隆盛の信奉者で、折に触れ博愛に、西郷逸話を語ってくれました。日南もまた、明治維新前後の歴史研究（維新史）を奨めていました。

大震災後の大正14年、博愛は『大西郷遺訓（頭山立雲講評）雑賀博愛筆記』を出版し、頭山の恩顧に報いました。また、日南に誓った維新史の研究は、西郷隆盛の伝記を完成することで果たせると考え、大正7年に着手し、昭和12年まで20年の歳月をかけて『大西郷全傳』六巻にまとめ上げました（五巻までの総頁数は2858頁。六巻は東京大空襲で原稿が焼失）。

母恋し、展墓てんぼの歌(注)

昭和7年2月、父・義敬が重病との報を受け、急ぎ帰郷した博愛に、義敬は「生みの親・千代の墓は、立石村（現在の朝倉市）の堤にある」と告げました。生母といえ、類摺りの記憶だけでした。同年3

月、満州・朝鮮を旅し、釜山から親友の吉岡重實しげざねを同伴した博愛は、立石村堤に千代の墓を探しましたが、見つかりません。「尋ね来し御墓はなくて夕風のさびしき丘を我が下りゆく」

昭和8年1月、父・義敬が逝去しました。翌年1月、再度、吉岡の助けを受け、ようやく立石村の堤が丘に生母の墓を発見しました。「目の当り母に相見し心地して悲し御墓の石抱きけり」。生母への追慕の思いは、歌集『慕親帖』に収められています。

死後慕われる人

佐賀市龍泰寺の佐々木雄堂住職は、西郷隆盛に心酔し、自坊に「西郷塾」を開いて、青少年の指導に当たりました。住職は博愛とも懇意で、夏と冬の一夜、博愛を招いて特別講座を開きました。

昭和13年冬の講座で、博愛は西郷の言葉を引用し「偉い人とは大

臣大将の地位ではない。財産の有無でもない。立身出世でもない。後ろから拜まれる人、死後慕われる人」と話しました。末席で聴講していた佐賀県警察部長・島田劔あきらは、散会后、住職と博愛にあいさつし「官吏として反省するばかりです。真の自己完成に励みます」と語りました。

このことは、島田のその後の生き方に大きな影響を及ぼしました。昭和20年1月、当時大阪府内務部長であった島田は、沖縄県知事就任の打診を受けその場で受諾します。

米軍上陸直前の沖縄県に着任した島田は、まず幼い子どもや女性を緊急避難させ、食糧確保のため台湾から米を運び込み、島の南部に住民を避難誘導の途中、殉職したといえます。昭和26年6月、沖縄全県民は、島田を始め戦没県職員を合祀する「島守の塔」を摩文まぶ仁の丘に立て、哀悼の祈りを捧げ

ました。

若者に希望を託す

政教社は国粹主義を掲げていました。過度な欧化主義をいさめ、日本が培ってきた伝統や美德を重んずる思想です。軍国主義が台頭すると政教社も変容し、時局に迎合しました。博愛は苦悩の末、昭和10年7月に退社します。

その後、維新史や短歌の作法を講義してきた「金鶏学院」や「日本農士学校」に学ぶ若者との交流を密にします。金鶏学院からは若き官吏が、日本農士学校からは、農村の青年指導者が巣立っていきましました。農士学校卒業生を送る、と題した一首。「学び舎を今日立ち出づる若き子が衣の裾に春の風吹く」

中野正剛を悼む

博愛は51歳で肺浸潤を患いました。小康を維持しながら農村を巡

り教え子と語らい、講演をこなし、その間『勤皇志士叢書』四編を著しました。

昭和18年10月下旬、博愛のもとに、政教社の旧友で国会議員の中野正剛が、自宅で割腹自殺を遂げ、机上に『大西郷全傳』第二巻が開かれていたという、極秘の知らせがありました。中野の自殺は、独裁色を強め戦争を推進する東條内閣に反発したため、窮地に立ったものといわれています。「死を前にして、友人は私の書のどこを読み、心を静めてくれたのだろうか。哀惜の涙は止めどなく、博愛の頬をつたいました。

終戦前後の暮らし

ミッドウェー海戦以降、日本軍の戦況は悪化し物資の欠乏は国民生活を直撃しました。東京暮らしの厳しさを察知した農士学校の教え子たちは、博愛に米、卵、炭等を密かに送ってくれました。「み

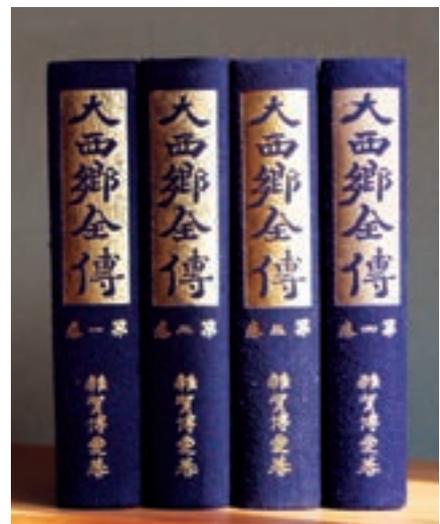
ちのくの雪の中より送りし鶏のま卵うづの白玉」

昭和19年8月、五女・清香が学童疎開。同年9月、博愛は体調が悪化し、残りの家族を連れて長野県北佐久郡中津村（現在の長野県佐

久市）に疎開しました。小泉貞一から友人たちの支援を受け、終戦を迎えます。この間、長女・沼香と二女・若葉が結婚し、親の役目を果たしました。昭和20年12月、博愛と家族は信州の人々に見送られ、帰京しました。追って長男・千尋も復員し、家族（夫婦と二男六女）の無事に安堵した博愛でしたが、病状が進み昭和21年7月24日逝去。56歳の惜しまれる生涯でした。

博愛の著作と信念

博愛は健筆家で、膨大な量の著作があります。本稿で紹介した作



▲博愛が著した『大西郷全傳』

品以外の代表作として『大人格の偉観・西郷南洲翁』『大江天也傳記』『天下の人物』『風雲と人物』『雜賀鹿野歌集』等があります。

博愛の信念は、『大西郷全傳』第一巻の序に述べられています。「大西郷の一生は、誠の一字に帰する。（中略）人は誠にあらざれば動かず、誠は、偽らざる人間至情の発露に外ならぬ」。この言葉のように、博愛もまた「誠」の人でありました。

（注）展慕…墓参りのこと

※本稿に収録した短歌はすべて、雜賀博愛の作品。鹿野は博愛の筆名。

朝倉考古学の先駆者

坂本真鈴

執筆者

松本 憲明



▲考古学者・坂本真鈴（写真提供：坂本澄生氏）

朝倉地方に人が住み始めたのは大昔のこと？ 米作りやクニの誕生はいつのこと？ 大きな前方後円墳はなぜできたの？

だれもが抱く素朴な疑問を解明したいと、朝倉の各地を巡り遺物を収集し調査研究を行った考古学者、坂本真鈴を紹介します。

真鈴は明治23年（1890年）12月4日、熊本県玉名郡賢木村上長田に、宮司・坂本厳雄の次男として生まれました。日露開戦の翌年、熊本県立玉名中学校に入学し、日韓併合が行われた明治43年に卒業しました。

宮司家の優秀な若者は郷土の期待を受け、伊勢の神宮皇學館本科に進みました。少年時代から古代への探究心に燃え、暇を見ては郷土の野山を巡って、遺跡や遺物を発見したと語り伝えられています。

福岡県立朝倉中学校へ

神宮皇學館卒業後、熊本県で私立鎮西中学校を振り出しに県立玉名中学校、県立天草高等女学校で教鞭をとり、大正12年（1923年）3月、福岡県に移り県立三池中学校の教諭になりました。この年、真鈴は考古学雑誌に「天草の板碑」と「肥後国西北部の古墳」の二論文を発表、精緻な古墳の実測図は高い評価を受けました。当時、九州から考古学雑誌に寄稿する研究者はまれで、のちには九州考古学の草分けと呼ばれています。大正13年5月、県立朝倉中学校へ赴任し、国語、漢文を担当しました。この異動は、真鈴の希望も知れませんが、遺跡が多く歴史豊かな朝倉は、考古学を志す者にとって、魅力的な風土でした。

中山平次郎博士に師事

大正14年（1925年）1月、2月、福田村栗山で、弥生時代の甕棺から貝輪（装身具）と鉄戈（武器）が偶然発見されました。

栗山の遺跡遺物を調査した九州大学医学部の中山平次郎博士が報告会を開催しますが、このとき真鈴は中山博士のお供をしています。すでに、考古学を通して師弟関係にあったと考えられます。真鈴は博士の指導を受け、原始社会の解明という高い目標を掲げて、考古学の研究にいそしみました。

盛んに遺跡遺物を発見

真鈴と家族は、甘木町内将校町（現在の琴平町の一部）に居住しました。朝倉軌道など交通の便も良いことから、休日には家族を伴って野外調査に出かけました。こうして朝倉・三井両郡で多数の遺跡



▲柿原高住神社古墳（豊前坊）の野外調査
（写真提供：坂本澄生氏）

を発見しました。収集遺物には石器や土器のほか、青銅や鉄製の武器など貴重な物もありました。また、この地域で未発見であった縄文土器は、宮野村八並遺跡で、真鈴の次男の惟義が破片を拾い、朝倉の歴史は縄文時代までさかのぼることが分かりました。

弥生の王墓に迫る

遺跡の分布調査を終えた真鈴は、朝倉の原始社会を次のように考えました。

「この地域は宝満川・小石原川・佐田川・桂川などの河川で区切れ、交互に台地や平野があるので、始めのころ人々は分散し小集団で暮らしていた。

米作りが盛んになるにつれムラができた。鉄戈と貝輪出土の福田村栗山遺跡、鉄戈と内行花文鏡出土の夜須村峯遺跡、銅矛と丹塗り磨研の土器が出た三輪村栗田遺跡が物語るのは、権力者の出現である。遺物を内蔵した甕棺の形式からクニの起源は弥生時代の中ごろだ。そして、頂点に立つ王の墓がきつとどこかにある」

真鈴はやがて、王墓と思われる三輪村大塚遺跡にたどり着きます。この遺跡は、鏡など多数の遺物を出土した春日村・須玖岡本遺跡（奴國王墓）に外部構造がよく似ており、大発見だと確信しました。真鈴は発掘調査を決意し、地主を説得しますが同意を得られず、朝

倉の王墓は、幻と消えました。

茶臼塚（前方後円墳）の調査

福田村小田に、前方後円墳の茶臼塚があることは知られていました。昭和3年（1928年）4月19日、道路工事のため後円部南方を大きく削除され、急報で真鈴が到着したとき、すでに石室の前半分が破壊されていました。

工事に追われながら遺物の発見に全力を注ぎ、兜と短甲（鎧）一領を収集しました。4月21日まで調査を続行し、玉類・管玉・鉄鏃・鉄鉾などが出土しています。また、村民が収集した後日寄贈された遺物に、四環鈴などの馬具や、赤色顔料をすり潰した勾玉型の石製杵があります。この古墳は、昭和54年（1979年）9月、「小田茶臼塚古墳」として国の史跡に指定されました。

家形埴輪の研究

昭和6年(1931年)7月、志波村宝満宮境内の丘が、長雨のため部分崩壊し石棺が露出したため、鏡・直刀・家形埴輪(破片)などが発見されました。役場からの依頼で、福岡県が調査員を派遣しています。



▲小田茶臼塚古墳から出土した短甲(左)と兜(甘木歴史資料館蔵)

した。埴輪の破片は二軒分以上あり、家屋の形式は切り妻造りと四注造りです。仔細に観察すると、切り妻の屋根に網代(編物の覆い)模様があり、古代建築様式を研究する上で重要な発見となりました。

割れた内行花文鏡

昭和8年(1933年)1月、

朝倉村山田後山で地ならし作業中に箱式石棺四基が現れ、真鈴は遺跡に駆けつけました。調査の結果、二基の石棺からそれぞれ鏡1枚を発見しています。

1枚は破鏡でしたが、中国の後漢で製造された内行花文鏡、もう1枚は日本国内製の内行花文鏡でした。「弥生時代の中ごろ、倭国王は後漢に使いを送っている。破片の内行花文鏡は、そのとき後漢の王から贈

られた物かもしれない」。古代鏡の破片から、壮大な歴史ロマンが、真鈴の脳裏を駆け巡りました。

朝倉郷土研究会と真鈴

小学校校長だった古賀益城たちは、郷土教育を提唱し、調査研究を進めるため、昭和8年に「朝倉郷土研究会」を発足させました。

同研究会の会報『朝倉』には、郷土に関する伝説・民俗・地理・歴史・理科の研究成果が収録されています。

編集責任者となった真鈴は「朝倉考古学講座」を連載執筆し、地域考古学の普及に努めました。

「朝倉郡誌・考古編」刊行できず

昭和15年(1940年)、朝倉郡教育会は朝倉郷土研究会の成果を基礎に、『朝倉郡誌』の刊行を決定しました。地理編から郷土年

表まで13冊に及ぶ画期的構想でしたが、太平洋戦争で刊行できずに終わりました。

真鈴は考古編を担当し、原稿を提出していただけない悔やまれました。稿本として残った郡誌考古編は『朝倉郡考古概説』と呼ばれるほど完成度が高く、戦後の調査研究に大きく寄与しました。

考古学者をつらぬく

真鈴は昭和15年に県立戸畑高等女学校へ転任し、同18年には福岡柳河盲学校長となりますが、同21年に退職し熊本県南関町に帰郷しました。昭和34年から39年まで町の教育委員長を務め、真鈴の指導のもと、町内史跡の実態調査が実施されました。真鈴は昭和41年(1966年)7月、75歳で病没しました。南関町史には「静かな情熱を秘め、積極的に行動した考古学者」と紹介されています。

歴史編纂の先駆者〈記録を次世代へ〉

緒方

傳

執筆者

後藤 正明



▲郷土史家・緒方傳
 (緒方傳 (大津屋) 文書、甘木歴史資料館 蔵)

「記録なくして歴史なし」といわれますが、朝倉地方の歴史は、記録されてきたものであり伝えられてきたものです。今までに、朝倉地方の歴史を記録し続けた人々のなかの1人で、自ら郷土史家と称した緒方傳を紹介します。

祖父の教え、
そして教師の道へ

傳は明治28年(1895年)8月1日、福岡県朝倉郡甘木水町に父・緒方利三郎(惟政)、母・ツヨ(元秋月藩郷士・大倉種教の二女)の二男として、兄・友次郎、姉・クラ、サエに続く緒方家の末子として生まれました。

緒方家は大分県緒方町の出身で、父の連帯保証のため資産没収となり没落し、甘木水町(昔は水祭町という)に移ってきたと伝えられています。父・利三郎は、甘木で商人として再出発しました。

傳は地元の甘木尋常高等小学校

を卒業後、上級学校には行けない境遇でしたが、母の実家・大倉家(上秋月)の援助、そして大倉孫六郎(種教)の教えで福岡師範学校第一部(福岡教育大学)に入学し教師を目指しました。母・ツヨの父・種教は、測量家・種周の子で、西洋軍学で藩に仕え、郷土の歴史記録を多数残しています。また、ツヨの甥・高島野十郎は、画家として世に出ています。

当時の傳の心境は、師範学校「大正7年3月・第36回生、卒業満拾五周年記念アルバム」に寄稿した傳のメッセージから読み取ることができます。「私の念願は教育に関する、ある研究の著作でありません。読んで呉れる人があってもなくても、このことだけは果たして教育界を去りたいと思います」

師範学校在学時代の傳は、緒方秋月(傳の当時のペンネーム、後に実家の町名にちなみ水祭子と号す)を名乗り、趣味は短歌と

園芸で、絵を描くことを得意としていました。

朝倉郷土研究への芽生え

傳は幼少のころから旧記に親しみ、古きを訪ねる郷土の歴史に興味をもつようになったといえます。

傳は最初の赴任地・馬田小学校を振り出しに、甘木小学校で教頭を務め、福田、蟻城、金川の各小学校で校長を務めるなど、小学校で約30年間勤務しました。傳の教え子の白水幸子（母・リクが大津屋 石田勘四郎の二女。白水森吉の六女）は、叔母が傳の妻・チカ（リクの末妹）であったこともあり「とにかくまじめな先生で、よく覚えていますが」と語っています。

傳は敗戦の2年後、蟻城小学校を最後に退職します。第二次世界大戦中、教え子を少年飛行隊へ送り込み申し訳ないことをしたと心を痛め、小学校を早期退職したの

だと、傳の孫・石田勝世は、自分の母（勝世の母は、傳の長女・美代子）から聞いた話として語っています。

公民館で郷土史講座、図書室を開設

傳は甘木町長の薦めで昭和22年（28年ごろ）、甘木公民館主事として勤務しました。昭和24年6月からは社会教育普及の一助として、自ら郷土史講座（月に数回、講師は研究家、古老。テキストは甘木雑記、甘木根基、甘木記聞、甘木煙草種、安長寺縁起など貴重な文献を使用）を担当し、地域の人を大いに啓発しました。同時に傳は、館内に図書室も設けました。

また、若い世代に郷土の素晴らしさを理解してもらうことを願い、編纂員として『甘木風土記』や民俗史などの著作を残しました。

郷土色を保存した甘木商店街への提唱

甘木公民館報（「あまぎ」昭和28年12月号）に、郷土色を生かす商店街と題して「甘木の家屋敷は（略）折れ曲がった上に家並をもつ甘木街路の景観を悲観せず、むしろ之を工夫して九州随一の宿場町として郷土色を保存發揮することを強く提唱する」と寄稿しました。

朝倉郡文化財保護委員会の設置に尽力

昭和28年暮れ、郡町村会から郷土史編纂の囑託を受けて資料収集を始めました。その翌年、午年にちなんで郡内約100の神社の絵馬巡礼を行います。傳は郷土文化史上、貴重な絵馬が風雨にさらされ、いたずらで破損または紛失していることを発見し、各方面に呼びかけました。



▲緒方傳の資料と新聞切り抜きホルダー（緒方傳（大津屋）文書、甘木歴史資料館 蔵）

その結果、朝倉郡文化財保護委員会がつけられ「郷土の宝」を指定することが決まったのです。

安長寺豆太鼓の復元

傳は、甘木山安長寺の歴史を調べ、戦中に途絶えた寺の祭りの復興に尽くしました。祭りで販売されていた「ばたばた」で知られる稚児の豆太鼓を工夫しながら復元したのです。そして、太鼓には自分の孫・牧子（長男・良彦の長女）を描きました。

当時の傳をよく知る、元甘木市立図書館長の矢野毅は「甘木町の郷土史研究のほか、ばたばた豆太鼓の復元や、甘木焼（陶器）民芸の発展に貢献された」と語っています。さらに、同寺の住職・古泉同雲とともに、カンボク保存会を作りました。

市報甘木に執筆、 数万キロメートルに及ぶ調査

昭和32年1月から昭和41年5月まで、市報甘木に「郷土史跡めぐり」「ふるりの史話と伝説」を執筆しました。大平山の大岩山奇岩、黄金川と川茸、古処山の稚児峠、秋月荒平城、松岡家三代の治水、女淵、白鷺塚、甘木大内城跡、馬田原などを精力的に調査し丹念に連載しました。この間、傳は甘木市史編纂員を務めました。

傳は、昔語りの手記、古文書などの資料調査のため、寝食を忘れ風雨もいとわず、山川を越えて1

カ月に300キロメートル、延べ数万キロメートルを駆け回り、郷土の歴史を記録しました。また、新聞記事資料もともに、自宅を新聞資料館として開設し全国から届く郷土に関する質問にも答えました。

傳とその家族ら

傳は、妻・チカ（福岡女子師範学校卒で小学校教師、ピアノが得意）との間に、長女・美代子（母・チカの実家、石田勝三郎の養女。夫とともに家を継ぐ）、二女・美千子、長男・良彦と、子どもに恵まれますが、二女・美千子を2歳で亡くしています。

長男・良彦は、父・傳について、一つのことを始めるとそれに没頭し深く追求する性格だったと語っています。傳は写真撮影・現像に凝るほか、甘木付近の植物の研究にも没頭し、自宅の2階に温室を作りました。あるとき、

訪した植物学者・牧野富太郎博士を案内して野山を一緒に歩いたこともあったそうです。良彦が図書館情報学の道に進んだのは傳の勧めであったといえます。

ユニークな一面もありました。豊原妙（初代甘木歴史資料館長・豊原徳の三女）は、傳が「筑後川、桂川に鯨が泳いできましたか」と自分と姉に話をしてくれたことを懐かしく語っています。

傳は旧甘木市一木地区の調査の帰りに体調を崩しました。昭和41

年5月に妻・チカと長男・良彦のもとへ上京しますが、翌月の6月10日に72歳で亡くなりました。傳自身、甘木市史編纂を断念することになり、たいへん心残りだったと思います。傳の墓は平成18年に東京（八王子興慶寺）に移るまで、甘木の浄土寺納骨堂にありました。

傳の功績を後世へ

傳の郷土史研究はやがて学校教育の場へ伝えられます。甘木朝倉中教研の社会科部会は、歴史カリキュラムの中に郷土史をいかに位置づけるか研究を重ね、昭和43年度に資料集を完成させました。当時、福城中学校校長の豊原徳は、資料集の序文で、将来、生徒の教材として活用してもらいたいと記しています。その後、豊原は、妻・マサ子（白水幸子の姉）の関係から、甘木市史編纂実務委員長を務め、傳の仕事を継承発展させました。



▲昭和6、7年ごろの緒方傳（左）と家族（甘木山領町の自宅で）〔福岡師範学校卒業15周年記念アルバムから〕（緒方傳（大津屋）文書、甘木歴史資料館蔵）

九州俳諧のリーダー 蕉門の俳人

篠崎 兎城

執筆者

平田利一

いさり火や すかせば更に
秋の雲 兎城

兎城は、元禄・享保年間（江戸時代の中ごろ）に活躍した俳人で、杷木上町出身です。

本名を篠崎新助といい博多の練酒屋に生まれ、その後杷木に移り住んでいます。18歳にして、談林派の中心人物、井原西鶴より俳諧の指導を受けた日田の「中村西国」の門に入り、「岩国」と称しました。西国が亡くなったあとは博多の

「風呂屋素閑」の弟子となり「閑夕」と号して元禄10年ごろの俳書に数多く入集しています。当時兎城には100名以上の門人がいたといわれています。

兎城の事跡の発見

日田市出身の大内初夫氏（当時大学教授・近世九州俳壇史の研究等多数の著書あり）は、兎城が俳書「野坡吟草」等によって蕉門十哲（芭蕉の俳風を受けつぐ代表的高弟）のひとり「志太野坡」と深

い関係にあり、享保14年（1729年）に「門鳴子」という俳書を撰集していることを知ります。

「門鳴子」から「惟然」「文章」「諷竹」等の蕉門高弟たちとの交流もうかがわれ、俳諧の世界で蕉風が九州にどう伝わり広がったかを知るうえで、兎城の伝記を明らかにしようと何度も杷木を訪ねられていました。

しかし杷木には兎城の名を知る人もなく、兎城に関する何物もなかったそうです。ところが偶然福岡市の大浜公民館長の三宅氏が兎城短冊を見つけ、杷木の公民館の井手滝次郎氏に知らせました。短冊には前記の「いさり火や」の句

が書かれており裏面に「俳人兎城本名篠崎新助 享保十五年正月元且没 年六九」と記されています。井手氏はこれによって篠崎家の墓地を調査し兎城の墓碑をみつ

け、杷木の長念寺の過去帳より家族のことも明らかになりました。

この兎城の墓の発見を契機に、兎城の門人であった朝倉長淵の「樗路」の書いた書物が見つかりました。「鉢袋」と呼ばれています。この書の中に兎城のことが書かれており、九州俳壇でめざましい活躍をした兎城の事跡は大内初夫氏の研究で明らかになったのです。およそ50年前のことで、大内氏は昭和33年に俳誌「冬野」に「九州の古俳人、篠崎兎城」を9回にわたって連載しています。

松尾芭蕉と蕉風の伝播

芭蕉は天和3年（1683年）、「虚栗」で新しく漢詩文をとり入れた句風を示し、独自の句境を開き、翌年郷里伊賀へ「野ざらし紀行」の旅をしました。この旅では芭蕉が確立されたといわれてい



ます。

その後次第に閑寂味と幽玄味を加え、元禄4年（1691年）、「猿蓑」でわび・さびの句境を完成させ、さらに新しい境地を拓くと軽みの俳諧を唱え、元禄7年、「炭俵」の平淡な句境を生み出しています。この年九州に旅する途中、病に倒れ門人に見守られながら大阪の宿舎で一生を終りました。俳人芭蕉の名は今では知らない人はいませんが、芭蕉生存当時の蕉門の勢力は1割程度だったといわれています。しかし芭蕉没後、蕉門の動きは活発化し全国各地に急速に伝播・流行し、俳壇地図の

大半を蕉風でぬりつぶしています。

福岡県内には芭蕉塚が71個、蕉門の人々の塚は25個存在します。

兎城の閑夕時代

芭蕉没後、芭蕉の遺志を達成しようとして、蕉門俳人たちが相次いで九州に來遊し蕉風を広げようとしてきます。元禄8年、鳥落人惟然（蕉門十哲の1人）が杷木の兎城のもとを訪れています。

聞きにし杷木の新助（兎城の本名）亭にて

霜かる、此山ぞひや
松の蔭 鳥落人

の句（門鳴子に収録）があり、このとき兎城も

白妙や 蕪菜は雪の
うもれ草 閑夕

と吟じています。

兎城は惟然を自宅に泊め俳諧を行っていますが、以後親しく接することはなかったようです。元禄

11年、各務支考（蕉門十哲）の筑紫旅行にも近付いていません。

このころ蕉風は徐々に広がっていましたが、兎城は蕉風になびかず談林派の俳人として門戸を構え門人の指導をしていました。

しかし、閑夕時代の彼の句は

畦豆の からつく風の
夜寒かな

などが九州蕉門の俳書に入集していて、元禄15年、近江の蕉門正秀酒堂撰の「白馬」に

行水に 尚も残暑の
薄ねばり

など4句が入集するなど、蕉門の人から高く評価されていたことがうかがわれます。

蕉門、「志太野坡」 との出会い

芭蕉七部集「炭俵」の撰者で知られる「志太野坡」（樗子・樗木舎の号）は元禄11年から10数回にわたり九州を行脚し、蕉門の裾野をひろげました。温厚な人柄で社交性にすぐれ、九州に門人1000名を超える一大勢力圏を築いています。

「野坡」が何度目かの來遊のとき、吉井で俳諧を行うとの話が兎城にとどきました。兎城は「野坡は芭蕉の門人と聞いているがどれほどの人物なのか、彼の発句はあまり目にかからない。だれか吉井に行つて器量を見て来い」と門人に命じました。長洲の樗路（當時、こん路、のち猪路）がその役目を受け持ち吉井の旅宿に「野坡」を訪ねます。対面後、樗路は句を

求められ即座に

蝶々や 松を出品の
朝あらし

かきまぜる 波一はなや
苗の道

の2句を書いて出すと、「野坡」
はこれを

蝶々や 松を出ばなの
朝あらし

かきまぜる 波一ゆりや
苗の道

と添削しました。

その夜半、樗路は急ぎ兎城や門
人の待つ杷木にもどり添削された
句を差し出し、ことの仔細を報告
しました。兎城はくりかえしその
句を詠み「これ誠に我が師なり」
と。翌日「野坡」は杷木の兎城亭

を訪れ師弟の盟約を交わし、閑夕
号であった兎城に「兎城」の号を
与え軒号を「藪の家」と名づけて
います。

その後、兎城は樗門（野坡の門
下生の呼び名）の代表的な俳人と
して活躍し九州各地に蕉風をひろ
げていきました。彼の句は数多く
俳書の中に入集されています。現
在まで発掘されている兎城の句は
86句にのぼっています。

人々に愛された兎城

兎城は享保14年（1729年）
12月29日、その生涯を終えました。
俳人仲間には元旦に死去と伝えら
れたそうです。

野坡の弔句

初雛は あくびのなみだ
此のなみだ

が寄せられています。

兎城門下生の長洲の

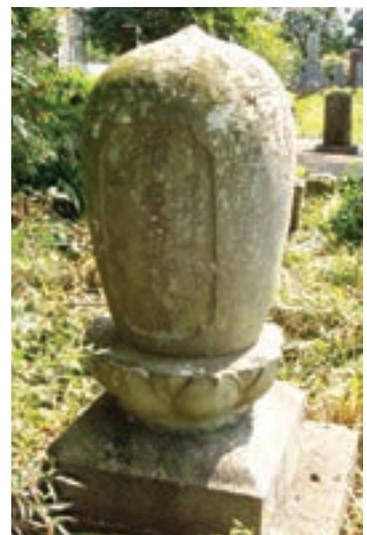
猪路も野坡から「樗路」
の号を受け樗門として
活躍しました。野坡
没後、自宅に「葬塚」
を建立し野坡と兎城の
霊を併せて祀っていま

す。塚はその後、長洲の墓地に移
動したそうですが現在は行方がわ
かりません。

同じ兎城門の後藤遊五（朝倉石
成の庄屋）は、兎城が生前撰集し
「遊五」に依頼していた遺稿本「門
鳴子」を京都で出版しています。



▲石成の鶯塚



▲兎城の墓

遊五は石成の清水ヶ岡に「鶯塚」
を建立して野坡を祀っています。

兎城の墓は門人たちによって現
在の杷木支所の前の墓地に建立さ
れました。墓の裏面に

かげろうに 初陽炎や
初笑ひ

の辞世の句が刻まれています。

兎城が多くの人々に尊敬され愛
されていたことが推察できます。

毎年旧暦の正月には杷木の俳句
会の皆さん（約30名）が墓前に参
り、兎城忌の句会を開き偲んでい
ます。

秋月藩の学問振興に尽くした

原古処

執筆者

三浦良一



▲原古処（秋月郷土館蔵）

江戸時代に幕府は文治政治を掲げて武士の学問を奨励しました。この時代の学問は、人間の生き方や道徳を教える儒学が中心でした。朱子学、古学などの学派に分かれて議論や研究が深まり、林羅山、山鹿素行、荻生徂徠などの儒学者が現れました。福岡では、貝原益軒と亀井南冥が有名ですが、秋月の儒学者に原古処がいます。

亀井南冥に入門

原古処。名は震平叔燁、郷土の名峰からとって「古処」と号しました。明和4年（1767年）、秋月藩士手塚甚兵衛辰詮の二男として生まれましたが、幼少より利発で勉学を好み将来を嘱望されていました。その優れた資質を請われて16歳のとき、原坦斎の養子となりました。原家は学問師範を家業とする家柄で、坦斎は藩校稽古館

の教授の職にありました。原家に入った古処は18歳のとき藩命によって福岡の儒学者亀井南冥の甘棠館に入門しますが、すぐに頭角を現して亀井門下四天王の1人と称賛されるようになりました。師南冥が門弟古処の優秀な学才を慈しんで教育した心境が、現存する南冥の書簡からも読み取れます。

藩校稽古館での教育

原古処が20歳になった天明6年（1786年）、養父の原坦斎が病気で稽古館教授を退役したとき、彼は福岡から呼び戻されて稽古館の訓導を命じられました。

秋月藩の稽古館は、藩士子弟の学問所として安永4年（1775年）に創立されましたが、天明4年（1784年）、高鍋藩秋月家から養子に入り8代藩主を襲封した黒田長舒のお国入りに合わせて

大改築が施され、広い講義室と剣・槍・弓などの武道場を備えた立派な学問所で田舎の小藩には過ぎたる学校との評判でした。長舒は御満悦で、実家高鍋藩の明倫堂や叔父（上杉鷹山）の米沢藩の興讓館に負けない学問所をめざして充実を図りました。京都から著名な学者小川晋齋を教授に迎えるとともに、亀井南冥を福岡から招聘して講義を聞かせるなどして、藩士の学問を奨励しました。藩主自らが稽古館に臨席して講義の様子を見分し、学生を激励することも度々でした。藩主の積極的な保護をうけて、稽古館は盛況になり入門生は150人を超えるようになりました。

原古処は、やがて訓導から助教へと昇任して、学生に講義したり質問に答えたりするようになりましたが、彼の指導は懇切丁寧であり

その理論は明快でした。単に教科書（漢籍）の観念的な教義の解説にとどまらず、実生活や政治・産業の啓発に役立つ実践的な教えであったのでたいへん好評でした。学生のみならず藩内一統の古処に対する信望は厚くなり、藩主長舒の信任は絶大になりました。

寛政8年（1796年）、小川晋齋が京都に帰った後は、古処が教授に抜擢されて稽古館教育の中心になりました。それから、稽古館はますます隆盛になり、彼の教えを受けた若者たちは、やがて藩の政治や経済を支えるようになっていきました。

私塾「古処山堂」を開設

原古処の名声が揚がるにつれて、彼の教えを希望する人が藩の外にも増えていきました。古処は、藩主の許しを得て、秋月城下の今小

路に屋敷地を拝領して私塾「古処山堂」を開きました。早速、たくさんの門弟が九州各地から遠くは中国地方からも入門してきて活況を呈しました。豊前行橋の村上仏山も門弟の1人です。文化4年（1807年）には、藩主長舒が2人の息子を連れて、古処の屋敷を訪問し古処山堂を見分しました。藩の重役でもない無足組平士の家を藩主が訪問することは前例にないこととて、古処にとっては非常な名誉であり、また長舒の寵愛の深さがよく分かります。長舒の死後、9代藩主となった長韶もまた、原古処を信頼して重用しました。古処の家格を馬廻組（蔵米100石支

給）に引き上げ、稽古館教授と兼帯で、藩主の側近にあつて諸事の世話や指南をする御納戸頭（おなんどがしら）の要職に登用されました。このことは皆が驚く破格の昇進でした。御納戸頭就任によって、古処は藩主の参勤交代のお供をして江戸に上る機会を得ますが、江戸在府中や参勤の道すがら多くの学者や文化人に出会い、友人知己と交遊することができました。このころが、原古処の生涯において最も充実した絶頂の時期であつたと考えられます。



▲古処山堂跡

「織部崩れ」の大事件

文化8年（1811年）、秋月藩において大事件が起こりました。

これは「織部崩れ」といわれている事件ですが、家老の宮崎織部・渡辺帯刀とその一味の重臣たちが、若い藩主長留を軽侮して藩政を専断し公金を私腹していたことが告発されて、家老や奉行などが罷免されました。この後、秋月の藩政は混乱し財政は危機的狀態に陥りました。稽古館は閉館となり古処は教授の職を解任されました。加えて、彼が宮崎織部と懇意であったことから、御納戸頭を罷免されて無役となりました。

この事件の後、秋月藩の政治に本家福岡藩が介入するようになり、稽古館は再開されますが福岡から派遣された学者に牛耳られて古処の出番はありませんでした。

漢詩と旅行を楽しむ

失望した原古処は、文化10年（1813年）、家督を長男瑛太郎に譲って隠居しました。47歳のとき

です。これからの古処は漢詩の世界に没入していきます。彼は、若いころから詩作が得意で、恩師亀井南冥も古処の詩人としての才能を高く評価していました。自由の身になってから彼の卓越した漢詩の才能は花開きました。古処の遺した日記や紀行文によると、恩師南冥の形見の「東西南北人」印を携えて、九州や中国地方の旅を楽しみとしました。各地の文人墨客を歴訪し、酒を酌み交わし漢詩を朗詠して

悠々の日々を過ごしています。豊後日田の広瀬淡窓や安芸広島の頼山陽とは特に親交が深く、相互に宛てた書簡が多く残っています。古処は巡遊の旅に娘の猷を同伴しています。猷はのちに蘭秀詩人と評判される原采蘋のことですが、古処は娘の豊かな詩才を見抜き将来の大成を期待していたのです。また、甘木町に「天城詩社」を開き近郷の文化人を招いて詩作や学問論議を楽しみました。しかし、悠々自適の暮らしも長くは続

かず、晩年は病気がちになり、文化10年（1827年）1月に病没、享年61歳でした。墓は秋月の西念寺にあります。墓石正面の字は頼山陽の書、側面には広瀬淡窓が贈った追悼の詩が刻まれています。

原古処はたくさんの漢詩を作りました。これらの作品は『古処山堂詩集』などにまとめられて秋月郷土館に保存されていますが、どの詩からも古処の豊かな学識と独自の歴史観や高邁な思想が汲みとれます。

登ル古処山

長 棧 回 梯 鎮 國 ノ 山
梅 霖 ト 霽 ヲ 此 ニ 開 ク レ 顔 チ
高 峰 吹 イ テ 笛 ヲ 嵐 光 変 リ
陰 洞 題 ス レ 名 ヲ 午 影 ノ 間
触 レ 石 ノ 片 雲 遮 リ 二 眼 界 ヲ 一
襄 陵 ニ 洪 水 失 ウ 二 人 寰 ヲ 一
居 然 兩 腋 風 蓬 勃
說 甚 ス 天 門 不 ト レ 可 レ 攀 ズ

▲原古処の詩

町医者にして文人

佐野東庵

執筆者
川端正夫

で栄えていたのです。

東庵と体の障害

佐野東庵は寛政7年

(1795年)、甘木の

高原町に生まれました。

「東庵」や「竹原」と

いうのは文人としての

「号」で、名前は宏、子どものこ

ろは善太郎と呼ばれました。父は

佐野茂七といい、甘木町の大きな

商家(佐野屋)の一族でした。佐

野屋はハゼ蠟(ハゼの木の実をし

ぼって作ったロウで、蠟燭などを

作る高価なもの)の取引などを

行って栄えた商家で、福岡本藩や

秋月藩の御用商人としても、幕末

から明治の初めごろまで、西日本

を中心に幅広く活躍したことで知

られる家でした。

しかし、まだ赤ん坊のころ、東

庵にとっては大変なことが起きて

しまいます。世話をしていた子守

の人が、背中に負ぶっていた赤ん

坊の東庵をあやまって地面に落と

してしまい、東庵は右肩と首が

くっついてしまったような不自由

な体になってしまったのです。東

庵はこの体の障害を生涯ひき受け

て生きました。

東庵の勉学

東庵を産んだお母さんは、早く

亡くなってしまいましたが、東庵

には立派な継母(後から佐野家

に来たお母さん)「たか」があり、

江戸時代の末ごろ、筑前甘木の

地で医業を営みながら、詩(漢詩)・

画(日本画)・書の達人として、当

代一流の文人(学者・芸術家)と

交流し、多くの優れた作品を残し、

多くの子弟を育てて、郷土の文化

の興隆に力を注いだ人がいました。

甘木の町の人々から親しく「東庵

先生」と呼ばれたその人の名は、

「佐野宏」といいました。

藩(52万石)の中心である福岡・

博多と、豊後の天領(江戸幕府か

ら代官が来て直接支配した直轄

地)日田との間にあって、人や物

資の往来が盛んな、大変にぎやか

な町でした。日田へ通ずる「日田

街道」と、筑後から秋月を通過

豊前小倉へ通ずる「秋月街道」の

交差点であり、福岡藩の支藩で

あった秋月黒田藩(5万石)とも

近いことから、「甘木千軒・秋月

千軒」といわれたように、武家の

町秋月と商人の町甘木が双方並ん

商都「甘木」

そのころの甘木町は、筑前黒田



日田の広瀬淡窓の塾（寄宿制の私学校で、後の咸宜園）へ14歳の東庵を入塾させました。文化5年（1808年）のことです。淡窓の生まれた日田の広瀬家も福岡・博多で活躍した大商家（「博多屋」）でしたので、佐野本家からの願いもあつたようです。

広瀬淡窓は福岡の大学者であつた亀井南冥に学んだ当時新進の学者詩人で、その塾「咸宜園」は、全国から武家の子に限らず多くの優秀な学生が来て熱心に学んだこととで有名です。その跡は今も日田の豆田にあります。若い東庵はここで勉学にはげみました。先生の

淡窓からも勤勉・善良で優秀な学生として大変愛され、その温かい師弟の關係は、以後約50年、お互いの生涯にわたつて続きました。

東庵という人は幼いころからよく勉強する人でした。先生にも恵まれ、当時の様々な学問を各地の大先生について熱心に学び、よく吸収して自分のものになりました。それらの学問は東庵の中で一つになり、この甘木の地に根を下ろし、花を開いたのでした。

各地での学問修行

日田の淡窓先生からだけではなく、20代の東庵は漢学（儒学・詩）、医学（漢方・西洋医学）、仏教・道教などの様々な学問を、その当時の有名な先生に付いて、熱心に学びました。当時は、今のよ

うな総合的な大学はありませんから、学問をする場合は、各地の先生を訪ねて、そこで先生に直接ついて学んだのです。東庵は実に熱心に勉学に精進しましたので、それぞれの先生から大変よい評価を得ました。

漢詩を広瀬淡窓と同じく福岡の亀井南冥に学んだ秋月の原古処から、漢方医学や仏教・道教などを広島

甘木駅医師頭

の医学者恵美三伯から、西洋医学を長崎の「鳴滝学舎」でドイツ人学者のシーボルトから学びました。また、日本画（文人画）を豊後竹田の田能村竹田から学びました。

文政9年（1826年）、各地での修行を終えて32歳になった東庵は、甘木高原町に落ち着き、町医者として開業しました。子どもから老人まで、貧しい人に対して

も親切に診察し、治療しましたので、名医として皆に慕われました。福岡藩からは「甘木駅医師頭」・「御目見医師」に任せられ、毎年福岡城に登城して藩主にあいさつし、甘木に立ち寄つた「お殿様」（福岡藩主や秋月藩主）の診察も任せられました。

『梅西舎詩鈔』

日田の咸宜園での学友たちや郷土甘木の文人たちだけでなく、原古処の娘の原采蘋（漢詩人）など、各地での学友とは、長年にわたつて詩や画を通じた交流が続きま

した。東庵の詩集『梅西舎詩鈔』には、近郊行楽の紀行詩や季節の詩とともに、学友たちとの楽しそうな交流の様子が伺える詩が残されています。東庵の芸術は、詩・書・画ともに気品に富み、高雅で温和な作者の精神を表現したものと

して高く評価されています。

市川團十郎との歓談

天保5年（1834年）、東庵は甘木町で興行した7代目市川團十郎（当時の日本一の歌舞伎役者）を庄屋町の宿舎に訪ね、甘木での町人歌舞伎の伝統（今の「盆俄」につながるもの）を語り、後に團十郎に愛用された「三桝かすりの浴衣（大中小の桝の模様デザインの浴衣）を染めた木綿の浴衣」を贈りました。團十郎は東庵の人物と話に感銘を受け、翌年の甘木公演を約束し、その約束を果たしました。当時の江戸歌舞伎市川團十郎一座は大変な人気で、博多・長崎での興行の途中に甘木で公演を行ったのです。

梅西舎

甘木のアーケード街を西に抜けて、「中央通り」を南の庄屋町の

方へ少し下ると、通りの右手に「佐野東庵先生旧跡」の碑があります。その奥の大きなイチヨウの木の下に、天満宮と薬師堂が仲良く並んで建っています。このあたりが甘木の高原町の、東庵の住まいがあった所です。天満宮の梅の木の下に建っていたことから「梅西舎」と呼ばれました。そこで東

庵は患者を治療し、多くの文人と交流し、弟子たちに様々なことを教えたのです。東庵先生が亡くなって100年経った昭和33年（1958年）に、当時の甘木の人々が先生を偲んで「梅西舎」の碑を建て、



▲甘木高原町の天満宮と薬師堂

その裏に先生の詩を刻みました。その詩にある「菅公祠（学問の神様といわれる菅原道真を祀った祠）」は、この天満宮のことです。詩に、「梅花を隔てた菅公祠に、朝お参りし、夕べに庭を掃く」とあります。町医者として慕われながら

学問と芸術を愛した東庵の日常と人柄を語る詩です。東庵は安政5年（1858年）に64歳で亡くなりました。明治になる約10年前です。東庵の墓は、その号から「竹原墓」と記されて、甘木二日町の「光照寺」の佐野家墓地の一角に静かに立っています。東庵の息子「佐野文洞」も日田の広瀬淡窓の「咸宜園」に学び、親子して先生の代理を務めるほどの漢詩の実力を発揮し、香月恕経をはじめ幕末・維新に活躍した多くの秀才を育てました。



▲昭和33年に建てられた梅西舎碑

秋月の生んだ女流漢詩人

原 采蘋

執筆者

川端 正夫

原猷（さいひん）は、江戸時代後期から幕末にかけて活躍した、秋月出身の女流漢詩人です。寛政10年（1798年）4月に秋月の原家に



▲原采蘋（版画：佐野至氏）

生まれ、61歳の生涯を萩で閉じらるまで、漢詩による表現の追求に、父の詩業の宣揚に、父母への孝養に一身を尽くしました。平成21年（2009年）で、亡くなつて150年になります。

采蘋が生まれ、活躍した時代

天明5年（1785年）に日向（宮崎）高鍋の秋月氏から迎えた8代藩主長舒が強力に学問芸術の振興を推進し、創建されて10年の「稽古館」の教育体制を強化し、福岡本藩で官学（朱子学）派に追われて失脚した大学者である亀井南冥（徂徠学派）を支援・庇護するなど秋月の文化的機運が高まったころで、采蘋が生まれたのは、まさにその機運の真つ直中でした。号（雅名）の「采蘋」は中国最古の詩集「詩経」の「召南」にある、「若くて美しい娘が神に供える浮草（蘋）を採（采）る情景」を歌った詩（「于以采蘋…」）から採られました。

采蘋の家族

天明5年（1785年）に日向（宮崎）高鍋の秋月氏から迎えた8代藩主長舒が強力に学問芸術の振興を推進し、創建されて10年の「稽古館」の教育体制を強化し、福岡本藩で官学（朱子学）派に追われて失脚した大学者である亀井南冥（徂徠学派）を支援・庇護するなど秋月の文化的機運が高まったころで、采蘋が生まれたのは、まさにその機運の真つ直中でした。号（雅名）の「采蘋」は中国最古の詩集「詩経」の「召南」にある、「若くて美しい娘が神に供える浮草（蘋）を採（采）る情景」を歌った詩（「于以采蘋…」）から採られました。

采蘋の父・原震平（古処）は、秋月の手塚家に生まれ、その学問優秀の故に稽古館の教授原百助（坦齋）の養子になった人で、藩命により18歳で福岡本藩の藩校である西学問所「甘棠館」に入学、その学頭・教授で大学者であった亀井南冥の下で学んだ学者・漢詩人です。

古処は南冥の学問を継承して郷里秋月に帰り、父・坦齋の跡を継いで稽古館の訓導・教授となり、藩主長舒・長韶に重用されて秋月藩の教育文化の基を築きました。

采蘋の母・雪（瑤池）は秋月の町屋の出で、佐谷氏から原家に嫁ぎました。詩を解する教養のある美人で、病弱な子どもを抱えながら家塾「古処山堂」の運営・子弟の教育に尽力しました。

采蘋には5歳上の兄・瑛太郎（白圭）、弟・瑾次郎（公瑜）と、幼くして亡くなった2人の妹がいました。

一家の墓は秋月の西念寺にあり、

古処の大きな墓は晩年の采蘋が建てたもので、墓の正面の文字「原古處先生之墓」が頼山陽書、左面に采蘋書の廣瀬淡窓の詩が刻まれています。采蘋の遺髪を納めた

小さな墓は父の右手前に、父母・兄弟の方に向かって慎ましく立ち、古処・采蘋に学んだ学者・吉田平陽の書いた墓誌が刻まれています。曰く、「雌而不伏、千里独行、秀句日出、山移水迎、茫茫天下、誰走弋者」(大意・女性であったが身を隠したりしなかった。日本の山河を一人で歩き巡り、素晴らしい詩をたくさん作った。この広い世界のだれも彼女を捕まえることはできなかった)。

父・古処の失脚と

采蘋への期待

文化9年(1812年)、采蘋の父・古処は江戸で突然、稽古館

教授・納戸頭の職を解かれ、帰秋以後、隠居して自由な一詩人としての活動を始めます。兄・白圭は病気がちで、漢詩人古処の大きな期待は采蘋に集中しました。

采蘋は、隠居して秋月の家塾「古処山堂」、また甘木の詩塾「天城詩社」を指導・経営する父を助けて、漢学・漢詩の道にますます精進するようになりま。古処の学識を慕って参集した並み居る秀才たちと切磋琢磨しながら学力と才能を伸ばし、時に父の代講を務めました。

隠居後の父・古処は、采蘋を連れ、各地の名だたる文人・学者たちと交わり、漢詩の贈答による交流をしました。日田で私塾「咸宜園」を開いた廣瀬淡窓を訪れたとき、22歳の采蘋はその席で大いに詩を披露し大酒を飲んだそう、淡窓はその詩才と教養を高く評価

し「その様は磊磊落落、男子に異ならず、又能く豪飲す」と日記に書いています。

采蘋の詩の世界は広く、自由でした。豪快で勇ましい詩も妖艶で華やかな詩も作りま。初期の柔らかい詩の一つを見てください。

海棠

帯紅色深淺

嬌在半開時

仙艷誰相似

大貞醉後姿

※海棠…春に濃いピンクの緋寒桜に似た下向きの花をつける木

(現代詩訳・吉木幸子)
紅の帯の色、濃くまた浅く、半開の時がなまめかしい。この世ならぬあでやかさは、だれに似たのだろう。快く酔った人の、うしる姿だ

女流漢詩人 原采蘋

漢詩は漢字だけで詩情を表現する、いわば中国語の詩です。江戸

時代後期から明治時代ごろまでは特に盛んに作られました。当時の本格的な漢学者・漢詩人はほぼ男性で、原家のように「詩人」として作詩を家業とする人は少ない時代ですから、女流漢詩人原采蘋は、極めて特異な存在でした。

采蘋は文政8年(1825年)、27歳のとき、江戸(東京)を目指し家運を賭けて東上の旅に出ます。父・古処は「不許無名人故城」(無名にして故城に入るを許さず)と極めて厳しい励ましの言葉を壮途の餞として送りました。采蘋にとってこの父の言葉は生涯重要な意味を持つこととなります。

采蘋の没後100年を記念して秋月城跡の「梅園」奥に建てられた詩碑に刻まれた詩「此去单身又向東、神交千里夢相通、家元天末歸何日、跡似楊花飛任風」(此処を去って、单身また東に向かう。

神交千里、夢相通ず。家は元天末、何の日にか帰る。跡は楊花に似て、飛んで風に任す)は、このころの作かと思われまます。

父の死、再び江戸へ

家督を継いでいた兄・白圭も病のため退隠し、原家は養子を迎えて辛うじて存続するという窮状のなか、父・古処は文政10年正月に61歳で亡くなりました。

采蘋は一家のこの窮状を打開すべく再び出郷しますが、兄弟も相次いで病没してしまいます。男装の采蘋は各地で多くの著名な文人らと交わり、気丈な詩を残しながら1年半をかけて東上し、江戸は浅草の称念寺に寄寓することになります。

以後、采蘋は当時の情報・文化の中心であった江戸で20年に及ぶ歳月を過ごし、詩人・書家として

経済的にも自立しつつ修練を積み、

父・古処の詩集出版を目指します。

江戸に落ち着いた采蘋は、老いた

母・雪を江戸に迎えようと秋月藩

庁に許可を願いますが許されず、

嘉永元年(1848年)、50歳の

とき、老いた母のために秋月に帰

郷します。

帰郷と再再出郷、最後の旅

采蘋は母と2人で秋月から下座郡屋永の専照寺に、やがて御笠郡山家(現在の筑紫野市)に移り、塾「宜宜堂」を営んで青少年の教育

を始めます。山家は日田街道と長崎街道が交わる宿場町で、各地から評判を聞いた若者が集まったようです。

そのころ、江戸での20年の経験

を語って「東都の人物は皆繊細で

技巧は優れているが、大海の鯨を

押さえられる程の人はだれもいなかった」と言ったそうです。何とも頼もしい女先生であったことでしょう。

倒幕の挙兵(生野の変)をした

ものの、幕府に鎮圧され、明治維

新の先駆けとなって29歳で死んだ

秋月藩士戸原継明(卯橋)も、15

歳で「宜宜堂」に入

り、采蘋晩年までの10年間、親しく指導を受けた人物です。

采蘋は嘉永5年(1852年)、母・

雪の死後、旅と作詩の生活を再開

します。安政6年(1859年)春、

再び父・古処の詩集出版を期して

江戸に向け出郷し、その途上、長

州(現在の山口県)萩で10月1日

に病死しました。采蘋の墓は萩の

光善寺にあり「孝愍齋女采蘋君墓」と刻まれています。

采蘋は「丈高く豊満で、瓜実

顔の美人であった」と伝えられて

います。采蘋は、関東で身につけ

た絹織を母のために自ら織って

「贅沢」といわれたときも、最後

の旅への出発前に西念寺の父母の

墓を大きくして藩庁から分不相応

とされたときも、自らの働きで親

に孝養を尽くして何が悪い、と敢

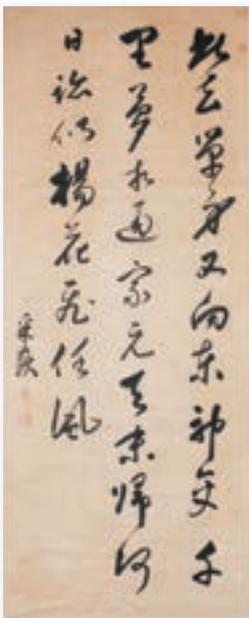
然として論破しました。光善寺の

墓銘にあるように、また戸原継明

もいうように、精神的には一貫し

た「至孝」の人であったといえる

のではないのでしょうか。



此去单身又向東 神交千里夢相通 家元天末何日 跡似楊花飛任風

◀原采蘋の筆跡(福岡市博物館蔵)

帰省の前に帰省なし、
帰省の後に帰省なし

宮崎湖処子

執筆者
安陪 悟



▲宮崎湖処子（写真提供：安陪悟氏）

湖処子の本名は宮崎八百吉とい
います。出身地は、福岡藩大老三
奈木黒田氏の別邸・播磨屋敷から
近い現在の朝倉市三奈木札の辻。
宮崎仁平の二男として、文久3年
（1863年）9月20日に生まれ
ました。

湖処子のほかに、愛郷学人など
の別号があり、一時は末兼姓を名
乗っていました。

宮崎家は、口碑によれば、秋月
城主秋月種実の侍大将・三奈木弥
平次の末裔で、農業を営む旧家で
した。弟の右夫は詩人で、号を亡
洋とい著書に『貧の朋友』があ
ります。

青雲の志を抱き上京

明治5年（1872年）、三奈
木長野の寺子屋に入ったのは9歳
のときです。その後、黒田播磨守
の儒臣・岡野孚（加藤孚）に「大

学」の素読を学ぶなどその才能は
幼児期から秀でていました。11歳
のときに岡野宅に開設された三奈
木小学校に入学するや、義太夫本
なかでも心中物を愛読し『絵本太
閻真蹟記』に功名心を抱く日々を
送っています。

西南戦争の明治10年（1877
年）、三奈木小学校を卒業し、そ
の年の秋に丁丑義塾に入り漢籍を
学びます。読書欲はますます強く
なり『日本外史』『十八史略』を
好んで読みました。

明治11年（1878年）、15歳
の4月、開設されたばかりの県立
福岡中学校に入学し、寄宿舎生活
を送ります。そして入学当初に、
福岡中島町の講義所で耶蘇教（キ
リスト教）の伝道師を初めて見て
います。

中学では、小学校以来の文章の嗜
好がさらに強まり『古文真宝後集』

を筆写し、文章家として知られるようになります。

父は、湖処子を東京の陸軍教導団に入れる意向でしたが考えが変わり、その出願免除のため、高木佐田安谷の母の実家に寄宿させ、佐田小学校の教師を務めさせました。

佐田安谷にいた1年間も『八大家読本』の中の「柳州記文」を愛読したり、肥前英彦山街道の道筋でもある佐田の自然美に傾倒したり、愛郷心を養う期間にもなっています。

明治13年（1880年）春、再び県立福岡中学校へ復学し、翌年卒業するも適当な職がなかったため郷里三奈木で農業に従事しながら陶淵明の『田園雑誌』を愛読し、田園詩人と自任します。

その後、屋形原小学校、山田小学校に奉職しますが、明治17年

（1884年）4月、山田小学校を退職します。

当時『東京横浜毎日新聞』の政治論に傾倒し、また、ギゾーの『文史』等を読んでいました。後年発表する『半生の懺悔』によれば「文章などただ『末技』にすぎぬ。

当今の時勢国家を経営し一身の功名をなさんとするには、是非とも政治家、但は代議士、但はギゾー氏のような政治学者とならねばならぬと思いこんだ」と記しているように、政治に関わることを志として上京します。

近代詩の先駆けを なした湖処子

上京後7月に東京専門学校政治科（現在の早稲田大学）に入学、明治20年（1887年）7月に卒業。その後、半年程帝国大学の専科に在学し、この期間にキリスト

教の洗礼を受けています。

明治21年（1888年）、湖処子をとりまく環境は厳しく、精神的経済的危機にあり、その救いを求めて、英語教師兼家庭教師として下総流山（現在の千葉県流山市）の豪家秋元三左衛門宅に身を寄せ、田舎の自然に慰められたり、住み込んだ家の温かい人情に接したり、都会生活で疲れた心から解放されました。

同年8月に父・仁平の死去を知りますが、帰郷せず再び上京し、東京経済雑誌社に入ります。「国民之友及び日本人」を東京経済雑誌に連載し、それを増補して集成社より刊行、徳富蘇峰に認められました。

明治22年（1889年）、初めて湖処子の筆名を使い「故郷」を『国民之友』に連載。以後は抒情的な散文、新体詩をさかんに発表して

います。

我が国の近代詩が、明治15年（1882年）の『新体詩抄』の翻訳詩からはじまり藤村の『若菜集』によって真の抒情詩が完成したと考えるとき、その土壌を用意した明治20年代において、最も多作で、質の高い抒情詩を生み出したのは湖処子であると、山田博光氏が指摘していることも頷けます。

それ故に、近代詩の先駆けをなしたのは湖処子といえます。

名著『帰省』の誕生

「帰省の前に帰省なし、帰省の後に帰省なし」とまでいわれ、多くの若者の心を掴み、当時のベストセラーになった『帰省』誕生の経緯を略述します。

父の死にも帰省しなかった湖処子は、父の一周忌に、兄の強い催促で帰省します。帰省にあたって

一抹の不安が脳裏を掠めます。というのも、上京するとき政治家になることが夢でしたが、今の自分を直視するとき、果たして家族をはじめ親戚知人は温かく迎えてくれるであろうかという心配があったに違いありません。

しかし、帰省してみると、不安とは裏腹に人情と平和のすめる故郷がありました。都会とは別世界の田園の理想像桃源郷の故郷の存在、母の実家佐田安谷の美しい自然もそのまま、後の湖処子夫人となる女性の優しいもてなし、6年ぶりの帰郷は、湖処子の心に故郷礼讃を育みました。これがきっかけで翌年、明治23年（1890年）6月、『帰省』として民友社より刊行され、故郷を賛美する田園文学の最高峰として絶賛をあびるのです。

文学から宗教へ

評論家として出発した湖処子は、明治23年以降は詩人、小説家と活躍します。特に作品『人寰』は、少年少女の愛を描き、終末は少女の井戸に身を投げるとい悲劇、そのため少年は出家するという内容ですが、樋口一葉の『たけくらべ』と並べられるほどの秀作との評価もあります。また『空家』『生死』『田代坂より故郷を見下してよめる長歌』の反戦作品は、平和主義者としての一面を物語っています。

さらに紀行文の先駆者でもあった湖処子ですが、民友社とともに活躍した国木田独歩などが文学史上に名を残したのに、湖処子はそれ程評価されていない理由はなぜでしょうか。

山田博光氏によると、二つの理

由があるとされています。ひとつは独歩をはじめ当時の作家たちが

代表作を次々に刊行したのに、湖処子は『帰省』を除いて小説の作品集を刊行しなかったため、文壇人や読者の目に触れることなく過ぎたこと。次に民友社を去ると同時に宗教者になったことです。

しかし、市内にある湖処子文学碑、特に現皇后陛下が皇太子妃時代、湖処子の詩「おもひ子」に曲をつけられた「子守り歌」の文学

碑は、永久にその名をとどめるところでしょう。

湖処子の死は、大正11年（1922年）、58歳、東京青山霊園に静かに眠っています。

※本稿は、山田博光編『民友社思想文学叢書第5巻 民友社文学集（二）』（三一書房、1984年）の宮崎湖処子年譜、解説を中心に取りまとめました。



▲甘木公園内にある「おもひ子」の文学碑。このほかに市内2カ所に湖処子の文学碑があります

新聞人、教育者、歌人（雅号比露思）

花田大五郎

執筆者
後藤 正明



▲花田大五郎（写真提供：渡邊フミエ氏）

今回紹介する花田大五郎は、生涯の前半を新聞記者として、後半を教育者として生きた人でした。そして、生涯を通じて研究したものが短歌で、自らを正岡子規没後の門弟と称したほど、ひたすら正岡流短歌の精進のため歌の道を探求した人でした。

少年期のころ

花田大五郎は、朝倉郡安川村持丸（現在の朝倉市持丸）の花田武八の二男として明治15年（1882年）3月11日に生まれました。花田家は、江戸時代には庄屋役を勤めた家でもありました。大五郎には、兄と姉がいて、兄・勝太郎（武一郎）は実家を継ぐことになりましたが、大五郎は体が小さいこともあって両親は大五郎が農業で生計を立てていくことが難しいと心配し、また、学校での成績が

大変よかったので教師にしたいと、上級学校に行かせることにしたのです。

明治28年4月、大五郎は久留米の県立明善中学校（現在の明善高校）に入学しました。当時は下宿生活、緊急に出かけるときは人力車を利用しました。

良き師、生涯の先輩・友人との出会い

明善中学校に入学した大五郎は、学問や人間としての教えを受けた先輩・高橋久太郎（三井郡出身、東京帝国大学生）と出会います。特に彼の導きによって、明治33年9月、熊本の第五高等学校（現在の熊本大学）に入学。高橋から五高生の誇り、寮生の勤め、将来の希望などを学びました。五高在学中には、小島祐馬（のち京都帝国大学教授）や後藤文夫（のち農林

大臣)との出会いもあり、学生時代に出会える友人の尊さを、切磋琢磨して感じた時期でした。

この間、入学試験のディクテーション(読み上げられた外国語の文章や単語を書き取ること)は夏目漱石先生に受けるなど多くの先生方の刺激を受けます。また、大五郎自らの意思で落第寸前となつた五高時代、2人の先生に救われるという経験もしています。卒業は明治36年7月でした。

京都帝国大学入学とアメリカ遊学

明治36年9月、大五郎は京都帝国大学(現在の京都大学)入学と同時に1年間休学し、アメリカのサンフランシスコ周辺に遊学しました。ここでアラスカ行きを勧められた大五郎は、移民と同じ生活(皿洗いやカニ缶詰の重労働)を

経験しました。また、キリスト教と出会い入信しています。

京都帝国大学時代に胸を病んで、1年休学しなければならず苦しみます。卒業は持ち越しかというとき、親友・小島祐馬の助言で、その年の卒業試験を突破することができたのでした。

新聞記者時代

明治41年(1908年)7月、大五郎は27歳で京都帝国大学法科を卒業し、9月に大阪朝日新聞社を入社します。新聞社では経済部に入社します。新聞社では地方の通信部長や論説委員などを務めました。

先に朝日新聞社に入社していた夏目漱石と同席したとき、長谷川如是閑が大五郎のことを「君が入学試験をした生徒さ」と言っ、漱石を苦笑させています。大正7年(1918年)、富山

県の漁村で起きた米騒動で、大阪朝日の記事に「白虹、日を貫く」

の文字を見た寺内内閣は、不敬罪などの罪で朝日新聞社を弾圧しました。そのとき、編集局長・鳥居素川、社会部長・長谷川如是閑とともに通信部長・花田大五郎も抗議のため辞職しました。世にいう「筆禍事件」です。大五郎たちは新聞人として、言論の自由のために戦ったのです。大五郎はその後、大正日日新聞社や、如是閑の紹介で大原社会問題研究所へ、そして読売新聞社にも勤めました。

教育界への転進

大正13年(1924年)7月、大五郎43歳のとき、母校である京都帝国大学学生監事務取扱として転職し、次いで学生監、書記官となります。このころ大五郎は、『貧乏物語』で有名だった河上肇教授

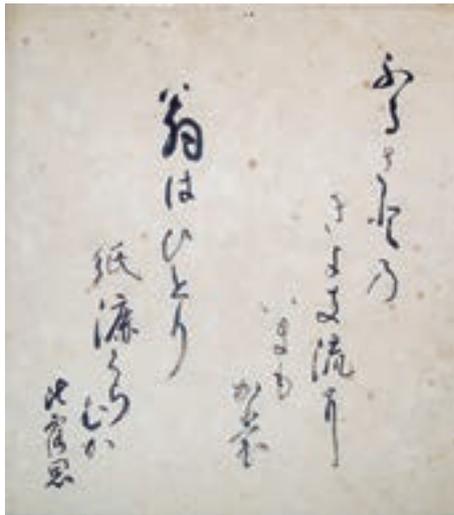
が滝川事件で退職する際に、誠意をもって手続きしています。

その後、大五郎は昭和5年に大阪市立商科大学(現在の大阪市立大学)教授兼学生監、昭和7年に和歌山高等商業学校(現在の和歌山大学)校長、昭和19年に九州経済専門学校(現在の福岡大学)校長、昭和24年に福岡商科大学(同)学長、昭和29年に大分大学学長、昭和33年に別府大学学長を務めます。どの学校でも、自ら実践し身をもって人を教育しました。

また、学長時代には緒方竹虎(朝日時代の後輩、代議士)から文部大臣就任の要請を受けています。

『言志四録』その悟り

大五郎は、人の道について絶えず考え悩みました。中学3年のとき、佐藤一斎の著『言志四録』と出会いますが、その真髓が理解で



▲宮中歌会始召人として詠んだ召歌「紙」の色紙 (秋月郷土館 蔵)

きませんでした。五高時代、その著によって、大五郎は「天に敬する」ということに帰着しました。「常に敬いの心を持するときに、精神が常に引きしまる」という境地でした。

歌人としての道 (宮中歌会始召人)

昭和39年(1964年)1月、宮中歌会始の召人に抜擢されます。そのとき詠んだ歌(召歌「紙」)が「ふるさとの清き流れに今もかも

翁はひとり紙漉くらむか」でした。

大五郎の『比露思』という雅号は、「大」をひろしと読ませ、漱石の小説『草枕』にある「秋づけば尾花が上に置く露の消ぬべくも吾は思ほゆるかも」という万葉の歌からつけたといわれています。「万葉に帰れ」「だれでも生活の声である歌が読めるということ」を伝える大五郎の歌は、日常生活の中から自然に生まれる歌であろうと思われまます。

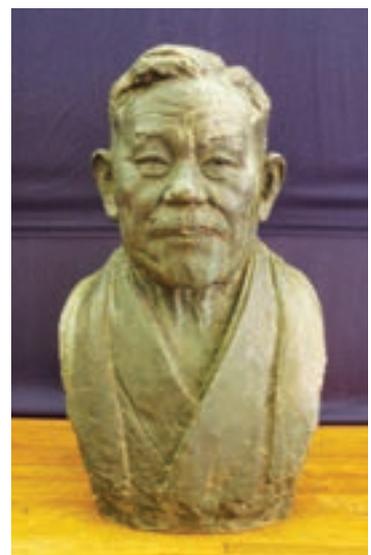
大正3年(1914年)に『しほさひ』を創刊。大正10年に歌誌『あけび』を創刊し、亡くなるまで主宰しました。生涯で作った歌は数万作にのぼり、著書には『歌集さんげ』『歌に就ての

考察』などがあります。

門人らによって、全国に花田比露思の歌碑が造られ(市内では、安川公民館や秋月城跡、古処山9合目など)顕彰され、あけびの歌会は現在も活動を続けています。

故郷への思い

大五郎は、早く母を亡くし、青年時代から近畿地方で活躍して、ふるさとから遠く離れたため、望郷の念は人一倍でした。ある門人に「父を古処山、母を安川」と言っているほど、故郷を愛したのです。大五郎は、妻・こまき、長女・露子、次女・久子、長男・治と、家族に恵まれました。大五郎は、85歳で従三位勲二等



▲大五郎80歳の記念に贈られた胸像 (秋月郷土館 蔵)

を受章しますが、翌昭和42年7月26日、大阪府寝屋川市香里園において、86歳で亡くなりました。

秋月郷土館

「花田比露思展」

平成19年、秋月郷土館で初めて花田比露思展が開催されました。大五郎80歳の記念に贈られた胸像が偶然にも秋月郷土館に入り、兵庫県の大五郎の家族から資料が寄贈されたうえ、実家である持丸の花田家や大五郎ゆかりの人たちの協力で、大五郎を紹介することができたのでした。

児童文学作家

豊島与志雄

とよしま よしお
執筆者
八尋節夫



▲豊島与志雄（『評伝 豊島与志雄』より転載）

豊島与志雄は、明治23年（1890年）11月27日、福田の小隈に父秀太郎・母ヨネの一人息子として生まれました。

3000坪程の広々とした敷地をもつ家に育ち、福田小学校を終えたあとは甘木の高等小学校へ進学、14歳になってからは福岡にある母の実家に寄留して西新にある中学・修猷館に通います。最高の学業成績をおさめ、5年後の卒業式では代表して答辞を読んでいます。

その後、上京して第一高等学校に学び、明治45年（1912年）には当時の東京帝国大学に入学、フランス文学を中心とした学問の道を進むのですが、高等学校在学中からすでに「小説」「詩」などを手がけては諸文学雑誌に投稿していました。

翻訳家・作家として

やがて、大正4年（1915年）に大学を卒業した与志雄は、殆どを東京で過ごすなか、彼独特の作風で次々と新作を発表、多くの読者の共感を呼び、文壇でも次第に頭角を現わす存在となつていきます。

なかでもフランス文学の翻訳家としての力量には素晴らしいものがあり、ユーゴーの『レ・ミゼラブル』、ロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』という二大長編の訳本は当時大いに人気を博したものでした。

与志雄は、元来孤独を愛し、自然に親しむ心情の持ち主でした。それに家庭的に苦勞も多かったよう、そうした生きざまをもとにした作品が多かったことも確かです。

一方文壇には、かの有名な夏目漱石・山本有三・菊池寛・太宰治・芥川龍之介などもいて与志雄も

親交を重ねていたようです。そうした同人たちの彼の作品に対する評では、『色彩感あふれる夢想と散策を好んだ文章なり詩が多くて、散文詩風の中に豊富な技巧が生かされていたり、また真剣な彼自身の煩悶を孕んだ部分が多い』と指摘されています。

与志雄に関しての「著作目録」を見てみると、40歳で妻を無くしたあと、残された幼い子ども3人のために、せっせと幾つもの童話を作っていた時期がありました。夏は夜の11時から朝の4時ごろまで、冬だと夜の9時から朝の2時ごろまで、旺盛な創作力と自己の周辺に求めた素材を元にして執筆に頑張ったものです。『お山の爺さん』『天下一の馬』『キンシヨ

キシヨキ』『天狗笑』などの魅力ある童話作品を数多く世に出したのもこうした時期でした。

豊島作品の原点

ところで、こうした与志雄の多くの作品を見たときに、どの作品にも感じる一つの共通点があることに気付くのです。それは何かといえば、幼児期に受けた郷土の雰囲気とか祖母から受けた感化です。

つまり幼いころ祖母から聞かされてきたいろいろな昔話や伝説が、後になって彼の人生をほぼ決定づけたといえるのではないのでしょうか。その証拠に後年の彼の回想に次のような一節があります。

「私の祖母は、いろいろな話を沢山知っておりまして。たいてい昔話のたぐいで、中に出て来るものは、人間をはじめ、鳥や獣や虫

や魚などさまざまでした。それらの話を、私が子供のころ、祖母はしばしば話してくれました。それを聞くのが、私には何よりの楽しみでした。それらの話を思い出すと、今でも温まる感じがします」

と。また昭和8年の『書かれざる作品』の中の「夢」というエッセーにも、「幼時、正月のいろいろな事柄のうちで、最も楽しいのは、初夢を待つ気持ちだった。伝説、慣例、各種の年中行事、そういったものに深くなじんでいた祖母が、初夢によってその年の運勢が占われることを私に教えてくれた。二日の朝、或いは三日の朝には、昨晚の夢はどうだったかと、祖母は必ず私に尋ねかける。その顔はいつも晴れやかで、にこにこしている。そして私が見た夢の解釈が、必ず吉であること、言うまでもない。しかしその解釈は私に



はどうでもよいことだった。ただ、そういう運勢的な解釈が加えられるために、夢は一層魅力を増して、それを待望する気持ちが煽られるのである。初夢は一年の最初の夢であるばかりでなく、何かしら、未知の世界、神秘の世界、広く深い運命の世界を、ちらと覗き込める隙間のようなものだった」と。

また、大正8年4月、29歳のころ『文章世界』に寄稿した「楠の話」の中にも与志雄の生まれ育った当時の屋敷の印象が描かれています。

「その頃私の家は田舎の広い屋敷にあった。屋敷の中には、竹藪があり池があり墓地があり木立が



▲与志雄の生家（福田校区小隈）
（『評伝 豊島与志雄』より転載）

あり広い庭があり、またちよつとした野菜畑もあった。私は子ども時代に屋敷から殆ど一步も踏み出さないで面白く遊び回ることが出来た。そして私の幼い心の最大の誇りは、屋敷の隅にある大きい楠だった。（中略）楠と並んで周囲一丈ばかりの檜が一本あった。それからまた椋の古木が一本あった。その三本の大木の根が絡まった狭い地面は、平地より四五尺高くなつて、その中央に落ち葉の中に熊笹

の生える真中に、石造りの小さな稲荷堂が一つあった」と淡々と述べていますが、そこには幼いころの自分と庭に生存する自然との親しげな雰囲気映し出されていることに気付くのです。

そして、それとともに純真無垢で感受性の盛んな幼児期の、これにたつぷりと祖母から聞かされた夢のような話とが重なり合いながら、与志雄をしてむらむらとした創作意欲を醸成させたに違いないと思います。

苦難の時代と 晩年の名声

ところが、このように優れた多くの作品を世に発表した派手さの裏には、甘木小隈の実家没落による償いとか日々の苦しい生計を補った時期があり、昭和24年ごろ（58歳）までの終戦前後の35年間

というものは、執筆の外に教師として一度に幾つもの学校を掛け持つという貧困苦労の時代でした。つまり給料と原稿料収入の二本立てでないとい過ごせない生活があったといえます。

そうした苦難の後、晩年には、著述活動の他に日本ペンクラブや日中友好協会のメンバーとして人一倍力を注いできたことも見逃せません。

このようにして過ごしてきた与志雄に対して、昭和24年にはそれまでの功績が認められ、名誉ある日本芸術院会員の1人に推されました。

しかしながら残念なことには、その彼も無理を重ねてきたせいからでしょうか、いつのまにか健康を損ない、病に臥して昭和30年6月18日、遂にこの世を去ったの

です。時に65歳でした。

なお、豊島与志雄の追悼と生前の功績を後世に伝えるために、平成17年の「没五十周年記念祭」以降、地元では毎年1回（9月中旬）、生家跡地の記念碑前で地区振興会主催による「顕彰会」を開いていきます。

内容としては、小学校高学年参加による「童話作品朗読会」や、研究同人による「与志雄を語る」講演会などがあります。

※本稿は、関口安義著『評伝 豊島与志雄』（未来社、1987年）を中心に取りまとめました。



▲豊島与志雄出生之地記念碑

芸術振興に寄与した画家

かなだ
金田和郎
 わらう

執筆者
 八尋節夫



▲金田和郎（『金田和郎回顧展』より転載）



過去に甘木・朝倉の地で近代的
 芸術の思潮並びに芸術文化の普及
 に尽力し、現在の郷土芸術振興の
 草分けとして素晴らしい足跡を残
 した人物がいました。

その人は、当時旧制中学校の一
 美術教師だった金田和郎です。

生い立ち

和郎は、明治28年（1895年）
 5月3日、福岡県京都郡行橋町で
 金田亀市・サンの長男として生ま
 れました。

そして地元の高等小学校を卒業
 した後、明治43年4月、福岡県立

豊津中学校（現在の育徳館高校）
 に入學。すでに、このころから絵
 を描くことに興味を覚え、同地在
 住の南画家・曾木聴松に手ほどき
 を受けていました。

画道ひとすじに

そのうち絵を描くことへの意欲
 がますます強くなり、遂に中学校
 を中途退学。19歳で京都に出て、
 本気になって絵に磨きをかける決
 心をしました。

そして京都市立絵画専門学校別
 科（現在の京都市立芸術大学）に
 入学はしたものの、それだけでは
 満足せず、基礎から勉強し直そう
 と、同市にある市立美術工芸学校
 絵画科（同）に転学して努力を重
 ねました。

そのうち校内競技会で運筆の良
 さを認められ賞牌を受けるまでに
 成長し、やがて神戸の神港美術展

に出品するなど、和郎の作品は次第に多くの人の注目するところとなりました。

そして大正7年、23歳で結婚。

その後、専門学校3年生在学中に制作していた「水蜜桃」に改めて手を加え、第1回国画創作協会展に出品したところ、見事に「梶牛賞」を受賞することができ

ました。「梶牛賞」といえば、日本画の巨匠・高山樗牛にちなんだ最高の賞です。そして卒業後も、さらに制作に没頭すべく、京都市立絵画専門学校の本科に入



▲金田和郎「水蜜桃」(個人蔵)

学し直しました。ところがせっかく入学したものの、2カ月ほど過ぎたころ、残念ながら病にかかり中途退学して郷里に戻り八幡市(現在の北九州市)に居住し静養に努めました。しかし、病の身ながら、それでも制作活動に励みました。

教師として朝倉へ

やがて健康を取り戻した和郎は、安定した生活を求めるため教師の道を選び、大正11年(1922年)になって、福岡県立朝倉中学校(現在の朝倉高校)および朝倉高等女学校に図画教師としての赴任の機会を得て、朝倉の地にやって来ました。住居は甘木町(琴平町)でした。

そのうち、朝倉高等女学校は辞任しましたが、一方の朝倉中学校で腰を据えて教職に専念することになりました。

大正15年になって彼の力量に関心を寄せていた人たちの発案で「金田南村画伯作品頒布会」が実現しました。早速当時の朝倉郡甘木町をはじめ、郡内各町村、浮羽郡田主丸町・吉井町などの旧家、有力者、教師など、およそ100人ほ

どの人々が集まるなか、約80点の和郎の作品が広く頒布されました。当時の教員の給与が安かった時代に、多くの家族を抱えていた和郎にとって大変な助けとなりました。

画才花開く

このことを機会に、一躍彼の作品なり画家としての名声が地域に高まり、一斉に彼の作品の素晴らしさが多くの人の目に留まりました。その後、和郎の制作意欲も一層高まることになりましたが、それにも増して嬉しかったことは、和郎に師事する教え子たちが、絵画制作に相次いで名乗りを挙げたことでした。

和郎の人柄と作風

教師としての和郎は、きちっと七分三分に掻き分けられた頭髪に短く手入れされた黒髭が特徴で、

大正時代によくいわれていたハイカラな教師でした。生来真面目で几帳面^{きちょうめん}、また情に厚い一面を持っていました。生徒は和郎のことを親しみをもって「キンタさん」とあだ名で呼んでいました。

そして和郎自身、「教育は私にとって天職である」と、画業とは別に、誠心誠意、日々の教育に専念し、個々の生徒の将来についても良き相談相手となるなど、努力を重ねていきました。

ところで画家としての和郎の作

風は、大正時代の当時の流れを受けた、どちらかといえば南画を機軸とした国画会風的な日本画が得意で、絹彩色の軸装の作品が主であり、世にいう山水花鳥の領域を中心とした制作が主なものでした。

「樗牛賞」を取った「水蜜桃」をはじめ、大正初期に描いた「葡萄図」「牡丹図」、後期の「滝紅葉図」「山水図」「登鯉」「鴛鴦図」、昭和になつての「石榴」「竹薔薇図」「釈迦出山図」「蓬萊山」「遊鯉之図」「金

魚」など枚挙に暇なく数々の名作を手がけてきました。

指導中に倒れる

図画教師としての和郎は、春は校庭の大けやきの新緑を、秋は菩提寺の櫨の紅葉を題材に、生徒を連れていつてはよく写生をさせていました。昭和16年11月10日、この日も野外で2年生を指導していましたが、突然吐血を伴った状態でその場に倒れました。直ちに現場に居合わせた生徒たちが戸板に



▲金田和郎「遊鯉之図」(大西秀明氏 蔵)

乗せて自宅まで送り届けましたが、残念ながら胃潰瘍のため回復にはほど遠く、ついに帰らぬ人となってしまいました。およそ19年有余の、朝倉中学校での勤務でした。そして昭和16年11月17日、甘木発祥の古刹臨濟宗安長寺で学校葬の形で葬儀が営まれました。46歳でした。

朝倉の芸術の発展

和郎が死去した後、彼の遺風なり薫陶を受けて、朝倉の地から日本芸術院会員・日展理事・示現会常務理事の大内田茂士をはじめ、日本画家で朝倉中学の図画教師として後を継いだ森田正芳のほか、萩谷巖、浦山一正、鳥居芳雄などの画家が育つたのでした。また、平成3年10月には、和郎の回顧展が甘木歴史資料館で盛大に行われました。

木蠟製造家で俳人、朝倉文化の顕彰者

上野の嘉弥太

執筆者
後藤 正明



▲上野嘉弥太（写真提供：上野寿三氏）

朝倉の文化は、脈々と育まれ伝えられてきたもので、人生のすべてを文化目的に捧げた同地域の人々の結晶です。この文化を明らかにし、歴史を掘り起こして伝えたなかの1人で、木蠟（蠟燭などの原料）製造を家業とした上野嘉弥太を紹介します。

上野家のこと

上野家は、安土桃山時代に活躍した筑後国上妻郡（現在の八女市）の国人、筑紫広門の家臣で、初代上野伊賀守正門の子孫と伝えられています。2代目正豊は、筑前国夜須郡吹田村（現在の朝倉郡筑前町）庄屋役、さらに福岡箱崎に出て諸々の商売をし、元禄15年（1702年）、夫婦ともに夜須郡甘木村上新町（現在の朝倉市甘木）に引越し、酒造商を始めました。享保9年（1724年）、4代目正之は水町に移り、酒屋（商標「上」から「上」が分家）を営み、

弟の弥三右衛門も商家「上」として別れます。5代目正勝の弟・弥兵衛は明和6年（1769年）、別家した後、蠟屋「芥」を始めます。そして翌年、次弟の柰次も蠟屋「上」を営みました。

「上」出身の佐平は、安政3年（1856年）、福岡藩生蠟御仕組に関わった甘木高原町の佐野屋の養子となり、大いに活躍しました。

嘉弥太の生い立ち

嘉弥太は、上野蠟屋（芥）の5代目好三郎と、クメラ（現在の朝倉市相窪の橋本家）の長男として、明治29年（1896年）11月7日、朝倉郡甘木水町に生まれました。兄弟姉妹は、すぐ下の妹みとよ（長女）、二男嘉壽（呉服商、甘木四日町菱屋）、二女博子、三男昇、四男大蔵、三女富久の四男三女でした。

嘉弥太が旧制朝倉中学校（現在の朝倉高校）1年のときに書いた

作文「吾が家」に、自家の家業や家族を愛する一文を残しており、嘉弥太の心根がうかがえます。

朝倉中学初代校長の 教えに感化

明治41年3月、旧制朝倉中学は、杷木の熊谷藤五郎や三輪の多田作兵衛らの努力で、県下6番目の学校として誕生します。初代校長の秋吉音次は31歳で校長となり、学問の神様といわれる菅原道真公を教育の中心に掲げ、教育にあたりました。

嘉弥太は朝倉中学校2回卒業（大正3年）で、在学中に秋吉から人生の指針となる堅忍不拔の精神を学びました。朝倉中学といえ、勤労教育・集団作業が有名で、その作業から培ったものが、友との絆であったといえます。

加藤新吉との友情

嘉弥太は、朝倉中学で同級の加

藤新吉と出会いました。日本と中

国の間で戦争が始まった昭和12年、嘉弥太は甘木町議会議員選挙に出馬します。その応援に、南満州鉄道勤務であった新吉が、激務中にもかかわらず馳せ参じています。昭和29年1月、新吉は、三奈木村長との現職中に亡くなります。嘉弥太は新吉から強い影響を受け、朝倉の文化・歴史との関わりを深めていきました。

木蠟製造と

林野政策への懸念

朝倉の櫛蠟は江戸時代の享保大飢饉以後、農家の副業として始まり、また藩の財政立て直しのため木蠟の専売仕法が登場します。5代目好三郎は明治時代に、筑前木蠟同業組合の朝倉支部長を務めます。嘉弥太は、中学卒業と同時に家業（製蠟業兼質屋）の仕事を本格的に行い、昭和14年、日本木蠟工業組合連合会の理事として活動し

ました。

戦後、嘉弥太は、昭和35年から42年まで日本木蠟商工組合4代理事長を務め、西日本の木蠟業の発展に貢献しますが、政府の林野政策（杉の植樹など）に対して、大きな懸念を抱きました。嘉弥太は、灯火用光エネルギーの変革の中で、木蠟需要が落ち込むなか、懸命に木蠟を製造し続けます。

朝倉の製蠟業者も明治以降、30軒以上ありましたが、昭和30年代、上野家1軒となっていました。上野蠟屋は、国内では東京、大阪



▲上野製蠟工場（大正末ころ～昭和初めころ）
（写真提供：上野寿三氏）

の間屋へ蠟を出荷し、海外ではアメリカが主な輸出先でした。時代が移り、昭和46年、ついに廃業することになりました。江戸時代から昭和前期にかけて、朝倉地方を彩った櫛紅葉は、時代の流れとはいえ同地域からその姿を消してしまつたのです。

俳諧の道、高浜虚子・ 年尾父子らとの交流

嘉弥太は大正9年、20代半ばから俳句を始めます。当初、俳諧の先輩たちや吉岡禅師洞らから教示され、特に禅師洞に深く師事しました。一時中断後、虚子の愛弟子の川端茅舎に師事します。昭和14年、茅舎の九州俳諧旅行が、杷木の小野房子の熱烈な要請で実現しました。同16年、茅舎の没後、房子主宰の「鬼打木」の活発な活動で、嘉弥太の俳句活動に火がつけました。

昭和21年、高浜虚子は、父の

池内庄四郎（伊予松山松平藩士）が秋月藩の藤田仲らと剣術試合をしたゆかりの地・秋月へ赴く途中、嘉弥太宅に宿泊しました。この機会に、一句賜っています。「初時雨ありたりとかや庭の面」と。その後、上野家の庭に虚子の碑が作られました。

緒方無元との 俳諧・文化顕彰

朝倉中の4年後輩に緒方久一郎（号は無元）がいます。嘉弥太の俳諧の友で、地元朝倉の文化・歴史の顕彰とともに計画し、協力していました。

昭和27年、嘉弥太らは原鶴小野屋で、三笠宮殿下と俳諧の一時を過ごす機会を得ました。俳句では、昭和33年、ほぼ同時に虚子からホトトギス同人の推薦をうけます。2人の作風はまったく違っていません。嘉弥太は風流好み、無元は写真愛好みでした。

2人は、虚子師指導のもと、その弟子・河野静雲の影響の中で、朝倉俳諧の基礎をかため、後進の指導にあたりました。現在、その教え子の方々に受け継がれています。

嘉弥太と能楽宝生流

朝倉宝生流は三奈木の黒田一雄（福岡藩家老）に源を発し、詳細は、三奈木黒田家の家臣の家に生まれた尾野実信（のち陸軍大将）の『黒田一雄略伝』に記録されています。嘉弥太は大正4年ごろから朝倉宝生流の縁を頂きました。会として一七世宝生九郎家元を迎え、朝倉入地にある恋の木桂の池記念植樹、さらに、記念碑建立にも関わり、史跡の顕彰をしています。

社会活動、その信条

嘉弥太は町議2期の経験から、実際行う奉仕こそが真の奉仕者だという信条のもと、郷土朝倉の文化顕彰に力を注ぎました。昭和35

年、甘木ロータリークラブ設立に参加し、後に会長となります。また、甘木市遺族連合会会長や新制朝倉高校の初代同窓会会長も務めました。

嘉弥太の句集『黄櫨帖』

嘉弥太は昭和41年、朝高同窓会の役員会で突然脳卒中で倒れ、直ちに九大付属病院に入院、病床の身となります。懸命のリハビリが続くなか、妻・タカの懇願により、嘉弥太の俳句集が刊行されることになりました。

俳句集は、小野屋の律子が協力し、高浜年尾が俳句を選定し、原三猿子らの支援もあり、完成しました。句集名『黄櫨帖』は、昭和33年、虚子が名付けたものです。この句集には家業の木蠟の句が多く、昭和15年に読んだ句「くろがねの裸たのもし蠟絞」も掲載されています。

俳句の号は、木蠟と縁が深い「嘉

太櫨」と名付け使っています。嘉弥太は昭和45年2月3日、74歳で亡くなりました。菩提寺は甘木七日町教法寺です。

嘉弥太の俳句再登場、 そして家族

平成16年、NHKの教育テレビ「にほんごであそぼ」の名句に嘉弥太の句が掲載されました。その句は「雪沓のぎゅうぎゅうとなる山路かな」で、嘉弥太の風流さが表れています。そして現在、嘉弥太の意思を引き継いで、7代目当主・寿三と妻・幸子が上野家を守っています。



▲昭和33年、高浜虚子句碑の除幕式（甘木公園）。左から無元、静雲、虚子の娘・立子、虚子、嘉弥太、三笠甘木市長（写真提供：上野寿三氏）

俳誌『鬼打木』を主宰した

小野房子

執筆者
松本 憲明



▲房子、師・茅舎の遺影とともに（宮崎市青島）

小野房子は明治31年9月21日、東京府北多摩郡田無町に、坂谷伊之助・とく夫妻の次女として生まれました。田無町は武蔵野台地のほぼ中央にあり、江戸時代は青梅街道の宿場町でした。武蔵野の林が広がり富士山がながめられる、美しくのどかな風土に育ちましたが、7歳のとき、母のとくが亡くなりました。

房子は母の実家がある東京市日本橋に移り、祖母の手で武家の娘同様、厳格に育てられました。女学校を卒業後、娘時代の房子の様子は詳しく分かりません。ただ、「神田の本屋街に行けば房子が居る」といわれるほど本が好きでした。後に夫となる小野直世との出会いも本屋らしく、文学談義に話が弾んだのでしょうか。直世は神官の資格を得るため上京し、勉学に励む学生でした。やがて2人に愛が芽生え東京で結婚、長男・

英世を授かりました。

直世は省線や逓信省に勤め、家族の生活を支えていましたが、神職が使命との自覚にめざめ、家族とともに帰郷することになりました。大正12年、関東大震災の直前でした。

志波宝満宮へ

直世の実家は朝倉郡志波村宮原（現在の朝倉市杷木志波）で、志波台地が筑後川に洗われ暖地系樹木が繁茂する景勝地です。直世と家族は、無事に志波宝満宮の実家に戻りましたが、父・正雄（宮司）の決定で、親戚先の蜷城村深見家に預けられました。直世夫婦は、同村の美奈宜神社で、宮司家の仕来たりを見習うことになったのです。

大正13年3月、長男・英世の小学校入学がせまり、直世家族は実家に復して、直世は志波村役場の

戸籍係に勤めました。

『ホトトギス』を愛読

房子が志波の暮らしに慣れたころ、東京から俳句雑誌『ホトトギス』が送られて来るようになりました。送り主は、俳句好きの弟・鐘三郎でしょうか。東京のころと違って、満身に本を読む機会がない房子は、何度も読み返し、やがて自分でも句を作るようになりました。また、「だれか良き師を」との願望が強くなり、『ホトトギス』に掲載される代表的な俳人の作品に注目する日々が続きました。

俳句の師・川端茅舎

房子が俳句の師と心に決めたのは、川端茅舎でした。昭和7年10月、上京して大森区桐里町（現在の大田区）の茅舎邸を訪ねました。初対面の茅舎に、じかに弟子入りの願いはしにくく、「お句に出て

いる露のお庭を拝見出来まじょうか」と来意を告げたところ、茅舎は丁寧に案内し、庭や俳句のことを語ってくれました。

志波に帰り、早速出来た句を添えて弟子入りを願いました。茅舎からは「心よく承知する」との温かい返事が届きました。遠く隔てた師と弟子は手紙の往復で研鑽を積みました。いわば通信教育ですが、茅舎の指導は独特で、房子が提出した句稿には○と●とー線が振られたのみ、添削指導はありません。よく考えて努力しなさいというものでした。『ホトトギス』昭和7年12月号雑誌に、初入選句が載りました。

「たずね来ぬ紫苑の露は
いまだしも」

句誌『鬼打木』の発行

房子は、少数の友人と「黄心樹」という句誌を出していたらしく、

これを母体として昭和12年7月から、茅舎指導のもと房子主宰による句誌『鬼打木』を発行することが決まりました。発行予告を地方新聞等に掲載、また、知人を通して勧誘に努めたところ、予想以上の購読申し込みがあり、房子は大喜びでした。茅舎は初号のでき上がりや、「鬼打木は序も雑誌も気持ちよく出来ました。表紙の色も気持ちいいです」と房子への便りでねぎらいました。

茅舎、朝倉の旅以降

茅舎は病身を押ししてでも筑紫路・朝倉への旅に出ようと決意しました。房子や鬼打木会員の句の指導をし、併せて菜殻火を見たいと思ったからです。菜殻火とは、種を採った後の菜殻を田畑で燃す火のことで、戦後まで見られた梅雨前の風物詩でした。昭和14年6月9日、茅舎は博多駅に下車、房

子とその句友の上野嘉太樞、北川葛人、平田四郊の出迎えを受け、甘木駅では緒方無元夫妻や鬼打木会員の盛大な歓迎に感激しました。

茅舎は同月19日まで宝満宮に滞在。その間、甘木公園での歓迎句会、秋月吟行、太宰府菜殻火吟行など、気を張って成し遂げました。茅舎の菜殻火を詠んだ作品に「筑紫野の菜殻の聖火見に來たり」や「燎原の火か筑紫野の菜殻火か」など一連の秀句があります。帰京の日、茅舎は小野家との別れに際して、「笹粽ほどきほどきて相別れ」と詠み、房子もまた、惜別の思いを次の一句に託しました。

「笹ちまき巻きつ、
思ひはるかなる」

朝倉の旅前後は小康を保っていた茅舎も、昭和15年1月以降は咳のため呼吸困難になり、咯血、頭痛に苦しみました。房子は3月と5月に師の病氣見舞いに上京、翌

16年4月にも茅舎邸を訪ね、病が篤いことを悟りました。そして7月17日、茅舎は44歳の生涯を閉じました。同年11月、房子は茅舎の写真を抱いて、宮崎市青島に一泊の旅をしました。「この次は青島に」と漏らしていた、茅舎の望みをかなえました。

茅舎句碑の建設は鬼打木会員にも諮っていましたが、時局が厳しく、着手しがたい状況にありました。宝満宮境内には「筑紫野の菜殻の聖火見に來たり」の句碑があります。建碑者は房子と弟子の熊本晴穂で、終戦前後密かに建てられたものでしょう。昭和21年11月、高濱虚子はここに立ち、愛弟子・茅舎をしのびました。

戦後の房子と『鬼打木』

戦後の窮乏の時期も、房子は鬼打木句会を続けました。句誌『鬼打木』も孔版（ガリ版）印刷なが

ら、不定期刊行で発行されています。原紙切りから製本までを、復員したての矢野竹坊と丸山輝生が担当しました。

昭和27年には杷木町公民館報が発行を開始。房子は編集委員となり俳壇欄を担当するとともに、エッセイや評論も寄稿しました。房子に公民館活動という新境地が開け始めたころです。

昭和31年8月、房子は伊豆市修善寺に行き、ようやく亡き師・茅舎の墓参りを果しました。

「修善寺のおくれし盆に参りけり」

房子は昭和33年4月、がんの手術を受けましたが、翌34年1月に再発。6月12日、死去しました。行年62歳でした。

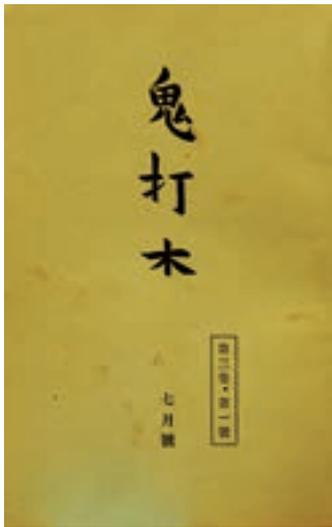
昭和38年、鬼打木の中堅手島知加、矢野竹坊、丸山輝生、渡辺紫朗と諸氏が房子の句碑建設を發起。ゆかりの人々の協力を得て、これも宝満宮境内鬼打木の樹の下に建碑されました。

「花楓日の行く所はなやかに」
もう一つの房子句碑が、房子を師とも姉とも慕った伊藤白蝶の邸内（杷木星丸）に建てられています。

「白きすみれほろりと
したる目に清し」

昭和58年秋の建立で、除幕の事は房子の長男・英世が行い、祝詞奏上中あざやかな黄蝶が飛来し去り難く舞っていたと、語り草になりました。白きすみれの句は、俳人房子の人柄をよく伝えていませ。情にもろく無欲で、かつ、温かい俳人でした。

昭和59年、次女・池田みちゑは房子の詠んだ2000句から秀句を選び、遺句集『しのび草』（私家版）を編み、亡き母を追慕しました。



▲房子主宰の句誌『鬼打木』



▲房子「花楓」の句碑

西行・良寛・愚庵を敬慕した歌人

大坪草二郎

執筆者
松本憲明



▲大坪草二郎（写真提供：竹下光彦氏）

草二郎の生い立ち

草二郎、本名・大坪市助は、明治33年（1900年）2月11日、父梅吉、母ユキの三男として福岡県朝倉郡上秋月村大字日向石字永谷に生まれました。父梅吉は農家のかたわら菓子店を開き、さらに横手の川に水車を架けて麵類の製造も手がけていました。

明治39年、上秋月尋常小学校に入学。夏に入ったところ、家族全員が熱病にかかりました。熱病は治まったものの、4歳の弟が腹膜炎で死亡しました。梅吉は、この家は不吉だと思ひ込み、売り払って、一家は永谷集落の奥地に引越しました。

明治42年9月には、3歳上の兄が洪水後の川へ魚取りに行き、流されて亡くなりました。度重なる不幸に耐え切れず、梅吉は「手伝いもせず、本ばかり読む」と、市助に当たりました。

明治45年春、小学校を卒業。奉公に出ていた長兄が戻り、家で駄菓子製造を始めたので、父と市助は大きな包みを背負って山を越え、往復7、8里の村々を回り、菓子商行商をしました。結局、これは失敗し、一家は大きな借金を抱えました。

働いて学んだ日々

借金返済のため、市助は明治45年の冬から上秋月村役場の小使になりました。幼い弟妹を抱えた生活は苦勞続きでしたが、役場の仕事はいやではありませんでした。役場に備え付けの本が読めたからです。読む本が無くなると秋月町の貸本屋へ出向き、借りあさりました。一方で短歌を詠み始め、『萬朝報』（注1）に歌を投稿するのが楽しみでした。

大正5年（1916年）1月、農業技師として福岡農学校を出た大倉清周が上秋月村役場に就職し

ました。市助の境遇に同情した大倉は、家伝来の『万葉集略解』（注2）と『古今和歌集』（注3）を貸し与え、手ほどきをしてくれました。

そのころ、秋月と周辺の若者集団「ホラの会」は、短歌の回覧誌『路傍』を出していました。次の短歌は『路傍』に寄せた市助の一首で、ここでは紫峰と号しています。

「来ぬ人と呼ばふる如くほろほろとふくろふ鳴くなり君待ちおれば」

その年の5月、市助は村を出て、八幡製鉄所の見習い工具になりました。1日12時間勤務、休暇は月に一度という激務でした。しかし、職工養成所の図書室や大蔵町の図書館に通い、独学に励みました。大正6年元旦、関門日日新聞文芸欄に投稿した短歌が、草二郎の名で、特等入選を果たしました。

「落日の征箭ひとしきり射す中に蟻の虫引く努力をば見ぬ」（注4）

当時製鉄所では、見習い工具を掃除番と蔑称しており、それをサリとかわして、掃除と音が通じる草二郎を筆名にしたと思えます。しかし、激務で体が続かなくなり、同年2月退職し、土木請負業岡本組の現場監督になりました。

草二郎流浪の青春

大正7年、年明けから仕事を探して、大里・門司・彦島など各地を転々とし、人夫や船渠工事の作業員をしました。同年3月、草二郎は田川郡添田町の峯地炭鉱に入り、筑豊の炭鉱を渡り歩きました。神の浦炭鉱で働いたとき、40年輩の中島憲雄と知り合います。2人で遠賀郡の炭鉱を流浪の途上、中島は急に悪い、亡くなりました。「俺は大学を出て家業を継ぎ、妻子もありながら、中国の革命運動に参加した」と語った中島を不憫に思い、草二郎は遺骨を抱いて熊本県山鹿の実家へ届けました。そ

のころを回想して詠んだ歌二首。「老いし友と若き吾とが携へてきすらいし日の想ひはるけし」

「さすらひの少年吾がつねに持ちし基督と釈迦と孔子の伝記」

帰郷、そして東京へ

草二郎は身も心も疲れ果て、悄然と故郷に戻りました。家を出て、2年に近い歳月が流れていました。大正9年5月、徴兵検査を受けて不合格となり、これを機に上京を決意し、八幡時代に文通で知り合った屋敷頼雄を頼って上京しました。

屋敷は東洋大学の学生ながら歌人でもあり、草二郎に、若手歌人が集う「行路」への入会を勧めました。この会で高田波吉らを知り、活動を始めた草二郎でしたが、9月に肋膜炎を発症し、帰郷を余儀なくされました。

大正10年2月、再上京。今度は『アララギ』会員になり、島木赤

彦に師事し、かたわら日本林業社に勤めたところ8月に会社が倒産。同時に肺炎を起こし、生活さえ困難になりました。この窮状を見かねた、会社の先輩・石川明雄は、川崎町鶴見の自宅に引き取って介抱しました。他郷の人情に涙した草二郎でした。

処女出版『雲水良寛』

やがて病状が快方に向かうと、薬売りや工事の人夫をして働き、夜は原稿執筆に没頭しました。こうして仕上げた小説が、処女作『雲水良寛』です。この労作は、作家で「人生創造運動」の主宰者石丸梧平に認められ、大正11年5月、春秋社から出版されました。

同年、二六新報の記者になり、琵琶新聞の顧問にも迎えられ琵琶歌を作詞するなど、明るい兆しが見えてきました。このころ、後に妻となる竹下光子を知りました。やや生活も安定し、処女作の成功も

あつて、草二郎の心は故郷の家族
に向けられました。同年秋、帰郷。
一段と穏やかになった父に、無上
の親しみを覚える草二郎でした。

「おのづから心親しも草鞋つくる
父の手もとをまもりてあれば」

この年、古代に生きた人々の愛
と死を描いた戯曲『曠野の花』を
書き上げました。

大正12年5月、東京市港区の南
台寺に下宿を移し、作家志望の石
坂洋次郎と出会い、2人は競うよ
うに創作活動に励みました。戦後
石坂は朝日新聞に『青い山脈』を
連載し、「百万人の作家」と呼ば
れています。草二郎はこのころ、
戯曲の執筆に熱心で、8月には
『大海人皇子』を脱稿しました。9
月、関東大震災が発生、東京は大
混乱に陥りました。翌年、戯曲『大
海人皇子』が、集英社より刊行さ
れました。

大正15年1月、盲腸炎をこじら
せ床についていた故郷の父が死去

さらに3月、『アララギ』の恩師で、
草二郎の良き理解者だった島木赤
彦も逝去、草二郎は烈風に立つ思
いがしました。

昭和3年4月、倉田百三主宰
の雑誌『生活者』に『感想・父を
弔う』を発表。5月には、帝国ホ
テルで『曠野の花』が上演され、
石丸梧平他が駆けつけ、好評を博
しました。

真実 一路の草二郎

草二郎には「文学志望の若者や
少壮作家のために門戸を開きた
い」との希望があり、昭和5年4
月、文芸誌『つばさ』初号を発行
しました。小説・戯曲・詩歌・随筆・
論文が寄せられ好評でしたが、な
ぜか翌年9月号で休刊しています。
もう一つ、草二郎には温めて来
た大願がありました。「西行・良
寛・愚庵（注5）、僧にして秀歌
を詠い、人々に敬愛された三歌人
を研究し、その真価を広めたい」。

詩歌や文献を読み、三歌人の遺跡
を訪ねては、その成果を『アララ
ギ』他の雑誌に発表、後日、歌人
別にまとめあげて出版しています。

昭和12年7月、恩師島木赤彦の
歌心を継承しようと、歌誌『あさ
ひこ』（朝日のこと）を創刊しま
した。大東亜戦の戦局が悪化した
昭和19年7月、「新聞雑誌統合令」
で『あさひこ』は休刊に追い込ま
れ、草二郎と家族は千葉県印旛郡
木下町に疎開します。ここで、水
田二反、畑三反と少しの家畜を
飼って、農家暮らしを送りました。
戦後の欠乏生活が続くなかで、草
二郎は『あさひこ』復刊を決意、
「吾々は歌によって立ち上がるう
と、会員に檄文を發しました。」

昭和21年1月、『あさひこ』復
刊号が配布されています。草二郎
は昭和29年1月25日、東京都豊島
区長崎二丁目で永眠、54歳の生涯
でした。

昭和58年3月27日、大坪草二郎

歌碑の除幕式が、歌誌『あさひこ』
縁故の人々と地元有志が集い、上
秋月八幡宮境内で開催されました。
碑面には「ふるさとにこの朝覚め
ぬ外面には馬にものいふ父の聲す
も」と、光子夫人の筆により、代
表歌が刻まれています。

（注1）『萬朝報』・明治・大正期の有力
新聞。明治25年に墨石涙香が東京で創刊
した日刊紙

（注2）『万葉集略解』・橘千蔭が著した
万葉全首の註釈本。寛政12年刊行

（注3）『古今和歌集』・最初の勅撰和歌
集で、紀貫之らが撰した。延喜5年

（注4）征箭・戦鬪用の矢

（注5）愚庵・天田愚庵。幕末、現在の
福島県に生まれる。15歳のとき戊辰戦争
にあい、行方不明になった両親と妹を探
して各地を流浪、再会を果たせず禅僧に
なった。正岡子規より先に万葉調の歌を
詠み、近代短歌に影響を与えた



▲大坪草二郎 歌碑

郷土が誇る日本芸術会員

画家 大内田 茂士

おおうち だ しげ し

執筆者 山崎 長太郎



▲大内田茂士（『大内田茂士画集 1933-1989』より転載）

生い立ち

大内田茂士は大正2年（1913年）、大内田茂吉・ハツの長男として朝倉郡大福村大字大庭（現在の大庭字乙王丸）に生まれました。

地元の小学校（現在の大福小学校）を卒業後、県立朝倉中学校（現在の朝倉高校）へ入学し、昭和6

年（1931年）3月に卒業。5年間の在学中に、京都の絵画専門学校出身の若くて情熱あふれる金田和郎先生の指導を受けました。熱心な指導によって、クラスの中で将来、金田先生のような画家になりたいという5人組ができ、茂士はその第一人者であったそうです。ほかの4人も約束どおり立派な画家として活躍しています。

茂士は9人きょうだいの長男で、弟妹のことを考えると自分だけ好きな絵の学校へは行けない、両親

に負担をかけてしまうと、ずいぶん悩みました。そしてついに軍人を志し海軍兵学校を受験しましたが、身体検査で不合格となり、1年間の浪人生活を送ります。8人の弟妹がいて、家では受験勉強もできないだろうと両親が心配し、隣村の志波村（現在の杷木志波）の円清寺に相談して寺の一室に下宿させました。

画家への夢ひろく

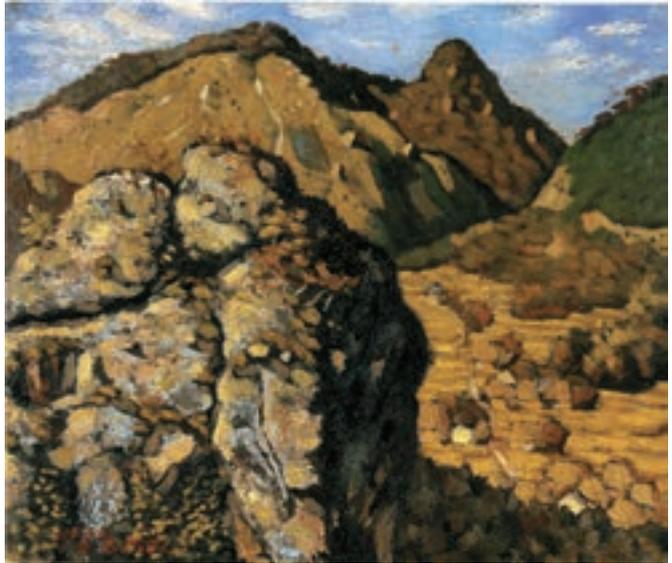
ある日、茂士の将来を決定するような偶然の出来事が起こりました。円清寺を訪ねてきた欧米帰りの画家・浜哲雄との出会いです。浜は茂士にパレットなどの用具を与え、好きなものを描くようにいわれた茂士は、即座に描きました。浜は茂士の才能を認め、軍人志望をやめて画家になるよう強く勧め、茂士の父にも会い納得させました。中学時代からの夢であり、仲間

との約束でもある画家への夢がいつべんに現実化したように感じました。

茂士はこのとき19歳でした。翌年、福岡在住の画家・山喜多二郎太、高島野十郎から直接、絵の指導を受けました。

23歳になると、小学校校長である父・茂吉の勧めで、宝珠山小学校で代用教員をすることになりました。宝珠山の豊かな自然の山里で、子どもたちと楽しく学び、遊び、キャンバスを背に毎日のように絵筆を握りました。

24歳になると、ようやく念願が叶って上京し、東京新宿絵画研究所で学びました。そして早稲田小学校で絵の教師になることができ、



▲大内田茂士「岩屋風景」(宝珠山小学校教員時代の作品)
(東峰学園蔵)

子どもたちに絵を楽しく教えるかわら、後に日本芸術院会員となった鈴木千久馬に師事し画家として技量を高めていきました。

絵の道ひとすじ

若き希望に燃える茂士の前途にはさまざまな困難がありました。自らの努力で一つひとつ克服していきました。しかし戦争という悪

夢だけは、どうすることもできませんでした。

昭和19年、茂士が31歳のとき軍隊に召集され、野戦高射砲83大隊に入隊。台湾で終戦を迎えました。そして昭和21年、焼野原となった東京に復員し、直ちに焼跡にアトリエを建て、画家の仕事を始めました。無一物の茂士は、毎日が戦争苦闘でした。しかし茂士は、画家としての仕事や夢に精根の続く限り励みました。

彼の画家としての努力と才能を認め、いち早く後援活動をした人がいました。それは、同郷の朝倉市長測の出身で、茂士の父の教え子でもある森部隆(元参議院議員・森部隆輔氏の弟)でした。森部は東大出身で、島根県知事のほか、台湾総督府総務局長を務めました。森部は茂士を台湾へ招き、台湾一周取材旅行を世話しています。また、茂士の絵画の販売にも力を貸

しました。

茂士は昭和18年2月に台北鉄道ホテルで個展を開催し、同年4月には台湾総督府の嘱託となりました。茂士は、この1カ月の台湾取材旅行が最も勉強になり、たいへん世話になったと、後に述べています。

やがて茂士の作品に対する理解者が次々と現れ、協力者、後援者となつて力強いバックボーンとなり、画家としての活動が盛んになりました。その中には田川市の炭鉱経営者や同郷の先輩(福岡県人会員)が数多くいました。昭和24年4月、正式に後援会が結成されました。

茂士は台湾取材旅行を始め、60歳を過ぎて7回も海外取材へ行き、スイスを始め10カ国を巡り歩きま

した。日本画壇でも活躍しました。特に示現会の設立のときには、九州

代表の画家として設立委員を務めました。設立後は、示現会の理事長として会の発展と会員の指導に努めています。朝倉高校出身の若い画家は、良き相談役として親しまれ尊敬する人物であったと記しています。

一方、日展では展覧会ごとに絵画を出品するだけでなく、審査員・評議員となりました。示現会・日展を活動の舞台として作品の出品・個展開催などを重ね、自ら研鑽を積んで新画境を開き、画家としての階段を着実に登り極めました。

茂士は美術大学や絵画専門学校で学ぶ機会はなく、ほとんど独学で写実的な構成と色彩の調和をはかる清新な油絵を身につけました。「日展の異端児」といわれながらも、常に新画境に挑み、さまざまな技法を凝らした大内田芸術を創りあげ、画壇では希有な存在として高く評価されています。

数々の名誉ある賞も受賞しました。「静物」が国展入選(昭和17年)、「隈」が文展入選(昭和18年)、「室内」が日展特選(昭和26年)、「秋の卓上」が日展内閣総理大臣賞(昭和59年)、日本芸術院賞・恩賜賞(昭和63年)などです。

これらが評価され、平成元年に日展理事に就任し、平成2年には日本芸術院会員となり大いに画壇での活躍が期待されていました。しかし病に倒れ、平成6年2月1

日、80年の生涯を閉じました。

死後のアトリエには、1500点もの貴重な作品が残されています。これだけの作品を残していた画家はほかにいません。茂士の日ごろの信念・行動が今更のごとく蘇ってきます。「絵描きは絵を残すことが大切だ。絵描きは絵を描いて食べられればいい。それ以上の絵を売るもんじゃない」という茂士の言葉が本来の画家の姿を現しています。

残すことが大切だ。絵描きは絵を描いて食べられればいい。それ以上の絵を売るもんじゃない」とい

う茂士の言葉が本来の画家の姿を現しています。

遺族の願い

画業の初期から長い年月にわたる応援のお礼として、田川市美術館には、茂士の残した貴重な作品のうち97点が寄贈されています。同美術館ではいろいろな文化行事が催されるたびに茂士の作品が展示されています。

また、残りの1251点は福岡県立美術館に寄贈され、鑑賞だけではなく研究資料として広く活用されています。県民の芸術文化振興に役立てて欲しいという遺族からの願いです。

偉大な画家・大内田茂士は、朝倉のみでなく福岡県民の誇る人物です。茂士の生き方、努力、研究そして何ものにも負けない精神力について、我々が学ぶことはたくさんあります。また、茂士の作品が身近に鑑賞できる日が来ることを一日千秋の思いで待っています。



▲大内田茂士「秋の卓上」
(昭和59年、日展内閣総理大臣賞受賞作品)

第十五代横綱

初代梅ヶ谷藤太郎

執筆者 平田利一

身長176^{センチ}、体重113^{キロ}、土俵成績116勝6敗（幕内20場所）勝率9割5分、歴代横綱で最高の成績を残し、引退後も相撲界発展に寄与した明治初期の大力士「第十五代横綱梅ヶ谷藤太郎」は、杷木志波の出身です。

怪童、藤太郎

藤太郎は1845年3月3日、志波村梅ヶ谷に生まれました。生まれつき体が大きく丸々として、れからも「ほていさん」と呼ばれ

可愛がられていました。お姉さん

が子守りをするとき、あまりにも

重たいので、遠くにいかないよう

に「挽き臼」にひもで結び付けて

遊ばせるのが日常でした。ある日

母親が野良仕事から帰ると、その

「挽き臼」を引きずり這いまわっ

ていて驚いたそうです。

幼児期の「挽き臼」の話は小さ

いときからいかに力持ちであった

かを示しています。

成長するにつれ力も強くなり、

また大食漢で人々を驚かせていま

した。藤太郎の後に食事をしようと

しても、全部平ら

げてしまっている

ので皆の食事がな

かったそうです。

あるとき奉公先

で山に行ったとき

のこと、朝早くか

らの仕事で腹をす

かせている藤太郎

に、奉公先のおか

みさんが「弁当お

いてあるから、お前先に食べてい

いよ」と言ったところ10人分の弁

当を全部食べケロリとしていた

といひます。

力は強いし素直で働き者なので

皆から可愛がられていましたが、

大食いのためどこの家でもしばら

く使うと、理由を付けて藤太郎を

追い返し長く置いてくれず、奉公



▲藤太郎が生後7カ月のころに引きずったという「挽き臼」。重さは17^{キログラム}もあります

先を転々としたと語り継がれてい

ます。人並み優れた体格と剛力に成長

した藤太郎は相撲の力をめきめき

つけていきました。14歳になった

ころには近所の大人を投げ飛ばす

ほどになっていました。

各地で行われる宮相撲大会に飛

び入りで参加し地元の強豪をなぎ



たおし賞品をさらい、筑前の宮相撲では彼に勝てるものはだれもいません。「俺より強いものはいない」と鼻たかだかの日々を送っていました。

藤太郎の人生を変えた 運命の出会い

次の年、藤太郎の将来を大きく変える運命の人と出会うことになります。その人物は、筑後の国、生葉郡千年村（うきは市吉井）の住人で四股名を「小桜」といいました。奉納相撲で対戦し、無敵のはずの「怪童藤太郎」があっけなく土俵の外に運び出されてしまっ

たのです。

相撲の奥深さ、難しさを感じた藤太郎はこれまでの自分を振り返り深く反省し、「小桜」に頭をさげて教えを乞いました。

「小桜」は、その素直な人柄に心動かされ、ほれこみ、心・技・体、相撲道の手ほどきをしてくれたそのうです。このときから本格的な相撲の修練が始まりました。

「小桜」との出会いこそ大横綱「梅ヶ谷藤太郎」誕生へのスタートでありました。

大阪相撲が筑前の国甘木にやってきましたとき、藤太郎は「梅ヶ谷」の四股名で飛び入りで参加し、並み居る本業の力士たちを次々と倒し「梅ヶ谷」の名は一躍近隣に響きわたりました。

このとき、甘木には大阪相撲の「湊部屋」の地方代理人、「不取川清助」が在住していました。「清助」

が藤太郎の優れた素質を見逃すはずはありません。

「小桜」、「不取川清助」や多くの人の励ましを受け、天性の素質は磨かれていき、藤太郎は大阪相撲の「湊部屋」に入門を決意します。1863年1月、18歳のときでした。

錦を飾る九州巡業

大阪へ行ってから毎日激しい稽古が続く、都会の環境に驚きながらも相撲をとることに集中し確実に力をつけていきました。3年後には、大阪相撲の幕内に、そのひとありと、京都・大阪・中国・九州地方まで「梅ヶ谷藤太郎」の名声は広がり人気力士になっていきました。

藤太郎が故郷を出て約4年、杷木志波に錦を飾る日が来しました。湊部屋一門は力士をつれて、筑前・

筑後・豊前・豊後を回る大相撲九州巡業に出発したのです。故郷を訪れた日、山々は赤々と紅葉し、燃えるように美しかったといいます。

沿道には、怪童と呼ばれた時代から応援してくれていたたくさん村人たち、世話になった人々が、大歓声で迎えてくれました。父・母・兄・姉の誇りに満ちた喜びは、藤太郎に至福のときを与えました。とりわけ父藤右衛門（73歳）の喜びはどんなであったか、祝宴の席で藤太郎のダブダブの羽織を着けて踊ったり、巡業について回ったと伝えられていることから推察できます。

父の死を乗り越え 大横綱へ

しかし故郷凱旋巡業は喜びとともに、巡業先での父の死という

悲しみを味わうことになりました。悲しみを乗り越え亡き父の供養を済ませ、藤太郎は巡業一行とともに大阪へとかえっていききました。

大阪にもどった藤太郎は以前にまして熱心に稽古に取り組みさらに大きく成長していききました。大阪相撲に入門以来負けたのはわずか4番だけという抜群の強さと技量で明治3年（1870年）、25歳の春、大関に昇進したのです。

大関という地位と名声を得た藤太郎は、「さらに自分を磨きたい」と東京相撲に移ることを決意し、明治3年12月、「玉垣部屋」に入門しました。

当時の相撲界は、東京相撲と大阪相撲の二つに分かれていて、東京相撲側は大阪で強く実力があっても認めず、大阪相撲の大関でも東京相撲の最下位（序の口）からのスタートとなりました。

東京の風は冷たく、大阪力士というだけで偏見やさげすみ、あざけりなどあくどい迫害を受けながら藤太郎は歯を食いしばって耐え、ひたすら相撲一筋心身の鍛練に励みました。その甲斐あって4年後、幕内力士となり初優勝を飾りました。30歳のときです。

相撲を愛し、稽古に励み、無類の強さを発揮する「梅ヶ谷」は人柄とともに多くの力士の尊敬をあつめ国民的英雄になり、相撲界の中心的存在になっていきます。

明治17年（1884年）正月場所ので9回目の優勝を全勝で飾った「梅ヶ谷」は、横綱免許の二大権威「吉田司家（熊本）」と「五条家（京都）」の両家から横綱免許があたえられています。その年の3月、天覧相撲が行われ初の横綱土俵入りを披露します。その日の対戦相手は前頭三枚目の「大達」、

水入り二度でも勝負がつかず30分を越す大熱戦で引き分けています。この2人の死闘は庶民の話題となり、相撲は爆発的なブームになりました。明治18年、「横綱は不敗たるべし」の名言を残し引退。42歳でした。

引退後も「雷部屋」を興し力士の育成、相撲協会の設立、前国技館の建設など、相撲道興隆に力をそそぎました。江戸末期、明治、

大正、昭和と4時代を相撲界一筋に生き頂点を極めた「第十五代横綱梅ヶ谷藤太郎」は、昭和3年（1928年）、静かに息を引き取りました。

杷木には梅ヶ谷顕彰会の皆さんの努力で「第十五代横綱梅ヶ谷藤太郎」の銅像や記念碑が数多く設立され功績が語り継がれています。



▲梅ヶ谷藤太郎の銅像（サンライズ杷木前）

郷土朝倉が生んだオリンピック選手

後藤

暢

執筆者

山崎 長太郎

第15回オリンピックヘルシンキ

大会と、第18回オリンピック東京

大会に、我が郷土朝倉市から日本を代表して水泳で大いに活躍した

高校生が2人います。

1人は当時高校3年生（18歳）

の後藤暢選手（比良松中→浮羽高）。

もう1人は当時高校1年生（16歳）

の森実芳子選手（杷木中→筑紫女

学園）です。

今回は、ヘルシンキ大会に出場

した後藤暢選手を紹介します。

郷土の誇り

銀メダリスト 後藤暢

後藤選手は、昭和27年（1952

年）、ヘルシンキ大会（フィンラ

ンド）で競泳男子100メートル自由形



▲後藤暢選手（写真提供：足立和子氏）

郎）は8分33秒5の素晴らしい記録で世界2位（1位はアメリカ）となり、表彰台上がり輝かしい銀メダルを胸に念願の日の丸を掲揚しました。



▲ヘルシンキオリンピック800メートル、第2位の賞状（資料提供：後藤暢氏）

この大会は、日本にとって戦後初めてのオリンピック参加で、ようやく世界の仲間入りができた、たいへん意義ある大会でした。しかも日本チームがメダルを獲得し、世界中の人々を驚かせ、日本中で喜びの声がうず

まき、各新聞社が競って第一面に大きく報道しました。

後藤選手は、昭和9年（1934年）

に出場し4位入賞（58秒5）。続いて、競泳男子800メートル自由形レースに出場し、日本チーム（鈴木弘、浜口喜博、後藤暢、谷口楨次

▲競泳男子（4人×200メートル）自由形リレー決勝で第3泳者後藤暢選手の力泳（写真提供：足立和子氏）





▲ヘルシンキオリンピック銀メダル、その他優勝メダル（資料提供：後藤暢氏）

に朝倉村恵蘇宿えそのしゆくに生まれました。幼少期のころはどこにもプールがなく、自宅のすぐ南側を流れる堀川や筑後川などで魚を捕ったりして遊んでいました。だれよりも泳ぎが上手な子どもでした。

昭和15年（1940年）、朝倉村立朝倉小学校に、福岡県で最初に25メートルプールができました。小学1年生だった暢少年より速く泳ぐ教師がいなかったことや、低学年のときに急流の筑後川を横断した

など多くの逸話が残っています。

比良松中学校に入学した暢少年は、めきめき力をつけ、水泳競技福岡県大会などでことごとく優勝するなど、その実力が広く認められるようになりました。

県立浮羽高校（現在の浮羽真館高校）在学中には、全国大会や国際大会で頭角を現し、優勝して「福岡・朝倉の後藤」の名前が新聞に載るようになり、脚光を浴びていきました。

昭和27年（1952年）、後藤選手がオリンピック水泳代表に内定したとき、毎日新聞（昭和27年6月23日付）は後藤選手を、「福岡県朝倉郡朝倉村出身、17歳、浮羽高3年生、独特の美しい泳法を持つている。選手団の最年少だが鈴木とともに大黒柱。最高記録100メートル58秒2、200メートル2分8秒0」と紹介しています。

第15回オリンピックヘルシンキ

大会に出場した浮羽高3年の後藤選手は、力を十分に発揮し、頭書の輝かしい成績を収め、我が郷土朝倉は大いに沸き感動しました。以降、「水泳の朝倉」の礎が築かれ全国大会に出場する中学生・高校生・大学生、実業団に入った人など、多くの選手が育ち活躍しました。

後藤選手は幼年期から、父・均の厳しい教育を受け、不屈の忍耐力を育んでいきました。日本大学を卒業後、西日本新聞社に入り、第一線のスポーツ記者として、また、運動部長として長く手腕をふるいました。

県下一早くできた小学校プール

朝倉小学校のプールは、後藤選手の手父・均（朝倉村村長を務めた）

が中心となり、同村の有志たちの協力と村民の理解によって県下でいち早く建設されました。後藤選手も練習に励んだこのプールは、昭和15年の竣工から昭和42年の同校合併閉鎖までの28年間、「水泳朝倉」の名を生む原動力となりました。

しかもプールの水はポンプ揚水ではなく、筑後川の水を堀川へ流し、その水を三連水車で汲み上げ、プールに揚水するというユニークな方式でした。このため、田植え前にプールを満水にして早くから泳げる利点もありました。

現在は校舎が移転し、プールは水泳には使われていませんが、壊されることなく残っています。三連水車や藤井養蜂場に訪れる人の目を楽しませるための水草栽培に利用されています。

また、藤井養蜂場の取り計らい

で、プールの屋根のつるし看板に「ヘルシンキオリンピックの銀メダリスト『後藤暢』選手が幼いころに泳いで力をつけた由緒あるプール」と記されています。

その後の調査によると、後藤選手之父・均は、近隣の学校のプール建設の設計をしたり、相談にのったりしており、朝倉地方の水泳発展の先駆者的役割を果たしています。

水泳一家

後藤家は、父・均を中心に長男・龍美、長女・多恵、次女・美智子、次男・暢、三女・美弥子、四女・和子で、親子きょうだいすべて水泳が上手なことで知られています。暢はオリンピック銀メダリスト、父・均は水泳発展の貢献者で、日本全国どこを探しても見られない、日本一の水泳一家です。



▲カップを手にする長男の龍美さん
(写真提供：後藤多恵氏)

長男・龍美は旧制浮羽中学校時代から明治大学時代に「自由形400メートルの後藤」として有名で、オリンピックの第一候補者でした。

オリンピック開会を父とともに楽しみにしていましたが、不運にも日本が戦争に突入し、その夢が消えてしまいました。

龍美は自分の夢が果たせないことを悟るや、青少年の水泳指導に力を尽くし、その結果、弟・暢選手を生むこととなりました。暢選手は、泳ぎの手ほどきは父から、

泳法は兄から厳しく指導されたと語っています。

長女・多恵は、旧制浮羽女学校のととき、兄・龍美から指導を受け、水泳に相当な自信を持っていました。女学校4年生のとき、筑後川で幼い兄弟を救助し、卒業時に特別賞として人命救助賞をもらい、以来、水泳に励みました。

次女・美智子は旧制浮羽女学校1年のとき、権威ある明治神宮水泳大会で準優勝し、オリンピック候補といわれていました。さらに、三女・美弥子、四女・和子も兄妹たちと同様、比良松中・浮羽高校水泳部でさまざまな大会に出場し、いちだんと水泳一家の名をあげています。

この父あってこの子等あり。この兄あって弟妹ありで、まさに郷土が誇る水泳一家です。

「浮高今昔」

昭和28年卒生

(浮羽高校PTA新聞から抜粋)

初めて後藤暢選手の水泳を見たのは1951年高2の夏、朝倉浮羽の対抗試合100・200メートルレース。それは生まれて初めて見る感動的な泳ぎでした。他選手の追隨を許さぬ目の覚めるようなスピードと美しいフォーム。まさに芸術でした。やがて世界のトップレベルとなる泳ぎだったのです。

敗戦から立ち上がる日、本人を勇気づけ希望を与えてくれた古橋、橋爪両雄と肩を並べて、我らの後藤暢も、ヘルシンキオリンピックへ出場するという興奮。誇りと喜びに沸きかえったものです。

ふるさと ゆかりの地

人物誌

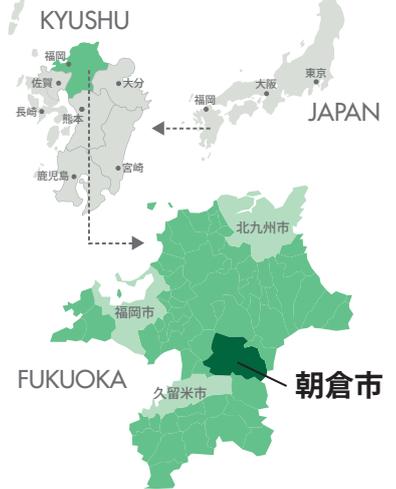
本誌で紹介した人物のゆかりの地(生まれ育った場所など)は次のとおりです。そのほか、歌碑や句碑など、関連する場所も地図上に示しています。

1	秋月種実	古処山	22	井上哲次郎	馬場町
2	黒田一成	三奈木 旧三奈木黒田家庭園	23	古賀益城	烏集院
3	栗山大膳	杷木志波、麻底良城	24	雑賀博愛	比良松
4	黒田長興	秋月城跡	25	坂本真鈴	朝倉高校
5	鬼木佐太夫宗直	桑原、五所権現社	26	緒方傳	山領町
6	黒田長舒	秋月城跡	27	篠崎兎城	杷木池田
7	間小四郎	秋月野鳥	28	原古処	古処山堂跡
8	香月恕経	下浦	29	佐野東庵	高原町
9	加藤新次郎	三奈木	30	原采蘋	古処山堂跡
10	馬場義統	上秋月・日向石	31	宮崎湖処子	三奈木
11	古賀百工	大庭	32	花田大五郎 (花田比露思)	持丸
12	松岡家三代	長田	33	豊島与志雄	小隈 豊島与志雄出生之地記念碑
13	佐野半平、弥平父子	高原町	34	金田和郎	朝倉高校
14	安陪庄作	三奈木	35	上野嘉弥太 (上野嘉太樞)	水町
15-A	梶原虎次	杷木池田	36	小野房子	杷木志波、志波宝満宮
15-B	熊本与市	三奈木	37	大坪草二郎	日向石
16	橋本郁太郎	相窪	38	大内田茂士	大庭
17	都合徳太郎	杷木久喜宮	39	梅ヶ谷藤太郎	杷木志波 梅ヶ谷藤太郎生家跡地
18	緒方春朔	緒方春朔屋敷跡	40	後藤暢	山田
19	調来助	大庭			
20	古賀良彦	入地			
21	井上節堂	長田、井上節堂頌徳碑			

※本誌で紹介した人物にゆかりのある場所



朝倉市の位置



秋月詳図

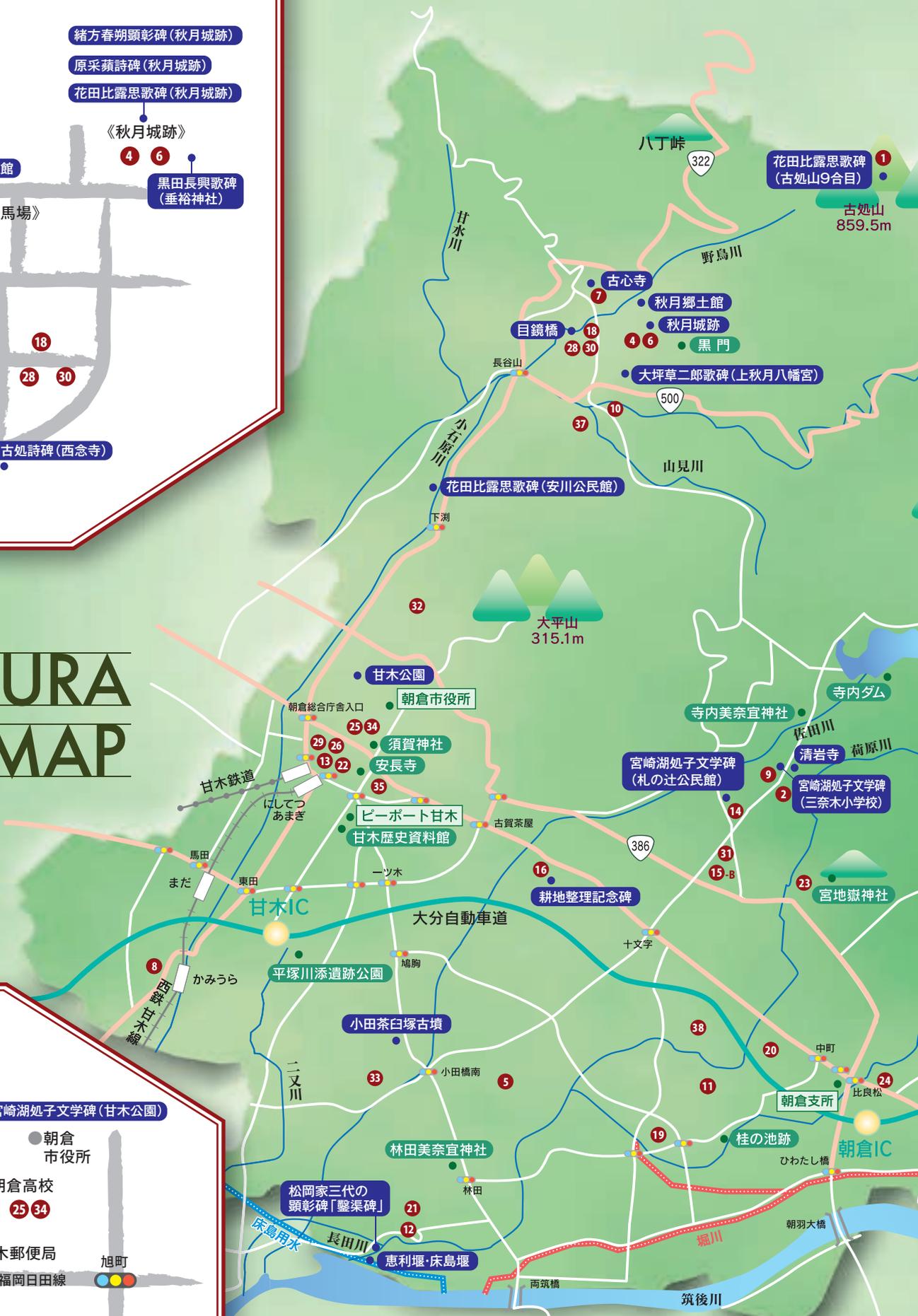
緒方春朔顕彰碑(秋月城跡)

原采蘋詩碑(秋月城跡)

花田比露思歌碑(秋月城跡)



ASAKURA CITY MAP



甘木詳図

宮崎湖処子文学碑(甘木公園)

朝倉市役所

朝倉高校

甘木郵便局

県道福岡日田線

安長寺

上野嘉太榎句碑(水町)

ピーポート甘木



ふるさと人物誌 関連年表

- 領国・藩の発展に尽力した人々
- 教育・研究に力を注いだ人々
- 政治・司法界で活躍した人々
- 文化・芸術の世界を彩った人々
- 産業振興に貢献した人々
- スポーツ界で活躍した人々
- 医学の進歩に寄与した人々

時代	西暦	年号	歴史的出来事 (●は本誌で紹介した人物関連)
室町	一五六七	永祿一〇	● 秋月種実が大友軍に勝利「休松の戦」(夜戦)
安土 桃山	一五七九	天正七	栗山大膳の父・利安、黒田一成の父・加藤重徳らが 黒田孝高(如水)を播州有岡城から救出
	一五八一	天正九	● 秋月種実と大友軍の戦い「原鶴合戦」
江戸	一五八七	天正一五	豊臣秀吉、九州親征へ全国統一(一五九〇年) ● 秋月種実、豊臣秀吉に降伏。日向高鍋に移封
	(一五九二 一五九八)	文禄元 慶長三	豊臣秀吉、「朝鮮出兵(文禄・慶長の役)」 壬申・丁酉の倭乱、 秀吉没(一五九八年)
	一六〇〇	慶長五	● 黒田長政、黒田一成らが出征 「関ヶ原の戦い」。徳川家康、全国制覇
江戸	一六〇二	慶長七	黒田長政、筑前五二万石を与えられる(黒田藩の成立)
	一六〇三	慶長八	● 黒田長政、黒田一成(美作)に下座郡一万二千石を 与える
	一六〇二	慶長七	徳川家康、征夷大将軍になる(徳川幕府の成立)
	一六〇二	慶長七	キリスト教禁止令
江戸	一六一五	元和元	「大阪夏の陣」で豊臣氏滅亡。「武家諸法度」発布
	一六一五	元和元	「二国一城令」発布
	一六一五	元和元	松尾城、麻底良城など筑前「六端城」破却
江戸	一六三三	元和九	● 黒田秋月藩の成立 黒田長政の遺言で、三男の長興に秋月五万石を分知
	一六三三	元和九	● 「黒田騒動」。栗山大膳が幕府に福岡二代藩主・忠之の 反逆を訴える

時代	西暦	年号	歴史的出来事 (●は本誌で紹介した人物関連)
江戸	一七八六	天明六	● 原古処、「稽古館」訓導になる
	一七八九	寛政元	● 緒方春朔、秋月藩医になる
	一七九〇	寛政二	● 古賀百工、山田堰大改修
	一七九六	寛政八	● 緒方春朔、種痘法を大成
	一八〇〇	寛政一二	福岡藩が博多、甘木、植木に「蠟座」を置く
	一八〇五	文化二	● 原古処、「稽古館」教授になる
	一八〇六	文化三	秋月藩、亀井南冥の「論語語出」を出版
	一八一〇	文化七	秋月「目鏡橋」完成
	一八一	文化八	秋月藩政変「辛未の変」 「織部崩れ」
	一八二二	文化九	伊能忠敬、九州測量(秋月、甘木、杷木にも宿泊、測量)
江戸	一八二五	文化一二	● 間小四郎、秋月藩「郡奉行」就任。財政再建を推進
	一八二五	文化八	● 松岡九郎次、湿抜水路「長田川」工事開始
	一八二六	文政九	● 原采蘋、父・古処の詩原稿を携え江戸へ出発。 約二〇年、江戸で作詩活動
	一八三〇	文政元	● 佐野東庵、高原町で町医者として開業(梅西舎)
	一八三三	天保三	黒田長元、秋月藩十代藩主になる(土佐の山内家より)
	一八三三	天保三	土井正就、大倉種周が「秋月封内図」を完成
	一八三四	天保五	江戸歌舞伎七代目市川団十郎、甘木で芝居興行
	一八三七	天保八	斎藤秋圃らが藩命で「島原陣図屏風」完成 (乱後二〇〇年)
	一八四五	弘化二	● 間小四郎、失脚。玄海島へ流罪

一七八五	天明五	●黒田長舒、秋月藩八代藩主になる(日向高鍋の秋月家より)。福岡藩儒・亀井南冥を秋月に招へい
一七八三	天明三	「天明の飢饉」
一七七五	安永四	秋月藩学問所(後の「稽古館」)創立
一七六四	明和元	●古賀百工らが山田堰、切貫水門、堀川改修。新堀川開通
一七六三	宝暦一三	遠藤幸左衛門、黄金川で「川苔」栽培開始。 筑前特産「寿泉苔」
一七三三	享保一七	「享保の飢饉」(秋月藩内餓死者二千人余)
一七二九	享保一四	●篠崎兎城没。後年、後藤遊五が兎城の俳書「門鳴子」刊行
一七二二	享保七	山田堰改修、堀川への切貫水門完成
一七二二	正徳二	床嶋堰・恵利堰完成。下座郡は湿地化し困窮
一七〇九	宝永六	●鬼木佐太夫宗直、三奈木五代当主・一利公から桑原の社「五所権現」に祀られる
一七〇三	元禄一六	福岡藩儒・貝原益軒、「筑前国統風土記」完成
一七〇二	元禄一五	松尾芭蕉の俳諧紀行「おくのほそ道」出版
一六九九	元禄一二	赤穂浪士、吉良邸討ち入り「元禄忠臣蔵」
一六九八	元禄一一	「甘木祇園踊り」始まる。甘木盆俄(歌舞伎)へ発展 野坡に入門
一六九四	元禄七	●志太野坡、九州俳諧行脚(以後十数回)。篠崎兎城、妻子を刺殺し自害 ●鬼木佐太夫宗直、主君(三奈木の黒田一貫)を諫めて
一六七二	寛文一二	●鬼木佐太夫宗直、下座の目付役となる
一六六三	寛文三	筑後川本流から農業用水を取水。山田堰、堀川着工
一六三九	寛永一六	ポルトガル船来航禁止令(「鎖国」の完成)
一六三八	寛永一五	●秋月藩(黒田長興)、約二千人出陣(戦死者三五人、負傷者三四五人)
一六三七	寛永一四	天草・島原で「島原の乱」勃発、黒田藩出兵
一六三三	寛永一〇	●「黒田騒動」の幕府評定決定。黒田藩は安泰、栗山大膳が奥州盛岡に配流

一八八六	明治一九	「学校令」公布。甘木獣医学校設立
一八八四	明治一七	●井上哲次郎、哲学研究のためドイツ留学。帰国後、東京帝国大学教授就任(一八九〇年)
一八八二	明治一五	●初代梅ヶ谷藤太郎、第一五代横綱に。翌年引退し「十代雷権太夫」親方になる
一八八一	明治一四	●松岡家三代の顕彰碑「鑿渠碑」建設 ●加藤新次郎、福岡県会議員に当選 ●井上哲次郎らが「新体詩抄」出版(近代詩の成立)
一八八〇	明治一三	●安藤庄作、製糸会社「月恒社」設立
一八七九	明治一二	●香月恕経、県立甘木中学校校長となる ●佐野弥平、国立十七銀行初代頭取就任 「教育令」公布
一八七七	明治一〇	白井六郎「最後の仇討ち」
一八七六	明治九	「西南戦争」(西郷隆盛らの反政府反乱)
一八七四	明治七	●井上節堂、長田小学校で教鞭を執る
一八七三	明治六	「魔刀令」(「神風連の乱」)「秋月の乱」(反政府反乱)
一八七二	明治五	●筑前竹槍一揆(嘉麻郡福岡各地で打壊し) ●安陪庄作、養蚕業の調査研究開始
一八七一	明治四	「学制」公布 「廃藩置県」(福岡県の成立)
一八六九	明治二	●佐野半平、福岡藩財政顧問(御銀用受持)就任
一八六七	慶応三	「大政奉還」(明治維新)
一八六五	慶応元	●梶原虎次、杷木池田に生まれる
一八六〇	万延元	「桜田門外の変」
一八五九	安政六	●初代梅ヶ谷藤太郎、大阪相撲の「湊部屋」に入門 ●秋月藩初代藩主・黒田長興、「垂裕明神」として祀られる(没後二〇〇年)
一八五八	安政五	日米修好通商条約締結(開国。「安政の大獄」)
一八五二	嘉永五	●佐野東庵、「梅西舎詩鈔」刊行
一八四八	嘉永元	●原采蘋、江戸から秋月へ帰郷。屋永、山家(筑紫野市)に移り住む

時代	西暦	年号	歴史的出来事 (●は本誌で紹介した人物関連)
明治	一八九九	明治三二	「大日本帝国憲法」発布。 「市制・町村制」施行(甘木朝倉は一町三村に) 「九州鉄道」博多〜久留米間開通
	一八九〇	明治三三	●宮崎湖処子、「故郷」を『国民の友』に連載
			第一回衆議院議員選挙
	一八九〇	明治三三	●香月怒経、第一回衆議院議員選挙で当選
			●宮崎湖処子、「帰省」刊行
	一八九二	明治三五	組合立久喜宮高等小学校設立
	一八九四	明治二七	日清戦争起こる(〜一八九五年、郡内出征者二四六六人) 上座・下座・夜須郡が統合されて「朝倉郡」になる
	一八九六	明治二九	●都合徳太郎、久喜宮村会議員に当選。 翌年、朝倉郡会議員に当選。
	一八九七	明治三〇	島崎藤村、「第一詩集『若菜集』」出版
	一八九九	明治三二	「耕地整理法」施行
	一九〇一	明治三四	郡立実業補習学校設立
	一九〇三	明治三六	●二代目梅ヶ谷藤太郎、第二十代横綱となる
一九〇四	明治三七	日露戦争起こる(郡内出征者二六〇七人、戦病死者一〇九人)	
一九〇五	明治三八	●熊本与市、三奈木に生まれる	
一九〇七	明治四〇	●都合徳太郎、久喜宮のポンプ揚水路完成	
一九〇八	明治四一	県立朝倉中学校設立	
		「朝倉軌道」二日市〜甘木間で営業開始	
一九〇九	明治四二	●花田大五郎、京都帝国大学卒業。大阪朝日新聞社入社	
		●東京両国に「国技館」完成。雷権太夫、建設委員長を務める	
一九一〇	明治四三	●相窪耕地整理事業開始。橋本郁太郎、委員長になる	
		郡立朝倉女子実業学校設立	
一九一一	明治四四	「両筑橋」開通	
一九一二	明治四五	●相窪水源池で揚水ポンプ始動	
一九一二	大正元	●加藤新次郎、衆議院議員に当選	
一九一四	大正三	「両筑軌道」甘木〜田主丸間開通。翌年、甘木〜秋月間開通 第一次世界大戦起こる(〜一九一八年)	

時代	西暦	年号	歴史的出来事 (●は本誌で紹介した人物関連)
昭和	一九三二	昭和六	「満州事変」
	一九三三	昭和七	「五・一五事件」(海軍将校らが犬養首相らを殺害、政党内閣制の崩壊)
			●小野房子、俳句誌『ホトトギス』に初入選
	一九三三	昭和八	●古賀益城らが「朝倉郷土研究会」を結成 『研究機関紙』朝倉』刊行
	一九三六	昭和一一	「二・二六事件」(陸軍将校らのクーデター未遂事件) 「盧溝橋事件」(上海事変)〜日中戦争の開始
	一九三七	昭和一二	大刀洗航空機製作所(民間)開設
			●小野房子、句誌『鬼打木』創刊
	一九三九	昭和一四	●大坪草二郎、歌誌『あさひこ』創刊
			国鉄(省線)「甘木線」基山〜甘木間開業
	一九四〇	昭和一五	ドイツ軍のポーランド侵攻(第二次世界大戦へ)
			●川端茅舎、九州俳諧旅行(甘木〜志波訪問)
	一九四一	昭和一六	大刀洗陸軍航空廠・大刀洗陸軍飛行学校開設
●朝倉小学校にプール竣工			
一九四二	昭和一七	太平洋戦争起こる	
一九四二	昭和一七	●調来助、長崎医科大学教授就任	
		●古賀良彦、レントゲン胸部間接撮影法開発	
一九四三	昭和一八	●東方会の中野正剛、割腹自殺(東條首相を批判)	
一九四五	昭和二〇	大刀洗空襲、沖繩戦、広島・長崎に原爆投下。太平洋戦争終結	
		●調来助、長崎で被爆者の治療・救済活動	
一九四六	昭和二二	公民館設置に関する文部省次官通達	
		「日本国憲法」公布。『農地改革』など諸改革の進行	
一九四七	昭和二三	●高浜虚子、上野嘉弥太宅に宿泊	
一九四九	昭和二四	●緒方傳、甘木公民館主事として勤務。一九四九年から郷土史講座開設	
		●花田大五郎、福岡商科大学(現在の福岡大学)学長就任	

参考文献・資料一覧

ふるさと人物誌の編纂にあたり、多くのみなさまから資料の提供にご協力いただき、また、貴重なご意見もいただきました。ありがとうございました。

領国・藩の発展に尽力した人々

- 1 秋月種実
 - ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 上巻』甘木市史編さん委員会、1982年
 - ・三浦末雄著『物語秋月史 上巻』（財）秋月郷土館、1966年
 - ・安田尚義著『高鍋藩史話』高鍋町長 神代勝忠、1968年
 - ・吉永正春著『九州戦国史』葦書房、1987年
- 2 黒田一成
 - ・安陪光正編『三奈木村史資料 第一巻』西日本新聞社出版部、1975年
- 3 栗山大膳
 - ・杷木町史編さん委員会編『杷木町史』杷木町史刊行委員会、1981年
 - ・平田重雄著『杷木の昔ばなし』葦書房、1979年
- 4 黒田長興
 - ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 上巻』甘木市史編さん委員会、1982年
 - ・甘木市史編纂委員会編『甘木市史資料 近世編第一集』甘木市役所、1983年
 - ・三浦末雄著『物語秋月史 中巻』（財）秋月郷土館、1968年
- 5 鬼木佐太夫宗直
 - ・郷土史金川編纂委員会編『郷土史 金川』郷土史金川刊行委員会、2010年
 - ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
- 6 黒田長舒
 - ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 上巻』甘木市史

問小四郎

- ・編さん委員会、1982年
- ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
- ・田代量美著『筑前城下町 秋月を往く』西日本新聞社、2001年
- ・三浦末雄著『物語秋月史 下巻』（財）秋月郷土館、1972年
- 7 問小四郎
 - ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 上巻』甘木市史編さん委員会、1982年
 - ・甘木市史編纂委員会編『甘木市史資料 近世編第二集』甘木市役所、1983年
 - ・三浦末雄著『物語秋月史 下巻』（財）秋月郷土館、1972年

政治・司法界で活躍した人々

- 8 香月恕経
 - ・井口実編『馬田を語る』『馬田』刊行会、1968年
 - ・香月恕経著、香月春蔵編『晦処遺稿』香月梅外、1939年
 - ・郷土史馬田編纂委員会編『郷土史馬田』郷土史馬田刊行委員会、1992年
 - ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
 - ・田中正志編『香月恕経翁小伝』香月恕経翁顕彰会、1981年
- 9 加藤新次郎
 - ・安陪光正編『三奈木村史資料 第一巻』西日本新聞社出版部、1975年
 - ・加藤新吉著『三奈木村の生いたち』加藤村長遺稿出版委員会、1958年
 - ・中村浩理著『筆頭株主と第十七国立銀行 黒田藩大老

産業振興に貢献した人々

- 10 馬場義統
 - ・『朝倉新聞』（第344号、2000年9月7日付）
 - ・馬場義統追想録刊行会編『馬場義統追想録』馬場義統追想録刊行会、1979年
- 11 古賀百工
 - ・荻八郎著、佐野至編『あさくら町の歴史ものがたり』朝倉町教育委員会、1989年
 - ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
 - ・鶴田多々穂著『山田井堰 堀川三百年史』山田堰土地改良区、1981年
- 12 松岡家三代
 - ・『朝倉郡誌』交通土木編（稿本）
 - ・甘木近世古文書研究会編『下座郡湿抜二筋普請留書（甘木市史資料）』甘木市教育委員会、1993年
 - ・荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部、1929年
 - ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
 - ・村誌「ひなしろ」編さん委員会編『村誌ひなしろ』村誌「ひなしろ」編さん委員会、1999年
 - ・『福岡県史資料』第一集（福岡藩民政誌略）福岡県、1932年
 - ・松岡家資料
- 13 佐野半平、弥平父子
 - ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981年
 - ・伊藤道保編『筑紫遺愛集』、1868年
 - ・佐野家資料
 - ・中村浩理著『肥筑豊州志』福岡県文化財資料集刊行会、1971年
 - ・福岡県朝倉郡教育会編『朝倉郡郷土人物誌』福岡県朝倉郡教育会、1926年

14 安陪庄作

- ・安陪光正著『安陪氏の系』私家本、1994年
- ・安陪光正編『三奈木村史資料 第一巻』西日本新聞社出版部、1975年
- ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981年
- ・加藤新吉著『三奈木村の生いたち』加藤村長遺稿出版委員会、1958年

15 梶原虎次・熊本与市

- ・梶原カヲル聞き取り記録(2010年)
- ・『西鉄ニュース』(第318号)西日本鉄道広報室、1985年
- ・札立いさむ著『甘木絞り 熊本与市(博多の職人シリーズNo4)』(博多ぼってん編集部『博多ぼってん』第110号所収)博多坂店会、1983年
- ・『翠』(第60号)見上グループ、1986年

16 橋本都太郎

- ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981年
- ・古賀益城編『あさくら物語』あさくら物語刊行会、1963年
- ・耕地整理地下水利用創設碑
- ・週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史』朝日新聞社、1981年
- ・立石小学校社会科部『相のくぼのかん水き』(松岡嘉作氏聞き取り資料)、1961年
- ・立石村史の碑
- ・中尾清編『雑記 たていし』立石公民館、1990年
- ・橋本家資料
- ・村田昇・神保信一監修『みんなのどうとく 4年』(福岡県版)学習研究社、1985年
- ・都合徳太郎
- ・把木町史編さん委員会編『把木町史』把木町史刊行委員会、1981年

医学の進歩に寄与した人々

18 緒方春朔

- ・熊本正熙著『吾国の種痘と緒方春朔』熊本正熙、1977年

- ・富田英壽著『種痘の祖緒方春朔』西日本新聞社、2005年
- ・三浦末雄著『物語秋月史 下巻』(財)秋月郷土館、1972年

19 調来助

- ・宿輪亮三著『長崎医人伝』宿輪亮三、2004年
- ・調来助・吉澤康雄著『医師の証言 長崎原爆体験』東京大学出版会、1982年

20 古賀良彦

- ・岡田光治著『X線CTの先駆者 高橋信次伝』医療科学社、1995年
- ・加藤治文監修『防ぐ、治す 肺ガンの最新治療』講談社、2005年
- ・『久留米大学同窓会会報』(第50号)久留米大学同窓会、1967年
- ・古賀恒喜聞き取り記録(2007年)

教育・研究に力を注いだ人々

21 井上節堂

- ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981年
- ・加戸宏平編『教育全鑑 九州編』地方人事調査会、1985年
- ・学制発布百年記念 甘木・朝倉教育史編さん委員会編『甘木朝倉教育史』甘木市教育委員会、朝倉郡町村教育委員会連絡協議会、1975年
- ・村誌「ひなしろ」編さん委員会編『村誌ひなしろ』村誌「ひなしろ」編さん委員会、1999年

22 井上哲次郎

- ・井上哲次郎著『井上哲次郎自伝』富山房、1973年
- ・井上哲次郎著『懐旧録』春秋社松柏館、1943年
- ・井上哲次郎著、高蘭進監修、高蘭進・磯前順一編『井上哲次郎集』(第一巻、第九巻)クレス出版、2003年

23 古賀益城

- ・古賀益城著『椰かげ』(転居記念誌)古賀益城、1968年

24 雑賀博愛

- ・石瀧豊美著『大西郷全傳』の著者 雑賀博愛について

- ・(福岡県地域史研究所編『県史だより』(第113号)所収)西日本文化協会、2001年
- ・雑賀千尋著『鹿野翁をしのぶ』私家本、1996年
- ・雑賀博愛著『雑賀鹿野歌集』雑賀博愛先生三十周年記念歌集刊行会、全国師友協会、1977年
- ・田村洋三著『沖繩の島守』中央公論新社、2006年

25 坂本真鈴

- ・坂本真鈴著『朝倉郡誌 考古編』(稿本)

26 緒方傳

- ・甘木公民館報『あまぎ』(1953年12月号)
- ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 上巻』甘木市史編さん委員会、1982年
- ・甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981年
- ・甘木歴史資料館だより『温故』(第46号)甘木歴史資料館、2007年
- ・甘木山安長寺資料
- ・石田勝世聞き取り記録(2010年)
- ・緒方傳(大津屋)家文書158、163、244、写真21(甘木歴史資料館蔵)
- ・緒方良彦著『リソースフル・マン』(緒方良彦著作集第一巻)葉摘舎、2000年
- ・緒方良彦、牧子聞き取り記録(2010年)
- ・佐野至聞き取り記録(2010年)
- ・『市報甘木』(第23号、第109号、『市政だより甘木』(第110号、第124号)、甘木市役所、1957年1月、1966年5月)
- ・白水幸子、豊原妙聞き取り記録(2010年)
- ・徳田一矩編『甘木市のあゆみ』(写真集)、1955年
- ・豊原徳、マサ子聞き取り記録(2010年)
- ・矢野毅聞き取り記録(2010年)

文化・芸術の世界を彩った人々

27 篠崎兎城

- ・井手直(把木俳句会講師)資料
- ・大石實編著『福岡県の文学碑』古典編『海鳥社、1999年
- ・大内初夫著『俳人 篠崎兎城』把木町教育委員会、1988年

篠崎兎城撰著「門鳴子 兎城撰」(翻刻版) 杷木町教育委員会、1988年

杷木町史編さん委員会編「杷木町史」杷木町史刊行委員会、1981年

28 原古処

古賀益城編「あさくら物語」あさくら物語刊行会、1963年

三浦末雄著「物語秋月史 下巻」(財) 秋月郷土館、1972年

山田新一郎編「原古処、白圭、采蘋小傳及詩鈔」秋月公民館、1951年

29 佐野東庵

緒方無元編「郷土先賢詩書画集」郷土先賢顕彰会、1975年

近藤思川著「郷土詩話」思川建碑期成会、1965年

近藤思川・緒方水祭子著「佐野東庵先生小伝」佐野東庵先生顕彰会、1958年

佐野東庵著「梅西全詩鈔」京都出雲寺松柏堂、1852年

30 原采蘋

甘木歴史資料館だより「温故」(第43号) 甘木歴史資料館、2006年

古賀益城編「あさくら物語」あさくら物語刊行会、1963年

田代政采編「秋月史考」秋月史考刊行会、1951年

三浦末雄著「物語秋月史 下巻」(財) 秋月郷土館、1972年

山田新一郎編「原古処、白圭、采蘋小傳及詩鈔」秋月公民館、1951年

吉木幸子著「原采蘋の生涯と詩」甘木市教育委員会、1993年

31 宮崎湖処子

安陪光正編著「三奈木村史資料 第二巻」安陪光正、1979年

古賀益城編「あさくら物語」あさくら物語刊行会、1963年

山田博光編「民友社思想文学叢書第五巻 民友社文学集(一)」「三二書房、1984年

32 花田大五郎

花田大五郎著「五高時代の思出」日本談義社、1957年

花田比露思著「歌に就ての考察」紅玉堂書店、1924年

林光雄編「あけび 花田比露思追悼号」あけび発行所、1968年

福岡大学五十年史編集委員会編「福岡大学五十年史 下巻」福岡大学、1987年

持丸花田家聞き取り記録(2008年)

法政大学大原社会問題研究所編「大原社会問題研究所五十年史」法政大学大原社会問題研究所、1970年

渡邊フミエ資料

豊島与志雄

甘木市史編さん委員会編「甘木市史 下巻」甘木市史編さん委員会、1981年

古賀益城編「あさくら物語」あさくら物語刊行会、1963年

関口安義著「評伝豊島与志雄」未来社、1987年

京都国立近代美術館編「金田和郎回顧展」京都国立近代美術館・甘木歴史資料館、1991年

福岡県立朝倉中学校第33回生同窓会事務局編「朝中集 立つて五十年」(福岡県立朝倉中学校第33回生同窓会誌)、1995年

福岡県立朝倉中学校第33回生「一原」(同窓会誌)、1987年

上野嘉弥太

甘木市史編さん委員会編「甘木市史 下巻」甘木市史編さん委員会、1981年

岩下四十雀著「虫の居どころ」岩下四十雀、2002年

上野嘉太植著「句集 黄檗帖」上野たか、1969年

上野嘉壽作成「甘木酒屋蠅屋 上野家系譜」

上野家資料(上野寿三蔵)

齋藤孝著「にほんこであそぼ 雨ニモマケズ」集英社、2005年

竹重雅介著「朝倉宝生記」黒田一雄とその門流」朝倉宝生記出版会、1976年

長野敏樹著「朝中原林 朝倉中学・高校物語」西日本新聞社、1979年

尾野実信著「黒田一雄略伝」(竹重雅介著「朝倉宝生記」

黒田一雄とその門流」所収)

36 小野房子

小野房子著「しのび草」(小野房子遺句集) 池田みちゑ、1984年

37 大坪草二郎

大坪草二郎著「短歌讀本」錦城出版社、1942年

助川信彦編著「大坪草二郎 その歌と酒」刀水書房、1988年

38 大内田茂士

甘木歴史資料館編「大内田茂士回顧展」甘木歴史資料館、1995年

大内田茂士著「大内田茂士画集1933-1989」求龍堂、1989年

「大内田茂士画歴」

「大内田茂士 田川市美術館所蔵品目録」田川市美術館、1995年

福岡県立美術館編「大内田茂士遺作受贈目録」福岡県立美術館、1995年

スポーツ界で活躍した人々

39 梅ヶ谷藤太郎

第15代横綱初代梅ヶ谷顕彰会編「第十五代横綱 初代梅ヶ谷藤太郎略伝」第15代横綱初代梅ヶ谷顕彰会、1997年

第15代横綱初代梅ヶ谷顕彰会資料

40 後藤暢

「朝日新聞」(1952年7月28日付)

「郷土の誇り 銀メダリスト 後藤暢選手をたたえて」(後藤暢選手顕彰資料、朝倉町体育協会作成)、2006年

後藤暢ほか聞き取り記録(2009年)

「西日本新聞」(1952年7月28日付、同7月29日付)

「毎日新聞」(1952年6月23日付、同7月30日付)

※本誌に掲載した写真等には、傷みがあるため一部修正(色調補正・トリミング等)を行つたものがあります。

朝倉市ふるさと人物誌 編纂委員会 委員紹介

委員長

三浦 良一 昭和7年(1932年)生まれ。秋月野鳥在住

委員

安陪 悟 昭和12年(1937年)生まれ。三奈木在住

川端 正夫 昭和34年(1959年)生まれ。頓田在住

後藤 正明 昭和29年(1954年)生まれ。堤在住

実藤 輝夫 昭和22年(1947年)生まれ。甘木在住

佐野 至 昭和2年(1927年)生まれ(甘木)

平田 利一 昭和14年(1939年)生まれ。杷木池田在住

松本 憲明 昭和19年(1944年)生まれ。比良松在住

宮崎 成光 昭和20年(1945年)生まれ。三奈木在住

八尋 節夫 昭和3年(1928年)生まれ。草水在住

山崎長太郎 昭和2年(1927年)生まれ。入地在住

編纂委員からひと言

三浦 良一

秋月郷土館に勤務し、郷土の歴史に関心が膨らみました。秋月は歴史の宝庫。まだまだ紹介したい人物は多士済々です。

安陪 悟

「自分のふるさとを大切に」という思いは「愛郷無限」という言葉で私の心に。今回、ふるさとの先人を執筆できたことは、幸せでした。

川端 正夫

ふるさと人物誌の編纂を通じて、尊敬すべき多くの先人たちに接することができ、大変勉強になりました。

後藤 正明

ふるさとの歴史について考える機会を与えていただき感謝します。今回、世代交代の中で、市域資料の保存がいかに大切かを痛感しました。

実藤 輝夫

「歴史とは現在と過去との対話である」(E・H・カーの言葉)。美しき私たちの郷土が生んだ、優れた「人物」を偲び、語り合っていただければ幸いです。

平田 利一

編纂委員として、資料集め、原稿執筆に取り組むうちに、改めて郷土の歴史に興味を持ち、その素晴らしさに気づきました。

松本 憲明

少年のころ、郷土の歴史が知りたくて、古賀益城先生を訪ねました。その感激が持続して、今回は『ふるさと人物誌』に参加しました。

宮崎 成光

郷土の先人の生き方、考え方、業績などを調べるなかで、私欲にとらわれない大きな心を知ることができ、良い勉強になりました。

八尋 節夫

わが郷土におられた先人の人となりを学びとり、立志勉勵する若人の出現を期待したいと思います。

山崎長太郎

私たちの郷土に世界的な研究や活動をした先輩たちがいることを知っていただき、先輩たちの生き方から何かを学んで欲しいと思います、執筆しました。

編集後記

市報「広報あさくら」に郷土の先人たちの功績を紹介する「ふるさと人物誌」の連載を開始したのは、朝倉市誕生から4カ月後の平成18年7月でした。編集にあたり、9人の方に編集委員を委嘱し「ふるさと人物誌編集委員会」をつくり、甘木・朝倉・杷木地域から紹介する人物の選定を行いました。

執筆は各編集委員にお願いし、資料収集、聞き取り調査等を精力的に行っていたいただきました。途中で委員の交代もあったため、延べ11人の委員に執筆に携わっていただいたこととなります。

平成23年4月、合計40回で44人の人物を紹介し市報の連載を終了しましたが、5年間の事績を冊子として取りまとめたものが本誌です。冊子制作にあたり、文章や資料は基本的にそのまま活用しながら、44人の人物の功績を7つの分野に分類して紹介するとともに、地図や歴史年表を加えるなどの工夫をしました。文献・資料等の調査・確認に努めました。不備な点については、ご指摘いただければ幸いです。

最後に、執筆いただいた編集委員をはじめ、資料の提供などにご協力いただいたみなさまに深くお礼申し上げます。

朝倉市ふるさと人物誌編集委員会事務局

事務局紹介

企画政策課長	秋穂 修實
広報統計係長	伊藤 文枝
広報統計担当	平井謙一郎
元事務局（担当順、当時の役職名）	
企画課長	井上 恒夫
企画政策課長	内海 英治
同	牟田 芳高
同	藤本 具彦
同	高良 恵一
企画政策課長補佐（広報統計係長）	
舟木 良子	
広報統計担当	栗野 紀彦
同	平田 龍次

ふるさと人物誌

朝倉に光を掲げた人々

平成24年3月発行

編集 朝倉市ふるさと人物誌編集委員会
発行 朝倉市役所
〒838-8601
福岡県朝倉市菩提寺412-2
電話 0946-22-1111（代表）

印刷 株式会社 四ヶ所
〒838-8512
福岡県朝倉市馬田336
電話 0946-22-2369（代）

2022
人物誌

